ＩＳ　～クラスメイトは全員男～

三羽烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～　クラスメイトは全員男　～

【Ｎコード】
Ｎ７９９４Ｘ

【作者名】
三羽烏

【あらすじ】
遊んでいると突然意識を失った主人公とその友人。目が覚めた時、彼らの世界はＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜の存在する世界に変わっていた！？
オリ主かつオリジナルＩＳ、オリキャラ多数となっております。

1話　クラスメイトは全員男

「なんだかんだ言ってもさ、やっぱＩＳ面白いわ」

表紙を黒の文庫カバーで隠したラノベ――ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞を読みながら友人の藤原はそう言った。

「そうか？　……悪くはないとは思うんだけど、主人公がいかにもアレな鈍感キャラすぎてちょっとなぁ……」

インフィニット・ストラトス。通称ＩＳ（アイエス）。

女性にしか反応しない兵器「インフィニット・ストラトス」を“何故か”起動させることができた主人公「織斑一夏」は、ＩＳの操縦者を育成するための学校・ＩＳ学園に強制入学させられることになってしまう……という内容のライトノベルだ。

ＩＳは本来女性にしか反応しない兵器。その学校であるＩＳ学園は当然、女子生徒しかいない。女の花園に男が一人……なんつーか、『典型的なハーレム系のエロゲーから１８禁成分だけ抜きました』というのが、初めてあらすじを聞いた時の第一印象だった。はいはい、エロゲエロゲ。

「そんなのハーレム系の主人公だと大抵そうだろ。主人公が聡いと成立しねぇじゃん。誰かとくっついて即終了。てかさ、逆に相手の気持ちに気づいてるのに答えも出さずに弄ぶ最悪な奴になっちまうぞ」

「まぁ、……確かに」

最もな話である。

そもそも一夏はスペックだけ見ればトンデモない。顔は姉に似て

整っている、ぶっちゃけイケメン。飄々として見えるが実は熱い性格の持ち主。剣術の才能もあり、家事スキルも高い。これで鈍感なのと作中で最弱（？）であることを克服したらもはや完璧超人だ。第一部んときの夜神月にも匹敵するパーフェクトっぷり。ワンサマーさん嫌いじゃないわ。

勿論、主人公が誰か特定の女性を一途に思っていて、様々な困難を乗り越えながら最後には結ばれる。あるいは中盤で両想いになった後のドタバタを書いたラノベもあるにはあるが、それはもうハーレムとは言わない。

「てか小野田はアニメしか見てないだろ。原作読め原作！　ＩＳに限らず、アニメじゃ省かれたり尺の都合で書けない独白とかも書かれてるから」

「とりあえずｗｉｋｉと１巻だけは読んだよ」

「……最新刊まで読めよ。貸してやるから」

「読もうとは思ってるが時間がないの。あっ！　ゼロ魔は読んだぞ、とりあえずアルビオンの７万戦のとこまで」

「へー」

１巻のルイズがウザいのと才人の行動がアホすぎて読むのやめようかと思ったが、だんだんと面白くなってスラスラ読めた。途中から才人やルイズの言動もあんま気にならなくなったし、面白いです。

「ハーマイオニーに踏まれたいっていう作者の欲望を書き連ねたのがゼロ魔だからな」

「ああ、…そうなんだ」

……ノボル先生大丈夫だろうか。もう少しでゼロ魔完結だし頑張って欲しい。

「てか、そもそもＩＳを知ったきっかけが二次のＳＳだったからさー。アニメと原作読んで驚いたわ。一夏の性格とか色々と……」
「……なんで原作知らないのに二次で読んでんだよ。つかＳＳってアレか？　メアリー・スーなオリキャラが出てきて大活躍する“アレ”な内容の？」
「いんや、クロスオーバー。好きなロボ作品だったから興味持って読んでみたんだよ」

ちなみに藤原が言ったメアリ・スーとは所謂、「ぼくのかんがえたさいきょうのキャラクター」の代名詞だ。
これはスタートレックの二次創作を風刺した、ある作品に登場するキャラクターの名前が元ネタになっている。

キャラは全知全能。すさまじい知識、あるいは全てを支配するかのような能力を持ち、問題があればご都合主義で即解決。どんなヒロインからも好かれ、嫌う相手は断罪する。不幸な過去か悲劇的な設定を背負い、他のキャラを罵倒したり欠点を挙げて徹底的になじったりする。……つまりは痛いキャラだと思ってくれてかまわない。

「はあ、……俺はそういう二次創作とかはもういいや。読むつもりもないし、原作がありゃそれでいい」
「あらま」

言うと、藤原は再び持っていた本に目線を落とした。……藤原はＳＳ関係の話題になるとあまりいい顔はしない。

二次創作のＳＳといえばオリキャラが活躍する作品がよく目につくが、別に二次創作というのはオリキャラを主人公に置いたものしか存在しないわけではない。
原作後の話を書いたアフター。原作の展開を変える再構成。キャ

ラクター同士の恋愛模様を書いたＣＰ（カップリング）。主人公がやり直しをする逆行・ループ。スパロボのように複数の作品を掛け合わせるクロスオーバー。原作キャラの性別が変わっているＴＳ。

ただ、作者のオリジナルキャラクターが主人公になっている作品の中には、前述したようなメアリ・スー的な作品が非常に多いのだ。最強の設定や力を与えられ、原作キャラを蹂躙したり、登場するヒロインを片っ端から落としてハーレムを作ったりするメアリー・スー的な作品というものは良い意味でも悪い意味で目立つ。オリジナル主人公というだけで敬遠する人もいるのだ。

……オリキャラとは言ったが、メアリー・スーは二次創作において自己投影や改変が酷いキャラを指す時にも使われる。ＫａｎｏｎのＵ１とか、エヴァのシンジとか、とらハの恭也（高町なのはの兄）とか、ナデシコのアキトやＦａｔｅの士郎なんかもそうだ。主人公魔改造である。

閑話休題。

「……あのさ」
「何だよ？」

ぽつりと、藤原が本を読みながら顔は向けずに聞いてきた。

「ＩＳとのクロスって言ってたけど、どんなロボット作品なんだ？」
「どうしたのさ、いきなり」

僕の質問に、藤原は本をばさりと机の上に置くと頭を掻きながら答える。

「いや、ＩＳの大きさってそうデカくないだろ？　パワードスーツ

なわけだしさ。
ＭＳ少女とかストライクウィッチーズとのクロスならともかく、ガンダムとかアーマード・コアみたいな機体だとサイズ合わねえんじゃないか？」

最もな疑問である。

「ん……僕が読んだところにあるのだと、別作品のロボがＩＳ化ってのが多かったな。次に機体を人間サイズに変更するとか」
「はぁ？　なんだよソレ？」

Ａ作品のキャラがＩＳの世界に来てＡ作品のロボがＩＳ化したものに乗るという、ある意味突っ込みどころ満載の設定だった。ＭＳやＡＣがリリなの世界に行くとデバイス化ってのと同じ謎展開である。

恐らくは整備面をどうするか考えるのが面倒臭いからと、デカイ機体のまま小さい相手に勝利しても絵面的に面白くないから。……バトル漫画でも、小柄な奴が筋肉質な大男を倒すというのは日本人の好みだし。

そう説明すると、藤原は「ありえねぇ」と言いながら頭を振った。

「分かってねえなぁ……分かってねえ…！
本来の姿からかけ離れたフォルムにしてどうすんだ？　あの大きさと重量感があるからこそのロボだろうが！　そんなの使うくらいなら最初から人間サイズのＳＤ頑駄無使えよ」
「いや、そう言われても困る」

その後も藤原は連連とロボの魅力について語ってくる。具体的には３０分くらい。……０８小隊とか好きだからなコイツ。でもなぁ……、

「そうは言っても、ＩＳ操縦者としてＩＳ化した機体に乗れるとしたら乗ってみたいだろう？」
「おう！　そこは男のロマンってことだな」
聞こえてきた問いに藤原が威勢よく答える。
「ジェフティとかネクストＡＣとかジェノブレイカーに乗れるとしたら乗ってみたいだろう？」
「うん。……まぁメタトロンの毒とかコジマ汚染とか精神が廃人になるのはカンベンだけどね」
続く質問に僕が答える。やはりああいう機体には憧れがある。他にはガンダムとかヴァルキリーとか。
仮にそのような機体が現実にあったとしても、自分に操縦できるはずがないと分かってはいるのだが、それとこれとは話が別だ。思うだけなら罪にもなるまい。
そこまで考えて、異常に気付いた。
いま、この部屋には僕と藤原の二人しかいない。
なのに、さっき話しかけてきた中性的な声は、誰…？
……。藤原も同じことを考えているらしい。お互いに顔を見合わせて、そして二人同時に振り向く。
「……え、」
覚えているのは、強烈な、眩いばかりの光の濁流。

そこで僕たちの意識は一端途切れる。

そして目が覚めた時、世界は一変していた。

《　ＩＳ　～　クラスメイトは全員……　～　》

春。満開の桜の下、学生たちが入学あるいは新学期を迎える季節。
それはここ、ＩＳ学園も例外ではない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと……出席番号順で」

先ほどおどおどしながら自己紹介を終えた副担任――山田真耶は涙目になっていた。その原因は教室を包む気まずい空気だ。

ＩＳ学園１年１組の教室は妙な緊張感に包まれていた。

……無言。誰も、一言も発しない。
にっこりと微笑みながら挨拶をしたはずが、一人の生徒からも反応がない。
１組の生徒は３１人。その３１人中の実に３０名がある一人の生徒に注目していた。
ある者は睨みつけるように。ある者は興味深そうに。ある者はニヤニヤと面白そうに。ある者はサングラス越しに目を隠して。ある

者は顔色の悪い表情でジロジロと。ある者は無表情に……。

その生徒の名は、織斑一夏。世界で最初に発見された男性のＩＳ適合者である。

『世界で唯一ＩＳを使える男』というのは世界的なニュースになり、テレビや新聞雑誌で連日報道され、一夏の自宅や通っていた中学校には昼夜を問わずマスコミが張り付いた。

だが、今の彼の称号は『世界で唯一ＩＳを使える男』ではなく、『世界で最初に発見されたＩＳを使える男』になっていた。

それは何故か？　答えは教室を見渡してみれば分かる。

男、男、男、男、男……。

――このクラスは全員が男子生徒だった。

女性にしか使えないはずのパワードスーツ、ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞の前提を覆すこの状況。

そもそもの発端は、世界で初めてのＩＳ操縦者・織斑一夏が発見されてから急遽行われた男性へのＩＳ起動調査だ。織斑一夏以外にもＩＳ適性を持つ者がいないかどうかの実験。一夏と比較的年齢や体格など条件が近い者を対象として行われた。

そうしたら出るわ出るわ。……実に３０名もの適合者が発見されたのだ。それも全て日本で。

結果、紆余曲折あったものの、この男性ＩＳ操縦者３０名は追加でＩＳ学園へと編入することとなったのだ。

（どうしてこうなった！？）

先程自己紹介を終えた小野田幸人は、次に自分の後ろで自己紹介を始めた織斑一夏を眺めながら心の中で盛大に叫んでいた。勿論、表情には出さないように気を付けながら。

あの日、藤原の家で気を失った僕たちが目を覚ました後、世界は一変していた。

別に日本が剣と魔法の世界に変わっていたとか、異世界に使い魔として召喚されたとかではない。

藤原の持っていたＩＳのラノベがなくなっていた事以外で部屋の中に異常はなかったし、自分の家に帰ってみても普通にそのまま。家族も変わりなかった。

だが、その認識はテレビのニュースを見たことで覆される。

『世界で唯一ＩＳを使える男が発見される！？』

ニュース番組のテロップにはそう書かれていた。織斑一夏という少年が女性にしか使えないはずのＩＳを起動したという内容だった。

……本来、創作物の中でしかなかったはずのそれが当然のように世界に存在し、報道されていたのだ。

この状況を異常だと感じていたのは僕と藤原だけだった。

家族や友人にそれとなく聞いてみても、分かるのはＩＳは１０年前に開発されて現在では当たり前のように存在しているという“事実”だけ。

教科書を開いてみれば当然のように『白騎士事件』のことが載っている。ネットを調べればＩＳ関連の情報が次から次へと出てくる。

現行の戦闘兵器はＩＳの前ではただの鉄クズに等しく、それ故に世界の軍事バランスは崩壊。ＩＳの取り扱いを決めた『アラスカ条

約』が結ばれ、軍事利用の禁止が決められた。
そして世界は女性優遇の制度が施行され、徐々に女尊男卑に移り変わっていると……。

混乱した。
まるで別世界に迷い込んだ気分だった。いや、むしろ完全な異世界であった方が気は楽だっただろう。
だが家族に変わった様子もなければ、通っている学校や友人もそのままだ。そして、この世界には小野田幸人と藤原恵一という人間は過去から現在まで連続して存在している。……僕と藤原だけがインフィニット・ストラトスの世界に迷い込んだ、なんて訳でもないのだ。
なのにＩＳが――篠ノ之束や織斑千冬、織斑一夏が存在しているという歴史だけが違っている。
藤原がふざけて、「誰かがもしもボックスでも使ったのか？」と言ったのに頷いてしまいそうだった。あるいは月島さんの完現術で過去を差し挟まれたらこんな感じなのだろうか。

唖然としたまま何もできずに過ごした、その数日後。
急遽、全国で行われた男性のＩＳ起動調査。その検査で僕と藤原はＩＳを起動できたばかりか、ＩＳ適正でＡ判定を出してしまった。

正直に言って、戸惑った。
『原作』ではＩＳを起動できるのは『主人公』の織斑一夏だけなのだ。それも篠ノ之束の仕業であると原作で仄めかされている。
なのに、何故僕たちがＩＳを使えるのか……訳が分からない。

この結果が出てから僕と藤原の自宅には自衛隊の高官だの政治家のお偉いさんだの、果ては各国大使や遺伝子工学やらＩＳ研究所のヤバそうな科学者たちがこぞってやってきた。

そこで僕たちはＩＳのことについて学ぶため、何よりも身の安全を確保するためにＩＳ学園に半強制的に入学することとなったのだ。…身の安全といったが、それには自分だけでなく家族の安全も含まれている。男のＩＳ操縦者の家族ともなれば、脅迫の人質やデータを得るのための実験など、利用価値は腐るほどあるからだ。

まぁ、色々とシリアスなことも言ってしまったが、本音を言うとワクワクしている部分もあった。

創作上の存在でしかなかったインフィニット・ストラトス。その操縦者としてＩＳ学園に行くだなんて、まるでよくある二次創作の主人公（オリ主）のようであるからだ。

それにロボットは男のロマンだ。下を向いて愚痴ばかり吐いても仕方ない、少しは前向きに考えなくてはいけないだろう！

専用機とかは貰えるのだろうか？　貰えたら待機状態とか、機体のカラーリングとかカスタマイズできたらいいなぁ……。

「と、気楽に考えているうちは良かったんだけどなぁ……」

一夏が見つかり、僕たちが見つかり、そして４人目、５人目、６人目、と男性ＩＳ操縦者が次々と見つかったのだ。

この時点でインフィニット・ストラトスの原作は崩壊したと言っていい。……まぁ、自分達がいる時点で原作もクソもあったものじゃないんだが。

そして僕たちが入学して初めて顔を見合わせたその瞬間、――電流が走るッ！　エフェクトを入れるならニュータイプのキュピーンという演出だろうか。

つーかアレだ。こいつらほぼ間違いなく僕たちと“同類”だ。同郷だ。

というか、なぁ……？

「（ＩＳの二次創作では二人目の男性ＩＳ操縦者、つまりはオリキャラが出てくる作品は多いが、……いくらなんでも多すぎないか？）」

ＩＳ　＜インフィニット・ストラトス＞

第１話　「クラスメイトは全員男（一夏以外の男子全員トリッパー）」

1話　クラスメイトは全員男（後書き）

箒は2組なのでいない。
セシリアは2組なのでいない。
その他女子も他のクラスなのでいない。
一夏以外の男子全員原作知識持ちトリッパー

ＩＳの二次だと二人目のＩＳ操縦者のパターン多すぎね？　全員集めたらすげえ数になるぞ？　という友人の言葉から思いついた一発ネタ。

2話「自薦と他薦、両方です」（前書き）

続いてしまった。

2話「自薦と他薦、両方です」

「さあ、これでＳＨＲは終わりだ。私は男のＩＳ操縦者だからといって特別扱いはしないぞ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

１年１組のクラス担任、織斑千冬がそう言うと男子生徒達は全員返事をした。すごい迫力だ、まさに鬼教官。

流石は元日本代表にして『モンド・グロッソ』第一回優勝者、公式試合で無敗を誇る――というか原作では強すぎて作者が扱いに困った結果死亡フラグが立つくらいには最強なのだ。

とまあ、それからＳＨＲが終わって１時間目のＩＳ基礎理論授業も終わった。

ちなみに自己紹介は織斑一夏の番で途切れることもなく、全員が終えていた。……注目されていたとはいえ、クラス全員が女か男かの違いは大きいらしい。無難な内容だった。

「しかしアレだな、やっぱ俺たちって注目されてるんだな」

「良い意味でも悪い意味でもね。……動物園のパンダの気持ちがよくわかるよ」

藤原の言葉に僕は答える。

クラス全員が男とはいえ、ＩＳ学園は本来女子生徒しかいないのだ。つまりどういうことかと言うと、

「これじゃあ外に出れないな」

「なんであんな廊下に張り付いてるんだろう……トイレいけないじゃん」

現在、廊下には他のクラスの女子、二、三年の先輩らが詰めかけている。しかし男だらけのクラスに突入する勇気はないのか、入口からこちらを眺めているだけだ。それがまた居心地の悪さを助長させる。

「うーむ……」

教室を見渡すと男子のとる行動は様々だった。一人ケータイを弄っている者もいれば、すでに何個か出来あがっている各々のグループで話している者もいる。ぼーっと空を眺めている奴や、黙々と教科書を見てノートを広げている奴、文庫本を読んでる奴と様々だ。

そして我らが主人公、織斑一夏と言えば……死んでいた。いや、本当に死んでいるわけではないのだが、なんというか雰囲気というか、覇気の無さがそう感じさせる。自分の机でうつぶせになってぐったりとしている姿は実に情けないというか、哀れを誘う。

その時、教室の内外がざわめいた。

「……ちょっといいか」

見れば、一人の女子が教室に入って一夏に話しかけているのだ。

「なあ藤原……あの子って」

「あぁ、間違いない」

周りには聞こえないように、藤原と小声で話す。

肩下まである髪を結ったポニーテール。身長は平均的な女子のそれだが、背筋はピンと伸びており、その姿勢の良さ故かどこか長身

を思わせる。まるで刀のような剣呑な印象を与える眼つきの悪さ。
インフィニット・ストラトスのメインヒロインにしてＩＳの開発者、篠ノ之束の妹――篠ノ之箒（しのののほうき）だ。
しかしまぁ、男だけのクラスに入って来るとは勇気があるな。
二人は二言三言話すと、廊下へとすたすたと行ってしまう。その後姿を眺めつつ、僕らはチャイムが鳴るまで四方山話で暇を潰していた。

――パァンッ！　「とっとと席につけ、織斑！」

廊下で何かが炸裂する音が聞こえた気がした。

◇

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読みあげていく山田先生。しかし何だな、ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞のヒロインは割と気軽にＩＳ（アイエス）を部分展開したり、ＩＳを使って一夏を“オシオキ”していたが、それは枠内を逸脱したＩＳ運用ということにはならんのだろうか？
……多分、深く考えちゃいけないことなんだろうな。
目の前の机には分厚い教科書が５冊も積まれている。……これがＩＳを使うために覚えなければいけない基礎知識だと言うのだからうんざりしてくる。

流石に入学までにすべてを覚えることは不可能だったが、それでも理解できるように努力はしてきた。努力した、というだけで理解した訳ではないのだが。それでも授業に置いて行かれないように最低限のことはしなくてはならない。山田先生の言葉を聞きながらノートを取っていく。

表向きＩＳの戦争利用は禁止され、今ではスポーツへと変わってはいるものの、ＩＳが強力な兵器であることに変わりはない。ＩＳがあれば現行の兵器をただの鉄クズへと変えてしまうことができるのだ。……それに、内紛やテロは『戦争ではない』。抜け道はいくらでもあるのである。

それでなくともＩＳ学園でのイベントには危険がいっぱいなのだ。無人機とか無人機とか束の作った無人機とか。あとは亡国機業（ファントム・タスク）とかいう、ヤバいんだかショボいんだかよくわからん悪の組織（？）もいるらしい。

（しかし、普通の女子はこれ全部を事前学習してきてるんだよな）

普通に正規の手段でＩＳ学園に入学しようとすれば、その難易度はとても高い。つまりこの学園の女子生徒全員がすさまじい倍率の中を勝ち抜いてきた優等生なのだ。

調べたところによると、ＩＳ学園に入学するための事前学習としてＩＳ学習を授業に組み入れている学校は多いらしく、そしてその学校は１００％女子高。

（作中で女尊男卑がどうとか、女が男に対して偉そうにしてるとか言ってたけどさ……）

織斑一夏が電話帳と表現したその教科書。世の女性たちは憧れのＩＳ学園に入学することを夢見て、この電話帳と何年にも渡って格

闘するのだ。
入学前に事前配布された参考書。もはやそれは中学生が勉強するレベルの問題ではなかった。父親に見せると、大学かそれ以上のレベルの難解な数式もあると言っていた。
……この世界、男女間の知識水準に大きな開きがあるよな。絶対に。
初めからＩＳを使えないと分かっているため、普通の教育しか受けない男。
女性なら誰でも憧れるＩＳ学園に入学するため、ＩＳ学習やハイレベルな教育を受ける女。
もちろん個人差はあるだろうし、学力と仕事の出来などが直接関係するとは限らないのだが、ぶっちゃけて言ってみればアレだ。
――男は馬鹿が多くて、女は頭がいい人の方が多い。これがＩＳ世界の男女の格差だ。
「織斑くん、何か分からないことがありますか？」
聞こえてきた山田先生の言葉が思考を遮った。どうやら、頭を抱えていた織斑一夏の様子を見るに見かねたらしい。
「わからないところがあったら訊いてくださいねくださいね。なにせ私は先生ですから」
えっへんと、まるで子供のような態度で山田先生が胸を張る。だぼっとした服装や童顔な顔が子供っぽさにますます拍車をかける。

「先生！」

後ろの席の一夏が勢いよく挙手をして立ち上がる。……いきなり大声を出すからちょっとびっくりした。

「ほとんど全部わかりません！」

「は……え…？　ぜ、全部、ですか……？」

そのあまりにもあんまりな言葉に、山田先生の言葉が引き攣る。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階で分からないっていう人はどれくらいいますか？」

山田先生の問いに、何人かの生徒の手がぱらぱらと上がる。それを見て、山田先生の顔がさらに困惑で彩られる。

逆に一夏は仲間を見つけたことで安心した表情になった。

「えっと、あの……新垣くんに、梅原くん、野々宮くん、森谷くんですか……。どこが分からないとか、言えますか？」

「……その前に織斑、入学前の参考書は読んだか？」

山田先生が挙手した生徒に聞いてみるが、その前に織斑先生が遮る様に一夏に質問した。

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

パァンッ！

「必読と書いてあったろうが、馬鹿者！」

先生の鉄拳が炸裂し、一夏の頭を粉砕するかのような音が響いた。
……まあ、自業自得かな。ここは原作読んでて本気で馬鹿かと思ったし。てか間違って捨てたのがわかってるのなら素直に再発行してもらえよ。これじゃあ馬鹿と言われても仕方ないよ？

「あとで再発行して貰うから1週間で覚えろ。いいな……」
「い、いや、千冬姉…そんな無茶苦茶な、」

パァンッ！

「今は織斑先生だ。公私をわきまえろ」
「ぐぉおおぉお！？　な、なんで俺ばっかり……他の奴らは…？」

織斑先生がギロリと睨みを効かせ、出席簿をチラつかせると一夏は大人しくなった。

「新垣、梅原、森谷の三人は直前のＩＳ起動検査によってＩＳ適正ありと判明した。織斑のように入学まである程度の事前学習の時間があったわけではない。特に梅原は３１人目……参考書も入学の数日前に渡されたそうだな」
「はい」

織斑先生の言葉に、梅原と言われた小柄な男子が返事をする。平均よりも低い身長のせいか他のクラスメイトより子供っぽい印象だが、その身体つきは決して華奢ではない鍛えられたものだ。スポーツか格闘技でもしているのだろう。
そも、男性を対象にしたＩＳ起動検査が行われたのは織斑一夏が発見されてからだ。つまり、僕らは全員一夏よりも後になってＩＳ学園への入学が決定したことになる。時間的余裕で見れば、本来は一夏が一番アドバンテージを持っていた訳だ。

「そして野々宮、お前については事前に報告を受けている。入学までは自衛隊のＩＳ部隊で検査漬けだったそうだが……」
「ええ。起動実験などで基本動作などの実習面はある程度学んでいますが、知識はほとんどありません。ＩＳ学園で学んで来るように言われました」
野々宮という男の第一印象は、なんというか気難しそうな奴だった。鼻筋の通った顔、ややつり上がった目に銀フレームの四角い眼鏡、背はひょろりと伸びて高い。いかにも生真面目そうな雰囲気（オーラ）だ。
そんな野々宮の言葉に、織斑先生はふむと一度だけ頷いた。
「いいか貴様ら、ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。
手を挙げなかった者達も、『自分達はもう知っているから』などと甘い考えは持たないことだ。分かったか」
最もな話である。ＩＳの立ち位置は、その安全性と国家間のパワーバランスが均衡したことで微妙な緊張状態の上にある。……入学前に調べた情報だと、一般人の中にはＩＳを兵器ではなくスポーツやブランドのファッションのように認識している人もいるのだが……。
織斑先生は一旦言葉を区切ると、もう一度一夏の方を向いて言う。
「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」
その言葉に、後ろの一夏が明らかにうろたえる様子が雰囲気で分

かった。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな。……これは織斑だけに言っているのではない、お前たちクラス全員に言ってるんだ。肝に銘じておけ」

取りつく島もないとはまさにこのことか。辛辣な、…だが正しい言葉である。

ま、この台詞に篠ノ之束は該当しないんだろうけどね。集団どころか、あの天才が認識できるのは千冬、一夏、箒の3人のみ。彼女にとって世界とは、自分の作った玩具を遊ばせるための箱庭でしかないだろう。人間やめてるような頭脳してるし。

机に落としていた視線を戻すと、教卓の前で山田先生が何やら頬を赤らめていやんいやんと悶えているところだった。

一夏がまた何か言って、それを聞いてまた変な妄想を始めてしまったらしい。……不安だ、……果てしなく不安だ。

この時、クラス全体の心は一つになっていただろう。すなわち――

『……大丈夫か、この先生で……』

元日本代表候補生ってのは知ってるんだが、この姿を見せられるとどうもなぁ……。

◇

3時間目。実践で使用される各種装備の特性に関する授業である。

ちなみに2時間目が終わった後に現れるはずのちょろいさん……じゃねーや、セシリアイベントは起こらなかった。

流石にわざわざ別のクラスから男だらけの1組には踏み入ってこれなかったということなのか。それともさっきの一夏の馬鹿発現を聞いてないと「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ！　オーホホホホホ！」という台詞は出ないのだろうか。ちょっと残念。背景に薔薇をしょって登場してくるかと思ったのに。

「授業の前に、五月に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておく。自薦他薦は問わないぞ」

教壇の上に立っているのは、山田先生ではなく織斑先生だ。

「千冬ね……お、織斑先生。代表者ってなんですか？」

思わず千冬姉と言いかけたが、先生の鋭い視線を向けられた一夏はすぐさま言い直す。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長も兼ねているな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。急にIS学園への入学が決まった諸君らはともかく、他の女子生徒たちは今の時点ではたいした差はない。だが、競争は向上心に繋がる。一度決まると1年間変更はないからそのつもりで」

ざわ……ざわ……、教室のあちこちでざわめきが起こる。クラス代表をどうするべきか、皆考えているのだろう。

原作通りならば唯一の男性ＩＳ操縦者ということで織斑一夏が推薦され、それにセシリア・オルコットが反発し、そこからは売り言葉に買い言葉。激昂したセシリアによって決闘することになるのだが……。

「比良坂くん、……立候補ですか？」

しばらく誰も自薦も他薦もしなかったところで、すっと手が挙がった。山田先生の言葉に、自然とクラスの目線も彼に集まる。

「あの、その前に質問したいのですが。織斑君に専用機が与えられると噂で聞きましたが……本当ですか？」

手を挙げたのは、抑揚のない声で喋る顔色の悪い男子だった。髪は脱色したか染めているかのような亜麻色だがボサボサで、眉や睫毛の色も同じである所を見ると地毛であることが判る。

「……どこでそんな噂を聞いたかは知らんが、事実だ。学園側が専用機を用意するそうだ」

織斑先生の言葉に「おぉ」とどよめきが起こる。かくいう僕もその一人だ。

３１人も男がいるこの状況で一夏に専用機が与えられるか不安だったが杞憂だったようだ。きっと最強無敗の織斑千冬の弟であり、篠ノ之束が認識している数少ない人間の一人というのも関係しているだろう。というか白式は束が作ったんだっけか？　なら結局、白式は絶対に与えられるんだろうな。

「え、えーと……つまりどういうことなんだ？」

まったく意味が判らないという顔をしているのは一夏だけだ。これだけ情けない顔をされると、……見るに堪えられないね。

「ほらここ。６ページ」

振り向いて、後ろの席の一夏に広げたページを見せてやる。……何気に今初めて一夏と話した。

「ん、なになに……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切公開されていません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、その全てのコアは篠ノ之束博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「そういうことだ。本来ならば国家か企業に所属する人間にしかＩＳ専用機は与えられない。が、お前の場合は状況が特殊だ。データ収集を目的として政府から専用機が用意されることになった。どうだ、理解できたか？」

「な、なんとなく分かったけど……それなら俺以外にも適任がいるんじゃないか？　なんで俺が……」

「知らん。お前が最初に発見された男だったからか、それとも……。……その辺りのことは政治家や企業の連中が判断することだ」

織斑先生の言葉に、一夏は納得したようなしていないような、なんとも微妙な顔をしていた。

「比良坂、これで満足か？」
「はい。だったらボクは専用機持ちの織斑君を代表に推薦します」
「あ、それいーね。じゃあ俺も織斑ちゃんを推薦しまーす！　織斑先生の弟みたいだしさ」
「自分も……それがいいと思います」
「異議なし」

おおう。じつに自然な流れで一夏がクラス代表者になるような空気になってる！？
クラスの皆も納得がいったかのような表情で次々に織斑を推薦しだした。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　別に自薦でもかまわないぞ」
「お、俺ぇ！？」

素っ頓狂な声を出しながら、一夏が立ちあがった。そして彼に向けられるクラス中の視線の嵐。もし目からビームが出せたなら、一夏の身体は今頃穴あきチーズになっているだろう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」
「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――」
「自薦他薦は問わないといったはずだ。推薦を受けた以上は拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」
「い、いやでも――――あ、ああぁぁ！！　ほ、他にいるじゃん！　ほらそこ、手を挙げて、」

パァンッ！

「やかましい！　……野々宮。自薦か、それとも他薦か？」

織斑先生が当てたのは、あの野々宮という眼鏡くんだった。相変わらず真面目で真剣そうな表情だ。

しかし、このままいけば原作通りに一夏が代表者になれるのにどうするつもりだ。まさかセシリアポジションにでもなるつもりか！？　み、見たくね～……。

「自薦と他薦、両方です」

野々宮は一夏の方を見てから、織斑先生に向き直る。

「私自身と入江優助、早乙女大地、織斑一夏。そして、この合計四名の専用機持ちで模擬戦を行い、それによるクラス代表の決定を提案します」

「あ、……オレっすかぁ？」

「なんだって！？」

野々宮の言い放った言葉に、サングラスをかけた男子と大柄な男子が反応し、続いてクラス全体が驚愕する。

というかさぁ……。

「な、なんで専用機持ちが三人もいるんだぁ！？　僕だって専用機が欲しいってのに！　つかどんな裏技つかったの！？　トリッパー特典？　スゲー、すげぇうらやましいいぃいいい！！」

と、織斑先生のお叱りが怖いので声には出さないが心の中でしっ

かりと叫んでおいた。

2話「自薦と他薦、両方です」（後書き）

2話目にしてオリキャラがかなり増えた。
つか30人もオリキャラ出すことが無茶だってことに今更気が付いた。読者絶対覚え切れねーよ。

3話「身も蓋もないことを言うな」

放課後。授業も終わり、寮での夕食も終わり、時刻はすでに１０時前。窓の外は真っ暗闇で染まっている。

そんな時間にも関わらず、電灯で明るく照らされた教室が一つある。

プレートを見ると、そこは1年1組だった。ＩＳ学園では例外的な、男子生徒だけのクラスである。

その教室には織斑一夏を除く３０人の男子が集まっていた。その名目は自主勉強。本来ならば規則違反となる時間だが、「女子に比べて遅れた部分を取り戻すために勉強したい」と言って学園側に申請して特別許可を貰ったのだ。

生徒たちは互いに複数の教科書を広げて見比べたり、ひたすら参考書をノートに書き写していたり、授業のレポートのようなものを作成していたり、端末で何かの単語を調べていたりと何だか異様な光景だ。

黒板の上のデジタル時計が示す時間が９時５９分から１０時に変わる。

パタン。

それを見た二人の生徒が教科書を閉じると、スタスタと歩いて教壇の上に立った。さらにもう一人が席を立ち、懐から小さな装置を取り出した。携帯電話に似ているが、それよりも一回り小さい何かの端末のようだった。それのスイッチを入れると教卓の上に置く。

それは、盗聴器やカメラなどの機器を妨害する特殊なジャマーだった。仮にハイパーセンサーなどで外から声を拾っても集音できないようになっている。

そして廊下側、扉の近くにいたそれぞれ前列と後列の生徒がガチャリと中から鍵をかける。

「では、これより会議を始めたいと思います。司会進行はこの僕、小野田幸人が。議長は藤原恵一で。…くれぐれも和やかで適切な議事進行を心がけてください」

小野田幸人の言葉に、ペチペチとやる気のない拍手が答えた。すでに勉強をしている男子はいない、皆がこの“会議”に集中していた。

「今回の議題は“僕らの現在の状況の確認と原作介入をどうするか”です。何か意見のある人――」

彼ら30人は全員がトリッパーと呼ばれる、ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞というＳＦアクション学園ラブコメ作品を知る者達だ。

……普通、そんなことは常識的に考えればありえないことだ。単なる創作上の世界に迷い込んだなんて、頭がおかしくなったとしか思われないだろう。

しかし、彼らはそれが起こったことを確信せざるを得なかった。理由は分からない。だが分かるのだ。コイツ等はトリッパーだと出会った瞬間に理解した。なにせ、互いが互いの証人だ。

ここに30人が集まることが、トリッパーの存在とお互いの認識を何よりも証明してしまった。

「あの～、その前に聞きたいんだけどさぁー」

「発言は挙手の後にするように。……えっと、新垣か？　何だ？」

トリッパー活動会議・議長の藤原が新垣を指す。

「天災博士（たばね）のコネがある一夏はともかくとしてさ、何で専用機持ちが3人もいんの？　いくら俺たちトリッパーが男なのにＩＳを使えるっつっても、３０人もいるとＩＳコアは貰えないと思ってたんだけどなぁー」

それは、ここにいるほぼ全員が感じていた疑問だったのだろう。自然と全員の視線は専用機持ちの３人の方へと向く。

ややつり上がった目に銀フレームの四角い眼鏡。真面目そうな印象を人に与える男――野々宮明。

サングラスをかけた、言い方は悪いが少々軽薄そうな男――入江優助。

がっしりとした肩幅によく日に焼けた浅黒い肌。かっこいいというより逞しいという言葉が似合う容貌の男――早乙女大地。

「そうだね。それは僕たち全員が感じている疑問だと思う。……説明してもらえるかな？」

小野田がそう言うと、三人は互いに顔を見合わせ――野々宮が一歩前に出た。

「今日自己紹介したと思うが、野々宮明。君たちと同じ境遇だ。そして専用機を持っている理由だが……、」

「やっぱりさ、織斑先生が言ってた自衛隊にいたっていうのが関係してるのか？」

遮るように誰かの質問が飛ぶ。話の途中に割って入られて、野々宮の顔がやや不機嫌に歪んだ。それを見た藤原が男子を窘める。

「……その通りだ。ＩＳ適正が発覚してからの一ヶ月と半月の間、日本のＩＳ部隊と研究所で検査漬けだった。ハイパーセンサーとのリンクデータや脳波測定。各種ホルモン検査に女性親族の遺伝子データとＩＳ適正の確認。血液検査や使用したＩＳの変化、フラグメントマップの構築状況の確認……あとは覚えてないが、まぁ色々だ。

ＩＳ学園の生徒は在学中にありとあらゆる国家・組織・企業に所属しないことになっているが、私は外では自衛隊のＩＳ部隊の所属となっている。専用機が与えられたのもそういう背景がある」

野々宮がそう話終わると、クラスメイト達から関心の息が漏れる。楽して専用機を手に入れようなんて考えが甘いことは自覚しているが、一ヶ月以上も検査漬けというのは精神的にもキツかっただろうに。しかも所属が自衛隊。もう将来が決まっているようなものなのだ。

「いや、なんつーか……すげーな」

「自衛隊かぁ。俺、そういう訓練とか肉体労働とか無理だから尊敬するよ」「いや、そこは頑張れよ」「そういや学園の授業でも体鍛える内容があるんだっけ？　うわぁ……どうしよ」「俺だって3年間帰宅部のインドアだぜ？」「オタクだもんな」「うっせえ」

「実験とか検査とか、変なことはされなかったのか!?　あと、どういう経緯でそうなったのか詳しく――」

ざわざわと思い思いに勝手な事を喋るクラスメイトたち。トリッパーといえども、彼らはまだまだ子供なのだ。

別に死んで転生して神様に能力を貰って云々～なんてヌルい人生、強くてニューゲームだったわけではない。全員が全員、気が付いたら世界にはＩＳが存在しているということになっていたのだ。それも家族や友人はそのまま。ただ、世界はＩＳとその登場人物が存在している女尊男卑社会に変わっていた。だからこそ、オリ主だチー

トだと変に勘違いしたりしなかったのだが。

「静かに！　発言は挙手の後にするように。野々宮、自衛隊での検査とか経緯とか、話せる範囲で話してくれないか？」

「……連日の検査は確かに精神的に辛いものだったが、特に非人道的な実験はされなかったさ。だが外国の機関でも同じとは限らない。それとこうなった経緯は……詳しくは省くが、祖父が元軍人で父親が自衛官だからだ。

勘違いしないで欲しいのは、だからといって親に強制されたわけじゃなく、この道を決めたのは自分の意思だったということだ。……単に専用機が欲しかっただけと言われたら否定はしないが」

それ以上は野々宮は喋らず、クラスメイトたちも深くは追求はせずに終わった。

「ハイハイハーイ！　んじゃぁ次はオレだな。オレはデュノア社、つまり企業の所属になってるから専用機を持ってんだ。以上！」

それまでの空気をぶち壊すかのようにあっけらかんとした口調で言ったのはグラサン野郎……入江だった。

「ちょ、おま……」「はしょりすぎだろｋｗｓｋ」「デュノア社ってどういうコト？」「シャルは？　まさか登場しなくなったりしないよな！？」

ざわざわ…、男子（トリッパー）たちが一斉に騒ぎだす。

スパパァーン！

「お前らええかげんにせえや！　話が進まんやろが！」

どこから取り出したのか、額にバンダナを巻いた男子の巨大なハリセンによるツッコミが炸裂する。

「あ〝ー、代弁ありがとう里中。んで入江ェ、もうちょっと詳しく話すように」

いくらなんでも短くまとめすぎだと、藤原は額を押さえる。

入江も最初からそう言われることは分かっていたのだろう、全員に聞こえるように立ち上がると口を開いた。

「まあ、オレがやったことはデュノア社に自分を売り込んだってことさ。

ＩＳ適正が判明したのが2月。そん時にはもう何人目かの男が見つかってたからさ、これじゃあ専用機が貰えないかもしれないって思ったわけよ。

でー、だったら政府か企業の所属になって、データ収集の代わりに専用機を頼めばいいか――ってな」

「何でデュノア社を選んだんだ？　どうせなら第三世代を開発している国か企業にすべきだろう」

小野田の質問は尤もなものだった。原作では、デュノア社の作った第二世代型ＩＳの『ラファール・リヴァイブ』は傑作機と呼ばれるほどに完成度が高い。だが、第三世代ＩＳの開発は難航しておりその経営状況はよろしくない。むしろ経営危機に陥っている。

具体的には、シャルロットを男装させて広告塔にした挙句に白式のデータを盗むためにＩＳ学園に『男』として送り込むぐらいには。

……どう考えても穴だらけの計画である。１日でバレてるしさ。馬鹿じゃねえの。

「わかってないなー。だからこそだよ」

入江はチッチッチとわざとらしく指を振ると、サングラスをキラリと光らせる。…ウゼェ……。

「第三世代の開発で遅れているデュノア社なら、特異ケースであるオレのデータ収集を条件に取引しやすくなるだろ？　ＩＳが使える男のデータなんてどこも欲しがるだろうし。契約の条件も良かったし！

まあ、おかげでオレも野々宮みたいに入学までデータ取りの毎日だったんだけどさー。いやホント。原作だと馬鹿な企業っぽい印象だったからちょろいと思ったんだけどな～」

ちなみに現在デュノア社は入江優助のデータ提供を条件に各国のＩＳ企業と渡りをつけ情報交換を行い、ドイツのレーゲン型・イギリスのティアーズ型・イタリアのテンペスタ?型の技術を応用した第三世代型ＩＳの開発を行っている。開発は順調だそうだが、それでも完成はしていない。入江の持つ専用機は第二世代型。ラファール・リヴァイブの専用カスタム機らしい。

「……で、シャルロットは？　お前のせいで原作より不幸なことになってたら容赦しねえぜ……？」

話を聞いたトリッパーたち中の一人、シャルロッ党の森谷が剣呑な表情で入江に凄む。

その言葉を聞いて、他の面々もはっとしたように入江を見た。

「お、おいおい落ち着けって。シャルロットちゃんなら、普通に代表候補生としてＩＳ学園に入学してるぜ。確か２組だったはずだ」
「シャルロットちゃんんんん！！？？　なんだかずいぶんと親しそうじゃないか、さあ吐け！　すぐ吐け！　今吐け！　どういう関係だ！？」
「あー、いや。テストパイロットをしてる間、ＩＳの使い方とかちょっと指導してもらっただけだって。後はその、……デュノア社から俺のサポートというか、……命令でも受けてるんじゃない、かな？」
「その話、」
「詳しく、」
「聞かせてもらおうか…！」

わきわきと手をゾンビのように動かしながら迫るシャルロッ党員。話される内容によっては嫉妬団にジョグレス進化するだろう。
そして――、

スパパパァーン！！

唸るハリセン。叩かれる男ども。

「はいはい。同じ事二度も言わせんなや。学習しないやっちゃなー」
「すまんね、里中」

なんだか織斑千冬のツッコミと同じポジションを獲得しつつある男、里中。ツッコミにキレがあるが、出身地は大阪だろうか？

「……今の話を聞いて気になったんだけどさ、原作のヒロインたちってどうなってるんだろう……」

ぽつりと、思いついたように小野田が呟いた。

「シャルロットちゃんは2組だし……」

「一夏と話した後、箒は2組に帰ってたな」

「セシリアも2組だったはずだぞ。あの特徴的な外見は間違いねーよ」

「鈴は？」

「2組だけどいない。――てか、まだ転校してきてないやろ」

「ぬぅ……無念」

「ラウラもまだ来てないしなー」

「会長は？」

「しらねーよ。てか誰だよオリキャラ？」

「あ、もしかしてアニメしか知らない？　原作5巻で登場した2年の生徒会長だよ」

「その妹さんもアニメには出てないっすね」

「マジでか……どんだけヒロイン増えるんだよ……」

「信じて送り出した代表候補生が一夏の魅力にドハマリしてアヘ顔ピースビデオレターを送ってくるなんて……」

「ごめん。元ネタわかんね」

「その内学園の女子全員が一夏に陥落したりして……！」

ざわ……。

◇

ま、そんなことは置いといて。

「最後は早乙女だね。やっぱり、国か企業に？」

二人の事情は分かった。最後はこのマッチョメンである。

「おお、やっと俺の番か！　といっても、大体のことは二人が喋っちまったからあまり言うこともないけどな。俺も入江と同じようにＩＳ企業の所属だ。国はアメリカ……といっても日系企業なんだけどな」

アメリカ、という単語で多くのトリッパーが連想したのはあの機体――銀の福音だ。

ＩＳ本編には何故かアメリカの代表候補生が登場しないが、代わりに原作3巻、アニメで最後の敵として登場したのが銀の福音――シルバリオ・ゴスペルだ。

学園行事がことごとく潰される運命にあるＩＳ学園だが、中でもこの事件は一夏の成長に欠かせないイベントであり、強敵であったと言える。

「アメリカというと、銀の福音やファング・クエイクを想像するんだが……」

「いや、その二つとは無関係だ。そっちは政府開発の軍用機。俺のは企業が違うみたいだ。原作じゃあ登場してない企業……二次創作でいうオリ企業ってことになるのか」

「身も蓋もないことを言うな」

早乙女曰く、アメリカにある日系企業であり兵器メーカー。ただし、ＩＳ開発によって生まれた技術を流用した民間関係の受注のほうが多いため、必ずしも軍需産業とは言えないんだとか。……ＩＳの登場は、兵器だけでなく様々な分野にも革命を起こした。分かりやすいところで言うと医療用ナノマシンや義肢技術などがそれに当たる、らしい。よくは知らない。

早乙女もやはり専用機の所持や身の安全を条件に家族と共に交渉に行ったらしく。その後はデータを取る為にずっとＩＳ研究所に籠もりきりだったという。月に一度の戦闘データの提供や報告書の作成なども義務付けられているとか。

「あ～ぁ……なんていうか、３人ともちゃんと考えて行動してんだな。…はぁ……」

「なんだよ橋本？」

ため息を吐きながら、急にがっくりとした様子で橋本が項垂れるのを見た藤原が続きを促す。

「俺の考えが甘かったっていうか、ＩＳを動かせるってだけで浮かれてた自分が恥ずかしくなってきたっていうか。……だって俺には無理だよ。企業とか大使館の人の誘いも内心「めんどくさいから」って断っちまったし。ＩＳ学園に来たのだって、主人公みたいな境遇になれば変われるんだって思いあがってただけだし。努力なんて嫌いだし。専用機のことも、自分は特別なんだから勝手に用意してくれるんだと勘違いしてたんだ……。無理だよ、俺じゃあ……」

「……橋本……」

話している内にヒートアップしてきたのか、その口調は荒々しくなり、やがて激しい自己嫌悪へと変わっていた。

その落ち込む姿を見て、彼らは何も言えなかった。それは、橋本の言葉の大分部が自分たちにも当てはまるからだ。

「い、今からでも遅くないだろ。男性操縦者の情報ならどこの企業も研究所も欲しがるだろうし、そうすれば専用機を貸し出すって国もいくらでもいるって！　…なあ？」

「でも、交渉って言ってもどうやってやるんだよ……。相手は国とか大企業だろ？　俺、そんな経験ないし、言葉で言うのは簡単だけどさ……」

「そ、それはだな……なぁ、野々宮。どうすればいいと思う？」

上手い方法が見つからず、トリッパーの一人がこの場で一番頭が良さそうな野々宮にすがるような顔を向けた。

「……そのつもりがあるのなら、私よりも親や教師に相談したほうがいいと思う。ただ、この方法で専用機を持つということは、学園を卒業した後、一生をその国に所属する可能性があるということだ。私はこの世界に来る前から、将来は父のような自衛官になるか警察を目指そうと思っていたからいいが、君はそれでいいのか？」

「う〝……。じゃ、じゃあ入江や早乙女はどうだ？　企業の所属になってるんだろ、どうすればいいと思う？」

「え、あぁ……やっぱそこら辺は交渉次第っかなー。でも契約書はよく読んどけよ？　死んだ爺さんが言ってたぜ。契約書ほど怖ぇえもんはないって。よく読まずにハンコを押すと、骨までしゃぶられることになるからな」

「まあな。男性の操縦者は３０人……織斑一夏を入れたら３１人か。とにかくそれだけいるんだ。一人ぐらいは……って考えで変な実験や強行手段に出る奴がいてもおかしくない」

返って来たのは、期待を裏切る厳しい内容だった。

結局その後の話し合いで出たのは、ＩＳの実習や学園トーナメントなどで優秀な成績を修めれば、学園側やスカウトをしに来た者たちが勝手に専用機を提供してくれるのではないかということだ。わりと受け身な奴らである。

閑話休題。

「で、話を戻そうか。原作介入についてだけど……、」

ぱんっと手を打ち拍手を一つ。教壇に立った小野田が本来話し合うはずだった議題に移る。

「織斑一夏がクラス代表になるはずだったわけだが、野々宮の提案によって専用機持ち同士での勝負になっちまったな」

続きを受け取った藤原が野々宮と他の専用機持ちを見る。視線を向けられた野々宮は――涼しい表情だ。

「別に問題はないだろう？　私や他の誰かが勝ったとしても、何でもいいから理由を付けて辞退してしまえばいい。そうすれば織斑一夏がクラス代表になる」

「それはそうかもしれないが、なんであんなことを言ったんだ」

野々宮は眼鏡をすっと持ちあげると、いたって真剣な表情で言う。コイツ……中学時代は絶対に委員長とか生徒会長やってたタイプだ。そんなインテリもどきの雰囲気がある。

「トリッパーである前に、私は専用機持ちとして少しでも多くＩＳに乗ってデータを集める義務がある。経験も積まなければならない。それにこれは織斑一夏にとっても悪いことではない。セシリア・オルコットの変わりとまではいかないが、ＩＳ戦闘の経験を積むことができるはずだ」

話した内容には妙に説得力がある。トリッパーたちは納得したよ

うな表情になる。

「ん……まぁ、それならいいか」

それまでは抜け駆け厳禁。勝手な介入禁止。そんなルールはないのだが、妙な暗黙の了解というか、空気が出来上がりつつあったのだ。

「でも皆好き勝手に言ってるけどさ、実際のところ、……ボクは原作とかどうでもいいよ」

「は？　どういうことや比良坂」

ボソリと呟かれた比良坂の発言を聞いていた里中が喰ってかかる。

「……言葉通りの意味だよ。確かにＩＳは読んでいたけど、別に特定のキャラが特別好きだったわけでもないし、『物語』として好きだったんだ。……自分がこういう境遇になりたいとか、話の中に入ってみたいって望みがあったわけじゃない……。フィクションとして読むから好きだったわけで……。

だから原作に関わろうなんて気はないし、自分や家族に危険がなければ原作が変わっても、別にいいかなって……」

抑揚のないボソボソとした声だったが、それは静かな教室では全員に聞こえていた。

「言われて見れば確かにそうだよな……」

「でもさ、この世界って大丈夫なのか？　亡国機業なんてショボい組織はともかく、束がラスボスだと勝てる気しないんだけど」

「そうそう、無人機が攻めてきて死人とかでたらどうすんの？」

「いやいや、ＩＳでそんな展開ってありえなくないか？」

「でもさぁー、7巻時点で千冬先生に微妙に死亡フラグ立ってるし……」
「ちーちゃんが死んじゃった。こんな世界なんて滅んじゃえー！ってか？」
「まさか。亡国機業なら織斑マドカがワンサマーさんのハーレム入りして終わりだろうし。束がラスボスならなぁなぁで終わるんじゃねーの？」

ざわ……ざわ……。

「とりあえず、今日はここまでにしよう。また何か話すことがあれば召集するから。それまで各人自由に行動してよし」
「そうだな。明日も授業はあるし、遅くなりすぎてもいけないだろ」
「うぃー、おつかれー」
「「「「おつかれさん」」」」

◇

あの話し合いの後、僕と藤原の二人は寮の部屋に戻っていた。
しかし流石はＩＳ学園。下手なビジネスホテルよりもよっぽど豪奢だ。

『ブラジャー、付けるようになったんだな』
『ッ～～～～～～～！！！』

ドゴスッ！　バキンッ！　バリンッ！

『う、うわあぁぁー！？　ま、待てよ箒！　落ち着けって！！』

『煩い！　問答無用ッ！！』

「……ん？　何か変な音がしなかったか？」

「気のせいだろ。早く寝ようぜ、じゃないと明日が辛い」

こうして、ＩＳ学園入学初日は終了したのだった。

3話「身も蓋もないことを言うな」（後書き）

専用機持ち3人は、ＩＳが使えることが発覚してからは専用機を持つために積極的に動いてます。
何もせずにＩＳ学園に来た人は専用機を持ってません。例外は一夏。

箒は2組なのでいない。
セシリアは2組なのでいない。
シャルロットは2組なのでいない。Ｎｅｗ！

やったね鈴ちゃん！　2組の仲間が増えたよ！

余った一夏は箒と同室。

4話「――あっ、セシリア・オルコットだ」

空が白み始め、朝になり、夜が明けた。

早朝。ＩＳ学園のグラウンドには複数の人影があった。

「つ、疲れた……」

「無理。もう無理。一歩も動けねえ……」

「……う、…げほっ……はぁ……はぁ……」

荒い息を吐きながら、死んだように地面に寝転がる１３名の男子。

「情けねえ。もうへばったのか？」

「そんなに走ったわけでもなし、筋トレにしても腕立て５０回もできないとはなー」

「ハハハ……流石に初日からはキツかったのかな？」

涼しい顔。あっけらかんとした様子でそれを見下ろす８名の男子。

「……なんでアイツらあんなに楽しそうなんだ……」

「勉強だと駄目駄目だったからな。運動部の本領発揮ってわけだ」

「知識だと女子には勝てないしなー。一夏ほど酷くはないけど、俺達も全然理解できてないし」

全身に汗をかき、息を荒げながらも心地よい疲れに身を任せている９名の男子。

織斑一夏を除いた男子合計３０名。自主トレーニング（トリッパー）として集まった彼らであるが、見事に体力上位・中位・下位と分かれる結果となっていた。ちなみに小野田、藤原は中位である。

本来、ＩＳ操縦者――それも代表候補生や専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している。原作４巻において、ラウラとシャルロットが銃で武装した強盗三人を素手で制圧できたのもそのためだ。（勿論、織斑一夏と野々宮明、入江優助、早乙女大地はこれに該当しない）

女性なら誰でも憧れるＩＳ学園に入学するため、ＩＳ学習やハイレベルな教育を受ける女に学力で負ける。

どのような事態にも対応できるように、国家が威信を掛けて、時には数年に渡って訓練を受けた女に体力で負ける。

――『男が女より強かったのって、大昔の話だよ？』

原作において、クラスメイトにそう言われた一夏は『今、男は圧倒的に弱い。腕力は何の役にも立たない』とＩＳの性能の強さについて独白していたが、それは大きな間違いだ。ＩＳ学園内に限って言えば、ＩＳを使わない腕力だけの喧嘩でも男は女に負ける。

それを原作知識によって知っていた（アニメ版しか知らない奴らは原作派に教えてもらった）彼らは、こうして朝早くから集まっていたのだ。

一夏……？　箒が同室みたいだし、勝手に踏み込む勇気はないです。

◇

時間は過ぎて、朝八時。シャワーを浴び終わった僕らは朝食をと

るため、一年生寮の食堂に向かっていた。いたのだが……。

「おい比良坂、大丈夫か？」

藤原が見るに見かねたのか、葉川に肩を借りるようにして歩く比良坂に声をかけた。

常に顔色の悪い比良坂だが、いつもの二割増しで不健康になっている気がする。

「……自慢じゃないけど、ボクは中学時代『保健室の主』と呼ばれていた男さ……」

「ほんとに自慢じゃないなオイ」

「無理なら無理だって素直に言えよ。……ゆっくりと鍛えていきゃあいいんだから」

クラスメイトの一人、葉川が気遣う言葉をかける。葉川はざっくばらんに短く刈られた髪に、長身に鍛えられた引き締まった身体つきをしている。中学時代は野球部のキャプテンだったと知れば誰もが納得するだろう。

既に到着していたクラスメイトたちが確保していた席に比良坂を座らせ、僕たちは朝食を取りにカウンターへ行く。少し休めば回復するといっていたが、あまり無理はさせたくない。

「あ、おばちゃん！　友達の分も合わせてお願いね！」

「はい、和食セットときつねうどんだよ。そっちは日替わりA定食が2つだね」

恰幅のいいおばちゃんに「ありがとう」とお礼を言うと、にかっと笑って返される。中学時代は給食だったから、学食というのはな

んだか新鮮だ。ちなみに僕が和食セット。うどんは比良坂の分だ。
そうして席に着こうとした僕たちだが……。

「見てみて、やっぱり男子だわ」
「全員ジャパニーズなのよね？　やっぱり、ＩＳの製作者が日本人なのが関係してるのかしら？」
「千冬お姉さまの弟もいるらしいわよ」
「えええ！　それって姉弟揃ってＩＳ操縦者ってこと？」
「そうそう、噂じゃあ専用機持ちだとか」
「お姉さまの弟っていうくらいだから強いのかしら？」

……そうでした。一年生寮の食堂なんだから女子生徒も使って当然でした。１組男子が占領している食堂の隅の一角から微妙に距離を保ちつつも、女子が周りを囲むようにして群がっている。
女尊男卑のこの世界。何か滅茶苦茶で理不尽な命令をしてきたり、イチャモンつけてくる女子がいるのではないかと思っていたのだが、流石に男が３０人もいると躊躇するようである。いや、そういう勘違いした――言い方は悪いが非常識な女性はＩＳ学園に入ってこないのだろうか。
まぁ、そんなことはどうでもいいか。早く朝食を食べてしまおう。朝早くから運動したせいで腹ペコだ……？

「……なぜ、いる？」
「ん？　なんだよ、いちゃ悪いのか？　同じクラスなんだし、男同士仲良くしようぜ」

何時の間に座っていたのか。僕の向かいには我らが主人公、織斑一夏が座っていた。

「いや、別に悪くはないけど……」

「だったら問題ないだろ。皆で一緒に食おうぜ」

問題はない、ないのだが……。

「箒、……いつまで怒ってるんだよ」

「……」

織斑一夏のさらに隣、篠ノ之箒がいる。

ちなみにこの一角にいるのは全員男子。その合計は３１名。篠ノ之箒以外の女子は遠慮がちに一定の距離をとっているため、ここだけ男女比が３１：１になっている。ＩＳ学園ではまず見られない光景だ。

……絶対気まずいだろうな。僕らも気まずい。他の人たちも食事に集中しているフリをしながらこちらに意識を向けてるし。

「なあ、箒」

「だから、怒ってないと言っている」

彼女は一夏にろくに顔を向けていない。不機嫌そうな顔つきで、素早く箸を動かしている。

……大方、一緒に朝食を食べようと誘われたら、この男子がひしめく一角に連れてこられて不機嫌なんだろう。本心では二人きりで静かに話でもしながら食事をしたかったのではないだろうか？

「……私は先に行くぞ」

「ん？　ああ。また後でな」

心底不思議そうに、食事を終えて去っていく箒を見つめる一夏。

彼が女心というものを理解するのはいつなのだろうか。一夏は何かを思い返すかのように、追憶するかのように腕を組んで眼を瞑って

いた。時折、うんうんとうなずいている。
そこに現れる新たな闖入者。

「ちょっと、よろしくて？」
「へ？」

考え事をしている所でいきなり声を掛けられたのに驚いたのか、一夏が素っ頓狂な声を出す。
こ、この聞き覚えのある甘ったるいゆかな声。わずかにロールがかった金色で豪奢なちょろっとした長髪。いかにもなステレオタイプの貴族オーラ。

「――あっ、セシリア・オルコットだ」

思わずポツリと声に出てしまった。それに反応し、男子２９名全員がバッ！　と一斉に視線を向けた。セシリアが「ひぅっ」と少しだけ後ずさる。ちょろい。

「……え、えと……どういう用件だ？」

ちょっぴり怯えたセシリアを見て、それからセシリアを射殺さんばかりの熱視線を向ける男子（僕も含む）を見て、一夏はかろうじてそれだけ言うことができた。
一夏の反応に気を取り直したのか、セシリアはかなりわざとらしく声をあげた。……でも、まだちょっとビビってる。

「ま、まあ！　なんですの、そのお返事。わ、わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあ

るんではないかしら？」
「……」
その態度が気に入らないものだったのか、一夏は露骨に嫌悪した表情になる。
ＩＳを使える。それはすなわち国家の軍事力に直結する。ＩＳに対抗できるのはＩＳだけ。相手がＩＳを持たず、こちらに数機のＩＳがあれば国家解体戦争だって行えるのだ。だからＩＳ操縦者は偉い。ＩＳを使う事ができる女は偉い。今の世の女性の大部分の思考がそれだ。
ま、彼女はすぐそれを改めるどころか、原作では速攻で一夏に惚れちゃうんだけど。マジちょろい。
「悪いな。小野田や他の皆はどうか知らないけど、俺は君が誰か知らないし」
そこで僕の名前を出すな。……でも、僕の名前を覚えててくれたんだな。ほとんど話してない気がするんだけど。ちょっと嬉しい。
「わ、わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
「あ、質問いいか？」
「ふん。下々の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」
…ほうほう。なるほど原作通りだ。彼女が２組となったことでイベントが消失したかと思ったが、こんな形で再現されるとは。
「代表候補生って、何？」
がたたっ！　ガシャーン！　聞き耳を立てていた食堂の女子生徒

たちがずっこけた。おおい、原作だとクラスの数名だが、今は1年生のほとんどが聞いてるんだぞ。

スパァーンッ！

「いってえ！　……あれ、そんなに痛くない？」

「自分、本当にアホやなぁ。単語から想像できへんのかい」

炸裂したのは織斑先生の出席簿……ではなく里中のハリセンだ。いい音がする割にそこまで痛くはない。

もう参考書は読んでいるはずだが、それでも分からないのだろうか？

「し、信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地で……」

「オルコットさん。貴女には誤解のないように言っておくが、それが分からないのは織斑一夏ぐらいだ。彼を見て、どうか私たち日本人全てが織斑のような人間であると誤解しないで欲しい」

すかさず野々宮が眼鏡を光らせながらフォローに入る。あのキラリと光を反射させて眼を隠すやつ、どうやったらできるんだろうな。

「おい、なんかすごく馬鹿にされてる気がするぞ」

馬鹿にされてるんじゃない、馬鹿なんだよ……！　馬鹿は自分のことを馬鹿だと自覚してないから馬鹿なんだよ……！

これは原作知識がどうこういう問題じゃない。世界が変わってからＩＳ学園に入学するまでの約２ヶ月間、普通に生活していれば新聞雑誌やテレビにネット、外の情報を見れば自然と覚える知識がある。そんな常識の範囲のはずだ。

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……あなた、本当に“あの”織斑千冬の弟ですの？だいたい単語から想像したら分かるでしょう」
「そういえばそうだな」
「……織斑ちゃん、外国の人に字面から想像したら～なんて言われて恥ずかしくないのか？」

入江、もうそれ以上は言ってやるな。というか、セシリアが３１人も男子がいる中で織斑一人に的を絞って話しかけてきた理由はそれか。

織斑千冬。第一回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』優勝者にして公式戦無敗の戦績を誇る、名実ともに世界最強のＩＳ操縦者。全ての女性の憧れである存在。注目するのも無理はない。

「ふん！　つまりわたくしはエリート！　エリートなのですわ！」
「そうか。それはすごいな」
「……馬鹿にしてますの？」

う～む、相手の神経を逆立てているようにしか見えない対応だ。これはマズい。……ん？

ガタリと音がしたのでそちらを見ると、席を立った藤原が何やら比良坂に話しかけた後、一夏の背後に移動する。「うわっ！」と、突然肩を掴まれた一夏がビクリと反応した。

「はいはい、傾注傾注。イマイチ意味を理解していないお馬鹿な一夏くんのために、俺たちが説明してやろう。比良坂ー」
「は……？　えっと、どういうことだ」

状況が読み込めずにオロオロしている一夏の前に、携帯型端末を

持った比良坂が前に出る。彼が片手だけで素早くキーボードを叩くと、表示されるのは空中投影ディスプレイ。

「えー、俺たち男子のような例外を除き、普通に正規の手段でＩＳ学園に入学しようとすれば、その難易度はとても高い。特に事前予習としてＩＳ学習は欠かせない。つまり、女子たちは織斑のいう『電話帳』と何年にも渡って格闘し、理解できるように高度な教育を受けているわけだ」

ディスプレイには、ＩＳ学園の入学試験の難易度や倍率。事前学習する内容がずらずらと表示されている。

「で、ＩＳ学園は日本だけでなく世界中から生徒が集まるわけで、その倍率はトンデモないことになってる。つまりこの学園の女子生徒全員が、その中を勝ち抜いてきた優等生ということだ。で、ここから代表候補生の話に移る」

ディスプレイの映像が映り変わり、テレビなどで報道される候補生や専用機の画像になった。専用機持ちは国家代表かその候補。国によっては俳優業やモデルもする。国家公認アイドルのような存在なのだ。

「ＩＳ操縦者やＩＳ学園の生徒は、一般から見たらそれだけでエリートってことになるが、その操縦者の中でも特に優れた技術と資質を持つ者だけが候補生になれる。才能がなきゃなれないし、ただ才能に胡坐をかいてるだけでもなれない。さっきセシリアがエリートって言ったのは事実なわけだ」

「な、なるほど……」

一夏の表情は妙に納得したものに変わっていた。さっきまではよ

く分からないから適当に生返事をしてたな……。
その説明と一夏の様子に自尊心を満足させることが出来たのか、セシリアは鼻息も荒くふんぞり返っている。ついでに乳も揺れている。

「……で、だな。いくらエリートと言っても所詮は候補。代表候補生が目指すべきは、他の候補生に打ち勝って国家代表となることだ。国家代表と候補生とではさらに大きな開きがある。お前にも分かり易く漫画で例えると、ベジータとナッパぐらい違うと思ってくれたらいい。ちなみに普通のＩＳ操縦者がラディッツだ」

まともな解説だと思ったら、とんでもねえ例えを使いやがったァァァ…！

一夏や他の男子たちが大きくうろたえるのが分かる。
ディスプレイが次々に各国の国家代表を映し出し、最後に画像が『モンド・グロッソ』へと移り変わる。

「だが、国家代表ＩＳ操縦者となれればそれで終わりなのか？　否！　断じて否！？
各国代表たちは三年に一度開催されるＩＳ世界大会、天下一武ど……げふん、『モンド・グロッソ』での優勝を目指すのだ。そこで優勝した者に与えられる『最強（ヴァルキリー）』の称号こそが全てのＩＳ操縦者が目指すべきモノ！
そして、その初代ヴァルキリーの称号を持つ人物が一人、この学園にいるな……？」
「そ、それは……」

藤原の顔が、眼が、くわっと見開かれる。
一夏は知っている、最強の人物を。彼は誰よりも知っている、地上最強の生物を。一夏は知っている、自分の姉の名を。

その名も――、

「織斑千冬（ブロリー）だ」

「何でだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

スパァーン！！

里中から半ば強引に奪ったハリセンを思い切り叩きつける。

「藤原！　おまッ、何て恐ろしいことを言いやがる！？」

「そ、そうだったのか……。セシリアがそんなに凄い奴だったなんて……よく分かってなかったとはいえ、俺はなんて口のきき方を……」

ちょ、おおいワンサマーさん！？　今のを信じるのかよ？

「……代表候補生の女の子たちは、千冬姉になることを目指してるのか。……千冬姉がいっぱい……千冬姉が……」

「なんか一夏の眼がぐるぐるになってて怖いんだけど……」

「おい、誰かこいつなんとかしろ！」

ざわざわざわ……。

「この馬鹿騒ぎの原因は貴様らか」

食堂内が静寂で静まり返った。尻の穴にツララをぶっさされたような悪寒。僕たちはこの日、漫画や小説の中でしか知らなかった『殺気』というものを体感した。

ギギギと、壊れたブリキのように首を回す――間もなく、藤原と一夏がアイアンクローで釣り上げられた。

「あがががががが……」

「痛い痛い痛い痛い……」

そして、織斑先生の視線はセシリア・オルコットへも向いた。

「お前もだ。来い」

「ひ、ひぃいいいいいいいいッ！！」

こわいですわいやですわ、と逃げ出そうとするセシリアの首根っこを掴んで。ついでに藤原と一夏もずるずると引っ張って、織斑先生は一年生寮から出て行った。

結局、その日藤原と一夏は昼休みが終わるまで授業に出なかった。

4話「――あっ、セシリア・オルコットだ」（後書き）

「お、織斑一夏…！　それに藤原恵一！　このわたくしにこのような屈辱を与えたこと、後悔させてあげますわ！」

その夜、セシリアは布団の中に頭まですっぽりと包まりながら宣言したそうな。

5話　織斑一夏ＶＳ入江優助

「あ」

という間に翌週だ。すなわち今日は月曜日。クラス代表決定戦。

――そこに、『白』が、いた。

眩しい程に純白を纏ったＩＳが、その装甲を解除して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！　織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」

◇

クラス代表者決定戦。

第一試合　織斑一夏ＶＳ入江優助

第二試合　野々宮明ＶＳ早乙女大地

今頃一夏は白式を装着している最中だろうかと考えながら、僕たちは第三アリーナ・Ｂピットでアリーナ・ステージを映したモニターを眺めていた。

そこに映っているのは、既にアリーナ上空に浮かびながら待機している1機のＩＳ。

「あれが入江の専用機」
「『ラファール・リヴァイヴ』……だよな？」

藤原が思わず疑問形で返してしまったのも無理はない。
本来のリヴァイヴはネイビーカラーに４枚の多方向加速推進翼（マルチ・スラスター）が特徴的なシルエットをしている。リヴァイヴは学校の訓練機として打鉄と一緒に使われているのを見ているから間違いない。それに比べて、入江のＩＳはカラーだけでなくフォルムも違っていた。
背面部中央には加速推進装置（メインスラスター）が１基と、さらに１対の推進翼が中央部から二つの翼に分かれるようになっている。やや大きめの脚部にはホバースラスターのようなものが見てとれ、見た目に反して機動性と加速性、姿勢制御に優れているように思える。機体各部にところどころあるのもスラスター口だろうか。
原作でシャルロットが使っていたラファール・リヴァイヴ・カスタム？が全体的な性能の向上と多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を目的とした汎用型なら、彼の機体はその高機動型といったところか。

「しかし、なんだな……」
「ああ……」

入江のＩＳは本来のリヴァイヴの緑色から黒と赤に変更されていた。黒を主体に、炎をイメージした赤のカラーリング。

「派手な機体だな」
「まあ、金ぴかのＩＳを持ってこられるよりはマシだろ。……と、あちらさんも準備が終わったみたいだな」

新しく表示されたモニターには、今まさに開かんとするＡピットのゲートが映っていた。

◇

「よう、織斑ちゃん。どうやらＩＳの搬入は間に会ったみたいだな。あんまり遅いから、野々宮と早乙女の試合が先になるかと思ったぜ」

右手に持ったアサルトライフルを肩に担ぎながら、入江はまるで遊ぶ約束に遅れそうになった友人に話しかけるような気楽さで声をかけてくる。

黒と赤の機体『ラファール・リヴァイヴ』。その外見とパーソナルカラーは学園の訓練機とは異なる、まさしく「専用機」といった印象を感じさせる。入江はいつものサングラスをかけていないが、その代わりに黒いバイザー状の高感度ハイパーセンサーを頭部に装着していた。

「ああ、待たせて悪かったな」

――警戒、敵ＩＳ操縦者の頭部ハイパーセンサーが射撃モードに移行。セーフティロック解除を確認。

すでに試合開始の鐘は鳴っている。いつ撃ってきてもおかしくないことを再確認する。

「まったくだ。んじゃ、さっそくで悪いが――」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認――警告！　ロックオンを確認――警告！

「マッハでハチの巣にしてやんよ！」

連続した火薬の炸裂音が響き、五五口径アサルトライフルから弾丸が吐きだされる。映画で見るのとはまったく違う迫力と鼓膜を打つ音。ほとんど反射で白式を動かして回避する。

「うおっ！？」

いくらＩＳが速いといっても、それが弾丸よりも早いわけがない。白式のオートガードが体を守ってくれたが、形成途中の装甲が衝撃で歪んでいく。直後、遅れた衝撃が鈍い痛みとして襲って来た。

（くそっ、俺が白式の反応に追いつけてないのか！？）

ＩＳバトルの勝敗はどちらかのシールドエネルギーが０になれば決まる。今の攻撃はバリアーを完全に貫通するほど強力な武器ではないため実体の機体装甲へのダメージは低いが、それでもシールドエネルギーは確実に減っている。

「撃つべし！　撃つべし！　撃つべし！」

アサルトライフルから吐き出される弾丸。フルオートによる攻撃が上空から降り注ぐ。いつの間にか頭上に位置取られていた。さっきからロックオン警報が鳴り響き続けている。

「装備、装備は！？　……がっ！」

「動きを読む……動きを読む……。当てようとは思うな、無理に当てようと意識するな。弾幕での予測射撃……相手を射線に突っ込ませるように……！」

無理矢理な加速で射撃を振り切ろうとするが、機体を通して感じ

る衝撃は入江の追撃から逃れられていないことを痛感させる。
さっきから俺は入江の周りを旋回するようにして背後を取ろうとしているのだが、そんな狙いはお見通しとばかりに対応してくる。
（くそっ、こっちにも射撃武器か、せめて物理シールドでもあれば……！）
現在展開可能な装備の一覧を確認。だが無情にも、表示された装備は一つだけだった。

「近接ブレード……って、これだけかよ！？」

ええい、ままよっ！

キィィィン――！

高周波の音とともに、右腕から光の粒子が放出される。光が収まった時、そこには長大な片刃のブレードが握られている。これが俺の武器。俺の『刀』。

「ブレード……当たってやるわけにはいかねーな！」

入江はそう呟いてから、再びアサルトライフルを装填して構える。

「こっちだって、お情けで当たってもらおうなんて思っちゃいねえ！」

激戦が、始まった。

襲ってくる射撃を身を捻る様にしてかわし続ける。避け切れないものは防御し、それ以外は回避する。

（――やれる。あとは集中するだけだ）

それに、さっきからＩＳの動作が軽い。白式の最適化処理が進んでいるのか、それとも俺自身がＩＳに慣れてきているのか、だんだんと白式を動かす“コツ”というものがつかめてきた。

（入江はさっきから射撃しかしてこない。距離をつめればこちらが優位なはずだ）

見る限りでは、入江のＩＳに近接用の武器はついていない。『待機状態』の可能性もあるが、それでも近づいてから展開したのでは間に合わないはずだ。

射撃を避けるために左右に蛇行するように機体を揺らしながら跳ね、虚をつくようにそのひと跳ねから急激なターンを行う。そうして徐々に接近していくと、そこで唐突に攻撃が途切れた。

「……やっべえ」

「弾切れか？　……だったら！」

無理矢理の加速で一気に距離を詰める。ガギンッ！　響くのは派手な金属音。間合いに入り、上段から下段への袈裟を放ったはずだった。だが、あろうことか入江の奴は斬られる前に手に持ったアサルトライフルをぶん投げてきたのだ。

「くっ、だけどこれでもう射撃は怖くないぞ……って、ええ！！？？」

視線を向ければ、後方へ下がりながら入江は何か小さなものを投げつけていた。ＩＳの警告によって、それが投擲されたグレネードだと判明する。

爆発が起こった。

◇

ピットから観客席へと移動して、クラスの皆と試合を見ていた僕たちだったが、グレネードの投擲によって起きた爆発に巻き込まれる白式を見て思わず声が出ていた。

アリーナには、１組の男子だけでなく他のクラスの女子までもが集まって来ていた。当然だ。専用機での戦闘――それも世にも珍しい男のＩＳ操縦者同士の戦いなのだから。

「女子たちは、これで一夏が負けたって思っただろうね」

「だろうな」

それを眺める藤原の眼は、何か眩しいものでも見るかのように細められている。

「……やっぱり、ああいうのを主人公って言うんだろうな」

何を今更。一夏がインフィニット・ストラトスの主人公であることは僕たち３０人全員が知っていることだ。

爆発によって生まれた黒煙が晴れる。その中心にあるのは、純白の機体。

そう、最適化（フッティング）が終わり、一次移行（ファースト・シフト）が終了した姿で。

◇

「……一次移行か。このタイミングで完了するなんて、カッコイイじゃねーの」

飄々と言う入江だが、表情に出た驚きは隠せていない。

変化は劇的だった。

全身を包むＩＳは光の粒子に弾けて消え、より洗練された形状となって変わっていく。角ばった部分は、滑らかな曲線とシャープなラインに。工業的な凹凸は消え、それは中世の騎士が纏う甲冑を思わせるデザインへと変貌した。

そして何より変わったのは、その武器だ。

「――雪片」

近接特化ブレード《雪片弐型》。

それは、かつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳ『暮桜』の装備の名称、雪片と同じ名だ。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

まったく、つくづく思い知らされる。でももう、守られるだけの関係は終わりにすべきだ。

「俺も、俺の家族を守る――」

「……そうかい」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

千冬姉の弟だってのに、クラスの男子の中で情けない姿を見せてちゃ格好がつかない。

「というか、逆に笑われるだろ」

入江の手には、いつの間にか新しい銃が握られていた。面制圧力に特化した連装ショットガンだ。今から逃げても間に合わないだろう。だが――、

（この間合いなら、俺の攻撃の方が速い……！）

右手を握り締める。そこにある雪片が、答えるかのように低い機械音を鳴らす。

ギンッ――！

上段からの一閃。縦に真っすぐ相手を断ち切るその太刀筋。入江は後方へとバック転するかのような挙動で雪片から逃げるが、その際に手に持ったショットガンが弾かれて落下していく。

この好機を逃すまいと、俺は再度入江へと突撃する。

「おおおおっ！」

もはや対応できる武器を持たない入江の間合いに飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つべく動き、

「だけど、今の織斑ちゃんじゃあ誰も守れねえよ」

「な、――！？」

――それより早く繰り出された左足の蹴りに柄頭を打たれ、押し込まれて封殺された。

「少なくとも、ずぶの素人同然のオレに苦戦してるようじゃな！！」

ぐりん、と。入江は機体各部に増設された独立稼働推進装置（サブ・スラスター）を最大で稼働させると、強引に後ろ回し蹴りを放った。

銃弾を受けた時とはまったく別の衝撃が体を突き抜け、その衝撃のままによろめいて入江の姿を見失う。

「ッはあああああああああああ――！！」

ハイパーセンサーによって強化された知覚がその雄叫びを、頭上から突撃をかけてきたリヴァイヴの姿を捉える。

ＩＳの全方位視界接続は完璧だ。けれど、それを使っているのは人間、真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に『見る』ことができない。送られてくる情報を頭の中で整理する分、そこにはコンマ数秒の遅れが生じる。

「！？」

雪片を振るう余裕もなく、『蹴り』飛ばされた。

この程度の攻撃なら操縦者の命に危険がないため絶対防御は発動しない。つまりシールドエネルギーはほとんど減らない。しかし、絶対防御が発動しないということは操縦者への衝撃はそのまま伝わる。何よりも、せっかく縮めた間合いが離されてしまった。

だが、今の俺には――そんなことはどうでもよかった。入江に言われた言葉が聞き捨てならなかった。

「っ！　なら強くなるさ！　自分の全てを使って、誰かを！　誰だって守れるくらいに！」

「できんのか？　ＩＳってのはそんな簡単に扱えるものじゃねーぜ……今のまんまじゃ、誰かに“守られる”だけだ」

――警告！　ロックオンを確認――警告！　新たな銃器。携行型グレネードの発射を確認。

背後の大型スラスターを最大出力で吹かして回避。全開の力で加速する。

「できるできないじゃない、やるんだ！」

強さ。それは心の在処。己の拠所。自分がどうありたいかを常に思うこと。……少なくとも、俺はそう思っている。

俺は強くなりたい。強くなって、誰かを守ってみたい。

「だったら見せてみな。言葉じゃなくて行動で！」

「ああ、俺は俺の家族を守る。友達や仲間を守る！　お前だって、守ってやるさ！」

「……は？」

俺の心は今、燃え立つような気迫で満ちていた。追いつけていなかったはずの白式の性能にもついていけてる。俺と白式は文字通り、一体となっていた。

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、その刀身が光を帯び、より強い存在となって俺に力を伝えてくる。目の前にはウインドウが現れ、「零落白夜」の四文字が表示された。

「おおおおっ！！」

加速。加速加速加速。バイザー越しに驚愕に歪む入江の表情が見える。

そして俺は、雪片でリヴァイヴを横なぎに斬り払った。

『試合終了。両者――ドロー』

……え？

「え、なんでだ……？」

多分、この時の俺はぽかんと間抜けな顔をしていただろう。そして向き合った入江は、何とも言い難い表情を俺に向けていた。どういうこと……？

何が起こったかわからないまま、試合は終了。結果は引き分けだった。

◇

「えっと、つまり白式の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）、雪片の『零落白夜』にはすごいエネルギーが必要で……」

「……自分のシールドエネルギーを攻撃に転化しているということですか？」

俺の言葉を箒が続ける。

Ａピットに戻り、何故引き分けになったのか千冬姉に聞くと返ってきた答えがそれだった。

相手のバリアー残量に関係なく、機体本体に直接ダメージを与える『バリアー無効化攻撃』。絶対防御を無理やりに発動させることでシールドエネルギーを大幅に削ぐことができる、まさに一撃必殺ともいえる特殊能力。それは全ＩＳ中でも最強の威力を誇る。

「でも、発動してるだけでシールドエネルギーを消費しちまうだなんて」
「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。……返事はどうした」
「……はい」

つまりこの試合が引き分けになったのは、俺の攻撃でリヴァイヴの絶対防御が発動してシールドエネルギーが０になるのと同時に、零落白夜の発動によって白式のシールドエネルギーも０になったということなのだ。
……こういう場合、クラス代表はどうなるんだろう？　俺と入江、両者敗北で、野々宮と早乙女の二人で決着をつけるのだろうか？

「あー、いたいた！　お～い織斑ちゃん！」

そんなことを考えていると、ピット内に間延びした声が響いた。この声、そして『織斑ちゃん』という呼び方。間違いない。

「い、入江…！」
「どうしたー。ハトが荷電粒子砲喰らったような顔して？」

そんな比喩表現は聞いたことないぞ。というか顔を見る前に一瞬で消滅しちまうだろ。
これはあれか、新章突入、急転直下、怒涛の展開、あのライバルが味方になって再登場。入江優助が仲間になりたそうな表情でこちらを見ている。――仲間にしますか？

「ドラ○エか！」

「うん？」
「なに？」
「……織斑くん？」
「お前は何を言っているんだ？」
「あ、いや……何でもないです」

上から入江、箒、山田先生、千冬姉の反応である。自重すればよかった。

しばらく不思議そうな顔で俺を見ていた入江だったが、（というかサングラスで眼は隠れてるんだけどな）千冬姉に向き直るとあっけらかんとした表情で言った。

「今回の試合なんすけど、俺の負けにしてください」

いきなりなんてことを言うんですかこの人は。

「ほう、……どういうことだ？」
「いや～、流石に途中まで初期設定のまま戦ってた相手に追い詰められて、あの終わりで引き分けだと納得できないんで。……駄目っすか？」
「お前がそれでいいなら結構。……しかしあの試合は何だ？　あの程度の相手に射撃を全弾命中させることができないでどうする。動きにも無駄が多い。その結果として白式に接近戦を許してしまっている。それにお前のリヴァイヴには近接用の武装が積まれているはずだ。全ての武装を1秒以内に展開し、使いこなせるようになれ」
「……了解です」

情け容赦のない鬼教官っぷり。褒め言葉なんて一つとしてありゃしない。叱られることで伸びる人もいれば、褒めることで伸びる人もいるはずですよ千冬姉。まさに鬼、鬼畜姉。

パァンッ！

「うぐぐ、すいません」

こういう時は素直に謝るに限る。余計な事を言えばまた脳細胞が死んでいくことになるからだ。……いや、さっき俺何も言ってなかったよな？

「次は野々宮と早乙女の試合だ。お前たちはさっさと出て行け」

さっきは守るなんて言ったけど、この人はそもそも守る必要がないよな、絶対。そういう危機に陥る場面がまったく想像できない。

「行くぞ、一夏」「あ、ああ」

……そういえばもう一人いたよ。優しさ成分控え目のファースト幼馴染が。てかクラス違うのにここにいて大丈夫なのだろうか？2組でちゃんと友達を作れてるかお父さんは心配だぞ。

俺は重い腰を上げてアリーナ観客席へと向かおうとする。

「そうだ、織斑ちゃん。さっき試合で言った事、訂正するわ」

そんな俺の背中に、入江の声がかけられた。

振り向くと、入江は俺たちとは反対方向の出口の扉に手をかけたまま俺を見ていた。口元にニヤリと、何時もの軽薄そうな笑みとは

異なる不敵な表情を浮かべ、サングラス越しに俺を見つめている。

「お前の台詞を聞く度に、何を青臭いことを言ってるのかと思ってたけど。……お前みたいな奴、嫌いじゃないよ」

……はて？　俺はそんなにコイツの前で喋ったことがあるだろうか？　まるでＩＳ学園に入学する前から俺の事を知ってるような口ぶりだ。

そこまで真面目な顔で言ってから、入江は急におどけたような表情になる。雰囲気もいつもの軽薄なものに戻っていた。

「『お前だって、守ってやる』……あの台詞、シビれたね～。オレが女だったら惚れてたかもな。でも悪ィな、オレはそういう趣味ないから。お前の事は嫌いじゃないけど、……そういうことで、スマン！」

「じゃあな、“一夏”！」と、早口でまくし立てると入江は風のように去って行った。疾風の再誕（リヴァイヴ）という機体（ラファール）に乗っているだけあってか身軽な男である。ふむ……。

「えっと……箒？　何でそんなに顔を赤くしてるんだ？」

千冬姉に怒られる前に移動しようと思ったのだが、俺の幼馴染は何やら顔を真っ赤にしてわなわなと震えていた。あれ？　どうしてアリーナに竹刀を持ちこんでいるんですか？　素振りの練習？　熱心だな。

「こ、この、破廉恥な……！」

「お、織斑くんっ、やっぱり男の子に興味があるんですかっ！！

そ、そんな……駄目です！　男の子同士でなんて、そんな、そん、

な……」

おいおい山田先生、あなたは何を言ってるんですか？　なんで両頬に手を当てて体をクネクネさせてるんですか？

分からん。さっぱりわからん。よくわからないが、変な誤解が発生してることだけは理解できたぞ。

「き、きぇぇえええええええっ！！」

怪鳥のような奇声をあげて、箒の振り上げた竹刀が振り下ろされる。

バシーンッ！！

竹刀の音が響いた。

5話　織斑一夏ＶＳ入江優助（後書き）

男相手でも無自覚にフラグを立てようとする一夏さん。
白式のエネルギー切れが遅かったのは入江の技量不足が原因。セシリアほどにはシールドエネルギーを削りきれなかった。というか強さで言えば入江はシャルの下位互換だし。

◆リヴァイヴ？

フランスに本社を置くＩＳ企業、デュノア社が開発した第2世代型ＩＳ。傑作機とも言われるラファール・リヴァイブの特注使用。
正式名称は『ラファール・リヴァイヴ・入江優助専用カスタム機2号』なのだが、長いのでリヴァイブ（リヴァイヴ？）と作中では呼称。ちなみに1号はデュノア社のＩＳ開発室でデータ収集に使っていた『ラファール・リヴァイヴ』。入江が勝手に名付けた。

シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？に比べ、より機動性を重視した射撃型の機体となっている。その武装は燃費を重視したためか、実弾系のみ。
近接ブレードも装備しているはずなのだが展開は苦手。そのため、対一夏戦では日の目を見ることがなかった。曰く、「蹴ったほうが速い」とのこと。

6話　セシリア・オルコットＶＳシャルロット・デュノア

一夏と入江の試合が引き分けに終わったため、どうなることかと思っていた男子（トリッパー）とその他観客だったが、しばらくして「審議の結果、織斑一夏を勝者とする」という放送で判定が下された。

クラス代表者決定戦。
第二試合　野々宮明ＶＳ早乙女大地

この試合で勝った方が一夏と戦い、その結果によってクラス代表を決定することになるのだ。

「しかしまぁ、どうなることかと思ったけど……」
「初めてでアレだけ動けたってのは凄いんじゃないか？　というか、俺は入江が意外と強くて驚いたよ」

うむ、藤原のその言葉には同意する。入学試験でも打鉄を動かすのは簡単ではなかった。そして入江も、デュノア社ではデータ取りばかりで、ＩＳを使った純粋な戦闘訓練はほとんどできなかったという話だが、見た目によらず努力家なのかもしれない。
ちなみにこの一週間、僕たち男子（トリッパー）３０名もそれなりに自主トレーニングはしている。全員強制参加（じゃないとサボる奴が絶対に出てくるとは葉川談）の朝の鍛練に加え、放課後の自主勉強。専用機持ち３名はアリーナを借りて互いに訓練もやってたとか。……他の面々は訓練機の申請が下りず断念することになったが。
（まあ、たかが一週間程度のことで何を偉そうにしてるんだと言われそうだけど）
なにせ女子生徒や専用機持ちは年単位でこれをやってるのだ。そう簡単には追い抜けないだろうな。

「でもさでもさ、織斑くんすごいよねー」
「そうそう、まさか初期設定のままの機体で戦ってたなんて」
「おりむーのＩＳはブレードだけだったし～」
「そういえば千冬お姉さまのＩＳ『暮桜』も、武装はブレード１本だったのよね……！」
「きゃー！　やっぱり姉弟なのね！　すごいわすごいわ！」
「でもなんで引き分けって判定が出ちゃったんだろう……」
「入江君が反撃したんじゃないの？　ここからじゃ角度の関係で見えなかっただけで……」
「いいなー、私も専用機ほしいよーう」

……。

僕と藤原の周りには、囲い込むようにして女子の輪が出来あがっていた。

織斑一夏と入江優助。共に専用機持ち。何よりも、世にも珍しい男のＩＳ操縦者。そんな希少な存在に興味を持つのは何らおかしいことではない。そして、興味を持った対象をより深く知るために、その人物に近い者から情報を聞き出そうとするのも普通の行動だ。

つまる所、僕らはさっきまで彼女たちに根掘り葉掘り二人について聞かれていたのである。……もっとクラスの皆がいるところに座っておけばよかったかな。３０人近い人数で固まっていれば女子は中々近寄って来ないのだ。

（それにしても凄いパワーだ）

女三人寄れば姦しいとはよく言うが、三人どころかその倍以上集まっている。その中にはどこかで見たような容姿の子もチラホラと。口調が特徴的なのほほんさんは確定。後は七月のサマーデビルくらいかな、分かったのは。

「おーい、恵一！　小野田～！」

とそんな僕らに声が掛けられる。

「あれ、織斑くん？」

「え、ホントだ！　こっちに来てる」

ざわざわざわ……。女子たちがにわかに騒ぎだす。

「お前……いいのか、ピットにいなくて？」

「ああ、千冬姉に邪魔だからさっさと出て行けって言われちまった」

噂をすればなんとやら。やって来たのは、さっきまで話していた当の本人。織斑一夏だ。

あの食堂での一件以来、妙な仲間意識でも芽生えたのか藤原に積極的に話しかけて来るようになった。そして、席が近いのと藤原経由で、僕とも友人関係となっていた。

「箒、ここに座ろうぜ」

「……」

そうだよね。貴女もいるよね箒さん。でも少しは喋りませんか、そんな不機嫌そうな顔だと周りの女子生徒が怯えてます。というか数人逃げました。一夏だけならむしろ女子が群がって来たんだろうに……。

このままだと、せっかく「箒は1組だけどぼっち」じゃなくなったのが「箒は2組だけどぼっち」になっちゃいますって。

「お、織斑くん……！」

「へ？」

気の抜けた返事をする一夏の横にいるのは、篠ノ之箒が発する不機嫌オーラにも怯まずに話しかけた女子三人。一夏の反応を待ちわびるかのように興味津々といった様子で立っている。

「さっきの試合、すごかったね」
「それでさ……私たちも、隣いいかな？」
「噂のおりむーと私も話したいな～」

一瞬たじろいだ様子の一夏。オロオロと僕たちの方を見て、それから隣の箒を見て。

「え、ああ。別にいいぜ」

と、その答えを聞くと女子の一人が安堵のため息を漏らし、後ろの二人はガッツポーズ。

「あー！？　私も話しかけたらよかった……」
「まだチャンスはあるわよ」
「むむむ、織斑くんが駄目なら入江くんは？　どこにいるのかしら」

そしてざわめく周囲の女子たち。
先程の試合の内容について、専用機のことについて、あるいは姉の織斑千冬のことについて、一夏は質問攻めにされている。

「……なんか、俺達は場違いだな」
「うん。ここは一夏に任せて、ちょっと場所移動するか？」

さっきまでは僕たちに群がって質問してきた彼女たちだが、一夏が来てからは標的を変更したようだ。
まあ仕方ない。彼の姉は世界中の女性の憧れを集める『最強』の

ＩＳ操縦者。テレビや新聞で報道されて知名度もバツグン。一夏自身も専用機持ちで、なおかつ顔もいいと来たもんだ。ああ妬ましい。

「いや、もう少ししたら野々宮と早乙女の試合が始まるだろう。そしたら皆もそっちに注目を、――」

「見つけましたわよ！」

「――うん？」

響いた声に驚いて後ろを振り向く。そこにいたのは鮮やかな金髪に蒼い瞳の女性、腰に手を当てたポーズで一夏をビシッと指差すセシリアだった。眼をつり上げて睨んでいる。

「あ、……セシリア・ウォルコット？」

「オ　ル　コ　ッ　ト　ですわ！」

一夏の言葉に、顔を真っ赤にして怒り心頭といった態度を示している。……なんだか厄介事の予感。

◇

ついてきなさい！　と言われた一夏が連れてこられたのはアリーナ入口付近であった。今はステージで行われる試合の方に皆注目しているためか、ここにいるのは二人だけだ。

ここからではアリーナ・ステージは見えない。次に早乙女と野々宮のどちらかと戦うにせよ、相手の戦い方を見ておいて損はないと思っていたのだが、これでは試合の様子が分からない。もうすでに

試合開始の合図は鳴っていたはずだ。
だがセシリアにとって、そんなことは知った事ではない。

「先程の試合ですけど、安心しましたわ。あなたが負けてしまっては、クラス対抗戦で戦えませんから」
「いや、まだ試合は残ってるから、俺がクラス代表になると決まったわけじゃないんだけど。……って、クラス対抗戦ってことは、セシリアが2組のクラス代表なのか？」

ふっ、とセシリアは髪をかき上げる仕草をすると、見下したような表情で一夏を見た。

「まだ正式に決まったわけじゃありませんわ。1組のこの試合が終わった後、フランスの代表候補生とわたくしで決闘をしますの。まあ、勝敗は火を見るよりも明らか。わたくしの勝利は決まったようなものですが！」

オーホホホ！　と自信満々に宣言するセシリアを見て、一夏は不思議そうに質問する。

「どういうことだ？　相手も同じ代表候補生なんだろ。だったら、」
「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットの専用機『ブルー・ティアーズ』は第三世代機。我が祖国イギリスが開発した最新のティアーズ型なのですわ。対して、フランスは未だに第三世代型の開発ができておらず、シャルロットさんのＩＳも第二世代型。それも量産機の『ラファール・リヴァイヴ』ですとか……。わたくしのブルー・ティアーズの敵ではありませんわ！」

どうやらセシリアと対決する相手、フランスの候補生はシャルロ

ットという名前らしい。しかし……、

「第二世とか第三世代とか、……それってそんなに重要なのか？　入江のＩＳも『ラファール・リヴァイヴ』だったけど、別に弱くはなかったぞ？」

「そう感じたのはあなたが弱かったからではなくて？　初心者にしては上出来ですけど、代表候補生であるわたくしから見ればまだまだですわ」

――『だけど、今の織斑ちゃんじゃあ誰も守れねえよ』

――『少なくとも、ずぶの素人同然のオレに苦戦してるようじゃな！！』

一夏の脳裏を入江の言葉が過ぎる。あの時は勢いのままに反論し、最後は入江も自分のことを認めるような発言をしてくれたが、それでも自分が弱いことには変わりない。藤原が言っていた通り、代表候補生であるセシリアから見れば未熟なのだろう。

（でも、だったらこれから強くなればいい。……行動で示してやるさ）

そう、一夏は心の中で己に誓う。自分にとって大切な人を守れるようになるために。

「そもそも操縦者の技量が拮抗していれば、あとは機体の相性と性能がものをいいますもの。ま、そうでなくとも入試主席のこのわたくしが技量でも負けるはずがありませんわ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したのですから」

「それは……すごいな」

教官というのは山田先生のことだろうかと、一夏は入学試験での打鉄を使った試合を思い出す。

試験が始まるまではオドオドした子犬のような情けない雰囲気だ

ったのが、開始の合図が鳴らされてからその空気は一変した。目つきも鋭い冷静なものへと変わり、人が変わったように落ち着き払っていた。その試験で、一夏はほとんど反撃らしい反撃もできずにあっけなく敗北したのだ。

（そういえばうちのクラスの柴田と難波が、山田先生は元は日本の代表候補生だって言ってたな）

セシリアも代表候補生。副担任の山田先生も元代表候補生。藤原の例え（ＤＢ式戦闘力比較）を使うなら、一夏はラディッツ。二人はナッパということになる。そして千冬は伝説の超サイヤ人。

しかも、セシリアの話が本当ならば、その強さは≪　セシリア・オルコット　≧　山田麻耶　≫　ということだ。

「で、何でわざわざ俺にそんなことを言いに来たんだ？」

そこまで考えて、一夏は素直に自分の疑問をぶつけることにした。代表候補生というのがどれだけ凄いのか、藤原や他のクラスメイトの説明で具体的に理解したが、その候補生であるセシリアが態々自分を呼び出す理由は何か？

一夏にとっては当然の疑問だったのだが、セシリアにとってはそれは不愉快なものであったらしい。それまで自慢げに胸を張り、にやけていた顔が怒りで赤くなっている。別に一夏に惚れて……なんてことでは断じてない。

「こ、この……少しはＩＳについて理解して、わたくしのような選ばれた人間と話すことができる光栄に喜び、態度を改めるかと思ったら……！　泣いて謝罪すれば、この間の無礼も許してさしあげてもいいと考えていましたのに……！」

そのセシリアの言葉を聞いて、一夏は自分の思考がすっと冷めるのを感じた。

今の世の中、ＩＳのせいで女性は優遇されている。その優遇がいき過ぎた結果なのか、それとも男性が卑屈になりすぎた結果なのか、社会は男女平等から女尊男卑にまで傾いてしまっている。

かつての男尊女卑社会を批判し、女性の社会進出を掲げた女性運動家が男性を差別し、批判している現代。中には街中ですれ違っただけの男性をパシらせる女の姿も珍しいものではなくなった。無論、これは極端な一例で、世の女性が全てこういうわけではないのだが……。

「そりゃどうも。候補生が凄いことは分かったけどさ、だからってそんな態度をとらなきゃいけないわけじゃないだろ。それじゃあまるで奴隷だ」

「ふん、似たようなものですわ。男は女に劣っているのですから、それ相応の態度をとるのが当然でなくて！？　所詮は極東の島国に暮らす猿ですわね！　文化的な態度を求めたのが間違いでしたわ！　だいたいこの国は文化としても後進的な――」

カチンと、一夏の頭に血が上る。いくらなんでも言い過ぎだ。外国の人間に比べると日本人には愛国心がないとは言われるが、ここまでボロクソに言われて黙っていられるほど一夏は卑屈な人間ではない。

「イギリスだって端っこの方にある島国だろ。ＧＤＰも日本の半分、料理もマズいし、大して自慢になるものも知らないし」

「なっ……！？」

言い返されることなど考えてもいなかったのだろう。セシリアは驚きで目を見開いた後、わなわなと握った拳が震え出す。赤かった顔はさらに耳まで真っ赤に染まり、怒髪天を突くといった様子で一夏にくってかかる。

「わ、わっ、わたくしの祖国を侮辱しますの!?」
「先に馬鹿にしたのはそっちだろう?」
「く、くかっ……け、――――決ッ闘ですわッッッ!!」

怒りで舌がもつれているのか、ガクガクと震えながらも絞り出すように大声で宣言する。

「いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」
「なら、クラス対抗戦で決着を着けてさしあげますわ! ああ、もし私と戦うのが怖くてわざとクラス代表をやめたりしたら、その時はわたくしの奴隷にしますわよ!」
「そっちこそ、フランスの候補生に負けたりするなよ」
「誰にモノを言ってますの? このセシリア・オルコットに敗北の二文字などありえませんわ! そうですわね……もし仮に万が一、わたくしが負けるようなことがあれば、あなたのメイドにでも小間使いにでも椅子にでもなってあげますわ!」

そのようなこと、天地が引っくり返ってもありえませんけど。セシリアがそこまで言ってから、アリーナの会場全体がどっと沸いた。

『試合終了。勝者――早乙女大地』

鳴り響くのは、決着がついたことを告げるブザーの音だ。

「どうやらあちらも決着がついたようですわね」

アリーナ・ステージの方角を見ながら、セシリアは静かに呟く。

「では、次はわたくしの試合ですわ。――その目に焼きつけておき

なさい。わたくしの強さを」

一夏のことを指刺して捨て台詞を残すと、セシリアは優雅な動作でアリーナの中へと消えていった。

「あらららら……何だか凄ことになってるな～、一夏ぁ」
「自業自得だ。あんな約束をするとは、一夏の馬鹿者め」
「ねー。織斑くん、本当にセシリアと決闘するのー？」
「……なるほど、こうしてイベントが起きるとは……バタフライ効果って奴か……」
「ちゃっかりフラグは立ててるわけだ。このフラグ建築士は」
「うわ～、セシリアすっごい気合いだったね～」
「でも、オルコットさんのあの言い方は流石に言いすぎだよね。同じ女としてどうかと思うわ」
「そうそう、私たち日本人を見下してる感じがしてさぁー」
「いくら専用機持ちっていってもねえ……」
「これだからイギリス人は……。オリムラくん、ワタシはあなたを応援するわよ！　だいたいあの国は昔っから……」
「え？　何なに？　どういうこと？　オレにも分かり易く教えて欲しいな～」
「ああ、アンナちゃんはイタリア人ですから。イギリスをライバル視してるんですよ」

がやがやがや…！　セシリアが去って行ったとたん、そこいらの影からクラスの男子や見物に来ていた女子数人が姿を現す。男女合計で１２人ほどだろうか。その中には箒もいる。
それを見て一夏は驚きを隠せない。

「お、お前ら…！　なんでここにいるんだ？　試合を見てたんじゃないのか！？」
「いや～、試合よりも織斑ちゃんを見てたほうが面白いような気がしてね」
サングラスを光らせる入江が無駄に眩しい笑顔とサムズアップで一夏に説明する。
「でも、難易度が上がってるね。クラス対抗戦に出るには、まずクラス代表にならないと」
「それより早く試合を見ようぜ。セシリアのＩＳも見れるし、代表候補生同士の戦いなんて中々見られるもんじゃない」
「え、あ、うっうわっ！？」
小野田と藤原の二人が背後から一夏の両脇をがっちり固めると、アリーナ・ステージが見える観客席に向かって移動を開始する。
それを取り囲むように、男女の集団がぞろぞろとついて行く光景は異様なものだった。
「でも、どうして2組の試合なのかしら？　さっき試合が終わったのだから、織斑くんと早乙女くんの試合が先じゃないの？」
「馬鹿ね、試合で損傷した機体の修復とかエネルギーの回復とか、色々とあるでしょ？　だから念のために明日に回すことになってるのよ」
「へー」
観客席に着いてしばらくすると、生徒の数はどんどん増えていく。
単に授業や用事が終わったから見に来た、というわけではないようだ。

「なんか、人の数が増えてきてないか……？」
「確かに男のＩＳ操縦者は珍しいけど、結局はそれだけ。後で録画した映像でも見れるし。……本命は２組の代表候補生同士の戦いってことだね」
「……俺達の試合は単に物珍しさで来てただけ。本当の主役はこっちってことか」

観客席に座らされた一夏は、小野田の説明に改めて自分の立ち位置を自覚させられる。やはり自分と同じ境遇である男が３０人もいるというのは心強い。もし自分一人だけであったなら、己を客観的に見ることもできず、学園生活も針のむしろ状態だっただろう。
（千冬姉を守れるくらいになるには、まだまだ遠いってことか）
その時、わっと会場全体の空気が変わったのを一夏は肌で感じた。

「お、シャルロットが出てきたぞ！」

クラスメイトの森谷の楽しそうな声。Ｂピットのゲートが開き、そこからオレンジ色のカラーリングのＩＳが飛び出してくる。

「あれは『ラファール・リヴァイヴ』なんだよな……？」
「『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。フランスの代表候補生であるシャルロットちゃんの専用機さ。基本装備（プリセット）をいくつか外して、その上で拡張領域（バススロット）を二倍にしてな、二十以上の装備を量子変換（インストール）した機体だ。格闘・射撃・防御の全てに対応できる汎用型ってわけさ」
「に、二十！？　そ、そりゃすごいな……俺の白式に一つぐらい装備を分けて欲しいぐらいだ」

入江の説明に一夏が驚きの声を漏らす。ＩＳの兵装というのは一

つだけでも洒落にならない威力を誇る。それが二十もあるというのは、ちょっとした火薬庫だと言っていい。
　別の兵器で例えるなら、重戦車の火力数十台分。いや、下手をすれば百台分にも匹敵する。

「言っとくが、射撃戦闘ってのはブレードみたいに扱いが簡単じゃねーぞ？　反動制御、弾道予測に間合いの測り方、武器特性の理解。オレだってまだ駄目駄目なんだからな～？」
「う〝……。そ、それにしても、入江はよくそんなことを知ってるな？」

　一夏は無理矢理にでも話を逸らすことにした。まずは白式を使いこなせるように頑張ろう。

「へっへへへ、オレはデュノア社と契約を結んで専用機を貰ってるからな。あっちでデータ取りしてる時に、シャルロットちゃんに少しだけ指導してもらったことがあるんだよ」
「デュノア社、――シャルロット・デュノア。……ねえねえ入江くん、シャルロットさんてデュノア社と関係があるの？」
「あ、それは私も気になってたの。何か知ってる？」
「ん？　ああ、……オレもよくは知らないんだ。悪ィな」

　その女子たちの質問に、入江の表情がわずかに歪んだように――そして近くに座っている森谷が反応したように一夏には感じられたが、その疑問はセシリアがＡピットから出てきたことで霧散する。

「あれが――、」
「セシリア・オルコットの専用機。イギリスのティアーズタイプね。悔しいけど、欧州連合（ドイツ・イギリス・イタリア）の中では実用化で一番リードしている機体だわ」

一夏が漏らした言葉に、イタリアからの留学生らしい女の子が続けて言う。

鮮やかな青色の機体。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手にあるのは2メートルを超す長大な銃器《スターライトｍｋ?》。その分類は特殊レーザーライフルだ。元々宇宙空間での活動を目的として作られたＩＳには、自身の背丈より大きな武器を装備している機体も珍しくない。

両者は５０メートルほどの距離をとって対峙する。ＩＳにとって、それはあってないような短い距離だ。

試合開始まではあと五秒を切っている。四、三、二、一――、

『――試合開始――！』

◇

「ちょろい相手ですわ！」

「負けないよ！」

試合開始と同時にセシリアはスターライトｍｋ?での先制攻撃を放つが、シャルロットはこれをあっさりと回避する。続けて放たれる弾雨のごとき攻撃も的確に避け、避けきれないものは左腕のシールドで防御する。その迷いのない動作、恐らくレーザーライフルの弾道はシャルロットに筒抜けなのだろう。国家代表ともなれば、判断速度は銃弾のそれすら凌駕するという。彼女たちは単なる候補生とはいえ、その腕前は普通のＩＳ操縦者よりも格段に上だ。

「な、なんであの攻撃がよけられるんだ！？」
「相手の攻撃の瞬間を読んで回避してるんだろうなぁ。ＩＳは敵のロックオンやエネルギー充填に合わせて警告してくれるから。ギリギリまで照準を引きつけて、トリガーを引くタイミングに合わせて回避してんだろ」
「一夏みたいに、機体性能任せの加速で振り切ってるわけじゃないってこと」

観客席にいる一夏の反応といえば、試合のレベルの高さにただただ驚愕するだけだ。
初撃による先制を外したセシリアであったが、それでも冷静さを失わずにレーザーライフルを撃ち続ける。射撃。射撃射撃射撃。この距離ならば有利なのはセシリアだ。ラファール・リヴァイヴがあらゆる戦況・間合いに対応できる傑作機であるとはいえ、中距離戦での撃ち合いならば負けることはないという確信がセシリアにはあった。
だがシャルロットもそう易々とやられはしない。リヴァイヴの手に光の粒子が集まると一瞬でアサルトカノンが現れ、爆破弾の射撃をお返しとばかりに浴びせかける。それらはブルー・ティアーズの各部に容赦なく撃ち込まれ、バリアーを貫いて機体表面の装甲を吹き飛ばす。次いで、肉体に激痛が走る。
――バリアー貫通。実体ダメージ、レベル低。

「くうっ！？」

左へ右へ、瞬間的な加速を織り交ぜて回避するセシリアだが、シャルロットの追撃は止まらない。光の糸が虚空で寄り集まり、２丁のアサルトライフルを携えて一気にたたみかける。
一瞬の攻防。激しい銃撃戦が行われる。シャルロットのアサルト

ライフルはいつの間にかショットガンになり、携行型グレネードになり、近接ブレードになり、またアサルトライフルへと戻る。高等技能『高速切替（ラピッド・スイッチ）』である。事前に武装を呼び出すことを必要としない、戦闘と平行してリアルタイムで的確な武装を呼び出し、その全てを使いこなす。使い手の器用さと集中力もさることながら、戦況を読み判断する力と技量がなくては不可能な戦法だ。

そしてセシリアも負けてはいない、彼女の機体は射撃戦に特化した第三世代機。セシリア自身も射撃を得意とする。ここは彼女の間合いなのだ。シールドエネルギーを削られながらも、きっちりと反撃を行っている。事実、セシリアの攻撃はシャルロットのシールドエネルギーを確実に減らしていた。だがしかし、

「チャージがわかりやすい。それに、そんなに大きなライフルなら狙いもバレバレだよ」

「なっ……！　『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』ですって！？」

「そういえば見せるのは初めてだったね！」

シャルロットが『瞬間加速』で一気に距離を詰めてくる。安全圏だと過信していた間合い、それが一気に詰められたのだ。

瞬間加速。それは後部スラスターからエネルギーを放出し、それを内部に一度取り込むことで圧縮して放出。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する技能である。

セシリアの間合いとシャルロットの間合い。両者にとって最善となる攻撃位置は異なる。それは一度接近戦に持ち込むことが出来たならば、シャルロットが圧倒的優位に立つことを意味している。

「まだですわ！　お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

ヴンッ――。

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が突如として外れ、動く。

ここにきて、セシリアは己の切り札の一つを切った。

「あれは、ＢＴ兵器ッ！」

「知ってるのアンナちゃん！？」

「イメージ・インターフェイスによって動かす自立機動兵器よ。イギリスのティアーズタイプの最も特徴的な装備。あの機体を第三世代機たらしめている兵装……」

「解説乙」

観客席の女子たちが勝手に解説をしてくれているが、一夏の耳にはほとんど入っていない。

彼の目には、瞬間加速をキャンセルすることで2基のミサイルを辛うじて回避して撃ち落としたシャルロットが、今度はフィン状の四機のビットを相手に戦っている姿が映っている。

「これが、代表候補生の力なのか……」

一夏がつぶやいた言葉は、誰にも聞かれることなく虚空に溶けていく。その拳は、白くなるほどに固く握られていた。

セシリアがブルー・ティアーズを展開したことによって劣勢に立たされたかのように見えたシャルロットだったが、彼女はＢＴ兵器の特徴と弱点を見抜いていた。すなわち、ブルー・ティアーズはセシリアが命令を送らなければ動かすことができず、セシリア本人は制御のために他の一切の攻撃・回避行動をとることができないという欠点。

これは致命的な弱点であるが、何もセシリアに問題があるわけではない。最大六機のビットを操りながら自分自身も戦えというのは、

六個のラジコンを別個に動かしながら車の運転をしろと言っているようなもの。むしろ彼女以上にＢＴ兵器を扱える候補生は現段階では発見されていないのだ。

「だったら……！」

確信する。攻撃こそが一番の防御だ。こちらのシールドが０になる前に、セシリア本人を狙ってシールドエネルギーを削りきってしまえばいい。シャルロットの頭脳は、冷静かつ素早く答えを出していた。

ＢＴの制御で動けないセシリアを狙うのは、シャルロットの両腕に新たに出現した重機関銃だ。ビットの攻撃を避け、反動によって暴れ馬のように荒れ狂う重機関銃を抑えつけながら、正確にセシリアを狙い撃つ。フルオートによる制圧射撃がセシリアの機体に襲い掛かった。

「こ、こんな攻撃でっ……！」

銃弾の嵐が機体を蹂躙する。ビットの制御によって棒立ち状態になっていたセシリアには反撃も防御も回避も許されない。為す術もなく七面鳥撃ちにされていく。

（は、早くブルー・ティアーズを呼び戻さなくては……ッ）

思考がまとまらない。ビットが上手く制御できない。ハイパーセンサーが発し続ける鳴りやまない警告音にセシリアは冷静さを失っていく。

「――逃がさないよ」

間近で聞こえた声にハッとした。再びの瞬間加速によって眼前にまで迫っていたシャルロットが“それ”を突き出して来ていた。コ

ンマ零秒の刹那の間にそれが何なのか理解した瞬間、セシリアの顔は青ざめる。

「『盾殺し（シールド・ピアス）』っ――――――がはっ！？　ぐえぅぅツッ！？？」

単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた装備。リヴァイヴの左腕に一体化されていた盾装甲はすでに弾け飛び、中に隠されたリボルバーと杭が融合した凶悪な装備・パイルバンカーが露出していた。もはや避けることなど出来るはずもなく、その一撃がセシリアの腹部に叩きこまれる。そしてそれは一度で終わりではない。二発目！　三発目ッ！　続けざまにセシリアの腹部に衝撃が抜ける。パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレースケール）》はリボルバー機構による高速での連撃を可能としているのだ。その合計三回の総攻撃力は零落白夜での一撃にも匹敵する。

「……そん、な……わたくしが……負けるはず、……が……は……」

撃ち込まれた三発目の攻撃が終わった瞬間、セシリアのＩＳは絶対防御を発動させ強制解除された。そしてセシリア自身も、相殺しきれなかった衝撃で意識を失いアリーナの地面に真っ逆さまに落下していく。

「おっと！　……ちょっと、やりすぎちゃったかな」

落下するセシリアを優しく抱きとめて、シャルロットはわずかな罪悪感に心を痛ませる。だが、あそこまでやらなければ負けていたのは自分だった。一瞬たりとも気を抜くことなどできない戦いだったのだ。さすが、入学試験で教官を倒し、入試主席であったというのは伊達ではない。

『試合終了。勝者――シャルロット・デュノア』

勝敗を告げる放送を聞くと、セシリアを俗に言う“お姫様だっこ”の状態で抱きかかえたまま、シャルロットはピットへと戻っていった。

◇

「しかしこれ、セシリア負けちゃったけどどうすんだ？」

「さあ……？」

藤原の質問に、僕は答えることができなかった。ふと、一夏を見る。

「……」

一夏も、やはりなんとも形容しがたい表情で、シャルロットに運ばれていくセシリアをじっと見ていた。

しかしそれは相手に対して向けたものではなく、自分自身の何かに対して深く思案しているかのように、僕には感じられるのだった。

◇

「やっぱり俺は……まだ弱いんだな……」
「――む？　どうした一夏？　今、何か言ったか？」
「いや、なんでもないよ箒。それよりもさ、また放課後の特訓、付き合ってくれよ。
それと、今度こそちゃんとＩＳについて教えてくれるよな？」

6話　セシリア・オルコットVSシャルロット・デュノア（後書き）

シャル「セシリアのかませ犬になると思った？　残念、ボクだよ！」

7話『跪いて、俺の靴にキスをしろ』

パラパラパラ……。

電灯の消された薄暗い部屋の中、雨が窓を叩く音だけが闇に沈んだ空間を満たしている。

「う、うぅ……」

「……」

稲妻が落ち、暗い部屋を一瞬だけ照らす。そこには二つの人影があった。

輝く金砂のように美しい長髪。透き通るようなうっすらとした白い肌。ブルーの瞳は、常ならば宝石のような煌きを見せてくれる。

少女の名を、セシリア・オルコットという。

「……う……ぁ……」

セシリアのことを知る者ならば、彼女のことを何と表現するだろう。

プライドが高く自信家。それに見合うだけの実力を持ち、努力を欠かさない誇り高い女傑。きっと、こんなところだろう。

だが、はたして今の彼女を見ても同じ評価を下せるだろうか？

何の光も宿していない瞳。プライドの欠片も残っていないかのような、ただただ相手の顔色を窺う情けない表情。泣き腫らしたであろう顔は酷いものだ。

……その首には、鎖が。

鎖の先はもう一つの人影の手に飼い犬のように握られていた。それは決して、セシリアが逃げ出さないようにするための拘束ではない。

彼女の尊厳を傷つけ、屈服させるための道具だった。

「きゃっ……！？」

ガクンと、セシリアの身体が床に倒れる。その首輪に繋がれた鎖が急に引き寄せられ、体制を崩したところで脚を蹴り飛ばされたからだ。

冷たい床に転がったまま、セシリアは自分を見下ろすその“男”を見上げる。

――織斑一夏。

その顔に浮かんでいるのは哀れみでも、怒りでも、蔑みでもない。

愉悦。

一夏の眼は、心の底からの暗い喜びで満ち満ちている。

見上げるセシリアは、苦々しく唇を噛む程度の抵抗すら見せない。それだけの気力は、もう残っていない。そのはずなのに、胸の奥底に凍りつかせたはずの心がズキリと痛むのを感じた。

「……跪け」

自らの靴を眼前に差し出しながら、一夏は一層意地の悪い顔で言う。

「……ぅ……」

セシリアの顔が絶望を孕むのを見届けて、一夏はさらに続ける。

◆

「――――『跪いて、俺の靴にキスをしろ』」
「アホかぁぁぁぁぁぁッ！！！」

ズガンッ！
助走を付けて放たれた一夏のドロップキックが新垣の顔面に炸裂する。
哀れ、新垣は赤松作品に登場するヒロインにぶっとばされた主人公のごとく、きりもみ回転をしながらぶっ飛んでいく。

「ぐげぎゃがががが……！」
「おっと！？」

そのまま壁に激突するかに見えた新垣であったが、教室の扉を開

けて入ってきた早乙女の分厚い胸板にキャッチされた。驚きながらもしっかりと受け止めることができる辺り、その筋肉が飾りではないことを証明している。

しかし残念、ぶっ飛ばされるのが一夏であれば山田先生が入ってきてラッキー☆スケベなイベントが発生したのだろうに。

「ま、前が見えぬェ」

「自業自得だ……はぁ……はぁ……」

もはや前が見えないなんてレベルではない。顔面陥没、作画崩壊、そのへこみ具合は顔芸の域に達している。南無。

そんな新垣を、血管を浮き上がらせて怒り心頭といった様子で見る一夏。

「どういう状況だコレ？」

早乙女が思わずそう呟いてしまったのも無理はない。

「……ん。アレだよ」

ちょいちょい、と早乙女の肩を突きながら、橋本が机の上に置かれた画用紙を指差す。

それに描かれているのはセシリア・オルコットと織斑一夏だった。だが決して、平時の二人を描いたものではない。

一枚目。メイド服を着たセシリアが一夏に付き従っているような絵が描かれている。

二枚目。一枚目よりもちょっとみすぼらしい姿になり、両目のハイライトが消えたセシリアが一夏に従っている絵が描かれている。

三枚目。首輪と鎖で繋がれたセシリアを一夏が跪かせている絵が

描かれている。

「……いや。どういう状況だコレ」

さっきとはまた違った意味で、早乙女が疑問を口にする。

それに答える、藤原、入江、小野田の三人。

「おお、なんか一夏とセシリアがクラス対抗戦で決闘する約束をしちまってな。……ほらアレだ、原作っぽいカンジで」最後は小声で、早乙女だけに聞こえるように藤原が言う。

「織斑ちゃんが負けたら奴隷にするとか。逆に万が一自分が負けたらメイドにでも小間使いにでもなってやるって言いきっちゃってね」

「でもセシリアはシャルロットに負けちゃった、と」

そして放課後、一夏がそのことについて「どうすればいいと思う？」とクラスメイトたちに相談したのだが、徐々に内容が明後日の方向に歪みだしたのだ。

最後は金田一の「もうセシリアをメイドにしちゃえばいいんじゃね」という発言を皮切りに、どんどん妙なシュミレートが進んでいったのだ。

「うぐぐぐぐ……。なんだよ人が厚意で相談に乗ってやってるのによー！」

「嘘を言ってんじゃねえこのバカ。完全に楽しんでただろ？　どう見ても悪ふざけの産物でしかないだろうが！」

ギャグ漫画補正でも入っているのか、もう完全に復活した新垣と一夏は取っ組み合いを始めてしまった。

両者ともに向かい合い、互いに手のひらを合わせて固く握り締める。プロレスで見るような力比べの体勢だ。

「あ〝ぁ〝！？　俺のシュミレートした《鬼畜王ワンサマー》に文句があるのか！」
「誰だソレ！？　もはやただの別人だろうがっ！　というか人を使って変な妄想はやめろ！」
一進一退の攻防。片方が押されれば、さらに力を込めて押し返す。互角の綱引き勝負のように拮抗している。
そんな二人を眺めながら、クラスの大半はにやにやと笑っている。観客気分である。
（コイツら、全員バカだ……）
早乙女はそう判断した。
「おい、里中はいないのか？　いつもなら途中でアイツのツッコミが入るだろう？」
「悟史の奴なら、野々宮や葉川たちと一緒に職員室に行ったはずだぜ？　ほら、男子トイレの増設について俺たち皆の要望ってことで申請するはずだったろ」
そういえばそんな事を頼んでいたなと、柊和晃の言葉を聞きながら早乙女は納得した。
ＩＳ学園には男子トイレが三カ所しか存在しない。授業の合間にトイレに行こうと思ったならば、授業終了の合図と同時に中距離走開始である。もちろん帰りも全力疾走しなければ次の授業に間に合わない。教室に帰るまでが休み時間です。おかげで、授業が終われば男子の群れがさながらバッファローの大移動のように進撃する光景が見られるのだ。無論、我慢できなければ授業中に行くのも仕方ないが、（学生諸君には理解してもらえると思うが）授業中にトイレに抜け出すというのは中々に勇気がいるものなのだ。
よって、せめて仮設トイレでもいいから設置して欲しいという１

組男子たちの嘆願をまとめ、提出することにしたのだ。

……それにしても、ツッコミ不在だとボケの収拾がつかないというのは本当らしい。

「――フゥハハハハハハー！　あんますぺしゃるだっ！！」

「ぬぅを〝を〟を〝を〟を〝！？　ぎ、ギブギブ……！」

早乙女の視界の端には、新垣ＶＳ織斑のプロレス戦が繰り広げられていた。すでに勝負も終盤に近い。

一夏にコブラツイストをかけられていた新垣が技から抜け出す。今は逆に、一夏の両足を掴んだ新垣が男の急所に電気あんまを食らわせていた。

……おい、だれかこの二人を止めろよ。

「やかましいぞ馬鹿どもが！　放課後に何を騒いでいる！」

（（（（（きたあああああああ！！））））））

教室の扉がガラリと明け放たれ、そこから鬼（オーガ）が入って来る。

さあ、地獄を楽しみな。

バシーンッ！　バシーンッ！

出席簿アタックの前に、両名共に撃沈した。

◇

「ま、オルコットとのことについては、明日の試合に勝ってから考えな。それとも、ワンサマーはもう俺に勝ったつもりかコノヤロウ」
「……自惚れるつもりはない。けど、『負けてもいい』なんて気持ちで戦うつもりもねえよ。てか、ワンサマいうな」
一夏のその言葉に、早乙女は獰猛な笑みを浮かべた。元々長身で筋骨隆々の逞しい体躯の早乙女には妙な迫力というか、威圧感があるのだが、それがさらに大きくなったように感じる。
「そいつぁいい。勝ちは譲られるものじゃなくて、相手から奪い取るもんだ。負けてもいいや、なんて考えてる相手に勝っても意味がないからな」
「同感だ。真剣勝負で手を抜くような腐った奴にはなりたくない」
早乙女は満足そうに、にかっと笑うと「明日の試合、楽しみにしてるぜ」と言い残して教室から出て行った。
それを見て、クラスの男子たちも潮時だと思ったのかぞろぞろと寮へと帰っていく。あとは自主勉強にあてるのだろう。
教室に残ったのは、織斑一夏、藤原恵一、比良坂崇、そして僕。小野田幸人だ。
「で？」
「で？　って、何がだよ？」
藤原の言葉に、一夏は不思議そうに返してくる。
「だから、明日の試合だよ。勝機はあんのかって聞いてんの！」
「そんなもの、明日になってみないとわからないだろ」

「おいおい……」

そんなので大丈夫なのだろうか？　早乙女は僕たちと同じトリッパーだ。それがアニメ版にせよ原作にせよ、一夏と白式の情報は持っていることになる。

対して、僕たちはセシリアと一夏の口論を除き見ていたために、野々宮と早乙女の試合を見ていない。対策を立てようもないのだ。

「……早乙女君の機体の情報なら、ボクは知ってるよ」

「うぇい！？」

「本当なのか！」

いつもの抑揚のない声でボソリと喋る比良坂に反応する。

そうだ、比良坂は試合を見ていたんだっけか……？

比良坂は懐から携帯型情報端末を取り出すと、そのコードを教卓の上にあるコネクタに繋げる。彼が両手で素早くキーボードを叩くと、表示されるのは空中投影ディスプレイ。

それらの情報は一瞬でめまぐるしく変化し、やがて一つの動画を映し出した。

「織斑君の機体が、あの『暮桜』と同じ一撃必殺の力を持った近接戦用の高機動型ＩＳだとすれば、早乙女くんの機体は真逆。防御特化の砲撃戦用ＩＳだよ。その特徴は――」

◇

カタカタカタ……。カタカタカタカタ……。

静寂で満ちた部屋の中、キーボードを打ちこむ音だけが鼓膜を打つ。

ここはＩＳ学園１年の学生寮の中でも特殊な場所――『男子寮』だ。

ただし男子寮と言っても、女子が暮らしている寮と別の建物になって隔離されているわけでなければ、物理的に何かで仕切られているわけでもない。織斑一夏などは、部屋が余っていないという理由と特殊な事情から一時的に篠ノ之箒と同室になっているくらいだ。

カタカタカタ……。

この部屋は、寮の普通の二人部屋に比べると狭い。なぜなら一人部屋であるからだ。

国際色豊かなＩＳ学園。生徒の中には、宗教上の理由や文化の面から一人部屋でなければならない生徒も存在する。こういった個室は、本来そのために作られたものである。

「ふう……報告書とか、オレ苦手なんだよね～。オレはサラリーマンじゃないっつーの」

サングラスをはずし、両目を瞑ったまま目蓋を揉みほぐす。入江優助は、今回のクラス代表決定戦で使用したリヴァイヴのデータ送信とその報告書を作成していたところだった。

「だったら、僕が変わりに作ってあげようか？」

自分以外には誰もいないと思っていた部屋に、一人の女性の声が響いた。入江はサングラスを掛け直し、部屋の入り口に顔を向ける。

話しかけてきたのは、濃い金髪に気品のようなものを感じさせる雰囲気の女。中世的に整った顔立ちに人懐っこそうな笑みを浮かべ、

しかしその振る舞いはどこか洗練されたものを感じさせる。

「シャルロットちゃんか――どうした、オレの部屋まで来るなんて？　変な噂が立っても知らねえぞ」

「あはは……困ってるんじゃないかと思ったからさ」

飄々とした態度で軽口を叩く入江に、シャルロットはしれっとした顔で近付くとパソコンの画面を覗き込む。

「お生憎様。さっき終わったところですわ。このオレ様を舐めんなよ～？　大抵のことは何だってできるさ」

「へー。さっき報告書は苦手だって言ってるのが聞こえたけど？」

「……」

入江はわざとらしく口笛を吹きながら顔を逸らした。その姿を眺めて、シャルロットはどこか楽しそうな表情で言う。

「クラス代表、なれなくて残念だったね」

「最初（ハナ）っからなる気はありませんから！　ああいうリーダーみたいな仕事は、野々宮みたいな奴が適任なのよ。……オレもアイツも負けちまったけどな。

そっちこそどうよ？　イギリスの第三世代機、それも入試主席の優等生に余裕の勝利だなんてスゴクね？　ハンパなくね？」

おどけたような大仰な仕草で肩をすくめた後、今度はズビシっとシャルロットを指差して試合での活躍を褒め称える。

「まさか。……余裕なんかじゃなかったよ。シールドエネルギーも0になる直前だったし、接近戦に持ち込めたから勝てただけで……」

「へぇ……」

淡々とした口調で語るシャルロットの話を聞きながら、入江は流し台に置いてあるおしぼりを水に濡らして絞ると電子レンジで少しだけ温める。

――シャルロットは謙遜したように大したことじゃないと否定するが、あの試合はレベルの高いものだった。それに、接近戦に持ちこまれたら敗北することぐらいセシリアにだって自覚はあっただろう。あの４機のビットの攻撃を掻い潜り、瞬間加速も織り交ぜながらパイルバンカーの一撃……というか三連撃か、を打ち込めたのは純粋にシャルロットの技量がセシリアよりも上だったからだ。

温めたおしぼりを取り出すと、もう一度椅子に深く腰掛けた。そのまま上を向き、眼を瞑ったままサングラスを外すとおしぼりで目を覆う。

「いやー、織斑ちゃんがセシリア・オルコットと決闘する約束しててさー。あんだけ戦う前に色々言ってたのにセシリア負けちゃったから。……そういえば、そのセシリアはどんなカンジだった？　代表候補生同士やっぱり、」

入江の話を聞いているのかいないのか、シャルロットは一度部屋の入り口に戻ると電気のスイッチを切った。部屋が真っ暗になるが、それでもパソコンの画面が発する光と、机に立てられたスタンドが放つ特殊な灯りがうっすらと部屋を照らし出す。

「……」

シャルロットはゆっくりと入江に近付くと、その顔に――ではなく、顔に乗っているおしぼりを剥ぎ取った。

薄暗い部屋の中、シャルロットは入江の瞳を覗き込む。

「眼、もう大丈夫なの……？」
「……ナノマシンを移植してから、視力は完全に戻ったさ。まぁ、眼の色は戻らないみたいだけどな」

入江の瞳は、わずかに白く濁った色をしていた。
元々、幼い頃にとある事故で視力を大幅に落としてから、彼の目は強烈な光に弱くなった。それ以降、彼は度入りの色眼鏡（サングラス）をかけて生活していた。
だが、彼の居た世界がある日突然ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞の存在する世界になったことで状況は一変する。
ＩＳの登場は、ＩＳ以外の技術――医療分野でも革命を起こしていたのだ。
その一つが医療用ナノマシンの存在だ。原作でラウラ・ボーデヴィッヒや『黒ウサギ隊』が行っていたＩＳ用補佐ナノマシンではない。純粋な視力回復のための眼球への医療用ナノマシン移植。
だが、その移植手術には少なくない手術費用がかかる。
入江優助がデュノア社と契約した理由は、単に専用機を得るためだけではない。ナノマシン移植のための手術費を得る事。クラスのトリッパーたちには話していない、もう一つの理由がそれだった。

「ま、もう光も大丈夫だからサングラスをしなくてもいいんだけどな。けどなんつーの、もうグラサンはオレのトレードマークというか、魂の一部みたいになってるからさぁ」
「そ、そうなんだ……」

わずかに引いた様子を見せながら、シャルロットはパチリと電気のスイッチを入れる。

「それじゃあ大丈夫みたいだし、僕はもう部屋に戻るからね」
「おう。あ、頼みがあるんだけどさ」

「なにかな？　僕でよければ力になるよ」

サングラスを掛け直した入江は、シャルロットに向き直る。

「そっちもクラス代表の仕事とか大変かもしれねーけど、よかったら、また訓練に付き合ってくれねえか？　今度は“一夏”に勝ちたいんだ」

揺ぎ無い決意。サングラス越しのその瞳には、きっとギラギラとした闘志が燃えている。シャルロットはそう感じた。

入江優助。軽薄そうに見えるが、実は意外と負けず嫌いな性格の男であった。

8話　織斑一夏ＶＳ早乙女大地（前書き）

クラス対抗戦って結局いつなんだ。
原作だと入学式初日の授業で「再来週に行われるクラス対抗戦」という千冬の台詞があるが、１週間後のセシリア戦のあとにクラス代表記念パーティがあって、ＩＳ実習があって、鈴が転校してきて、鈴と喧嘩して、そして5月にクラス対抗戦。
おいおい。

8話　織斑一夏ＶＳ早乙女大地

『まもなく試合を開始します。両者、規定の位置に移動してください』

クラス代表決定戦。
最終試合　織斑一夏ＶＳ早乙女大地

翌日、第三アリーナで行われているのは、１組のクラス代表を決める最終試合だ。
アリーナ客席では男子が全員観戦している他、学年問わずに女子も見物に来ている。この僕、小野田幸人も観客の一人である。
流石に昨日のセシリアＶＳシャルロット戦ほどではないが、ＩＳ学園の生徒数を考えるとそれなりの人数が見ていることになる。

「おい、あれセシリアじゃないか？」

葉川の指差す先には、客席通路に立つセシリア・オルコットの姿があった。

「ホントだ……。やっぱり試合が気になって来たんだね」

ここからでは表情を窺い知ることはできないが、彼女が何を見ているかは分かっている。
アリーナ・ステージ上空に浮かびながら試合開始のときを静かに待つ２機のＩＳ。その色は『白』と『紫』。
眩しい程の純白の鎧。背後に浮かぶ非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の大型スラス

ターと、その手に持った近接ブレード《雪片弐型》が特徴的なＩＳ『白式』。
そして白式に対峙するのは、各部を重厚な装甲で覆われた紫色の巨大なＩＳ。

「いやはやなんとも。……昨日も思ったけど、でかい機体だよな」
「最初見たときは全身装甲（フル・スキン）かと思ったよ」

柴田と難波がそう言ってしまうのも無理はない。
早乙女の機体『シュラウド』は、あちこちを重厚な装甲で覆われた肥満機体だった。無論、顔を始めとして操縦者の肌が露出している部分もあるのだが、機体周辺に浮遊するユニットが生身の肉体を隠している。
特に装甲が厚い部位は胴体部分と足回り。白式に比べると二回りほど大きい外見のせいか、鈍重そうな印象を見る者に与えてしまうだろう。

（防御特化型の砲撃戦用ＩＳ。……昨日、比良坂が言ってた通りだ）
入江はあの機体を指してガチタンと呼んでいたし、藤原なんかは高町なのはと表現していた。いや、後者はどうかと思うが。せめてロボで例えてやれよ……。

それ以外に特徴的なのは、両肩背部の非固定浮遊部位に付けられた二門の速射荷電粒子砲だろうか？　機体に固定されていない武装であるため、あの鈴の《龍砲》のように射角に制限なく発射できるらしい。

『試合、――開始』

開始の合図を告げるブザーの音がアリーナ・ステージに鳴り響く。

それが切れる瞬間、一夏の白式はスラスターを全開にして斬りかかっていた。

ガギィンッ！

白式のブレードはしかし、早乙女が機体前面に展開したエネルギーシールドによって阻まれる。シュラウドの周囲に浮遊するユニットがカーテンのようなシールドを発生させているのだ。スラスターの加速を乗せた重い斬撃をあっさりと受け止めて、両者は力比べのように拮抗する。

しかし、ブレード1本しか武装を持たない白式と違い、早乙女のシュラウドには両肩に浮かぶ二門の速射荷電粒子砲がある。その二門はチャージを完了するとエネルギーシールドを解除し、解除と同時に超至近距離からの同時発射をおみまいする。

それを一夏は――、

「お、おおお！？」

「荷電粒子砲を……斬った？」

驚愕の声が客席から漏れる。正確には零落白夜を発動した雪片弐型を盾にして防いだだけなのだが、素人である男子たちには判別できない。

一夏は一旦後方に下がって距離を取るとスラスターを全開。白式の機動力を最大限に発揮して追撃の荷電粒子砲を振り切っていく。

「機動性なら白式の方が圧倒的に上だ。これなら……」

「だが、逃げ回るだけでは勝てないのも事実だ。現に私も機動性で圧倒することはできたが、あの防御を突破することができずに負けた」

振り向く。淡々とした口調で話に入って来たのは野々宮だった。いつもの雰囲気そのままに、だが顔にわずかに不機嫌の色を覗かせて腕を組みながら試合を眺めている。

野々宮の言葉に、藤原が反論する。

「だけど、一夏には零落白夜がある。強力なエネルギーシールドだろうが堅牢な装甲だろうが意味ないはずだろ」

「……当たれば、の話だがな」

野々宮は顔をしかめ、上空を飛び回りながら連射される砲撃を避ける一夏を見上げる。

砲身や射線が見える分だけ避けやすいのか、それともハイパーセンサーが伝えるチャージの警告のおかげなのか、一夏はまだ決定的な被弾はしていない。だが、避けるのに精一杯で攻めあぐねているのも事実だった。

◇

「くっ……！　これだけ撃っても、まだエネルギーが尽きないのか！？」

こっちは燃費の悪さに頭を抱えているというのに、羨ましい限りだ。

早乙女の機体、――ハイパーセンサーがＩＳネーム『シュラウド』だと教えてくれる――はその見た目通りに機動性の低い機体だった。だが、その巨体に見合うだけのエネルギー容量を持っているようだ。

さっきから両肩の浮遊部位から連射されている荷電粒子砲を避け続けているのだが、一向に攻撃が途切れる気配がない。それどころ

か、今度は新たな武装を取り出し始めているようだった。
地上に降りた早乙女の目の前で光の粒子が寄り集まる。量子変換（インストール）された武器が展開され、携行火器としては破格の大きさを持つ大口径荷電粒子砲が姿を現す。それを両手で抱えるように持ちながら、こちらに狙いを定めてくる。
――警告！　新たな武装の展開を確認！　チャージを確認！　ロックされています！

「あぶねっ！」

ほとんど反射で我武者羅に動かした機体の横、さっきまでいた空間が特大の荷電粒子砲の砲撃で塗り潰される。間一髪だが――、

「逃がさねえぜッ！！」

ＰＩＣ制御を最大に。早乙女は荷電粒子砲を撃ち続けたまま、強引に機体ごと砲身を動かして白式に当ててきたのだ。避けきれなかった左上半身が光の濁流に飲み込まれる。

「うわぁあああっ！！」

左肩の装甲。それに背部ウイングスラスターが半分持っていかれる。爆発によって各部のアーマーが変形し、絶対防御でも相殺しきれなかった衝撃が身体を貫く。
――バリアー貫通、ダメージ３８０。シールドエネルギー残量、１５２。実体ダメージ、損傷大。

（く、直撃するのを避けてコレかよっ！）

もしも直撃していたら、シールドエネルギーは一瞬で０になって

いただろう。
　ここまで不利な展開になったのは俺の判断ミスだ。試合開始直後に放った最初の一撃、あそこでエネルギー節約のため零落白夜を出し渋ったばかりにエネルギーシールドによって攻撃を防がれ、絶好のチャンスを逃してしまった。対入江戦での反省を踏まえたつもりであったが、それが裏目に出る結果となった。
　もしも最初から零落白夜を発動していたならば、エネルギーシールドなどお構いなしに斬り裂き、バリアーを無効化し、装甲を破壊して絶対防御を発動させていた。シールドエネルギーを大幅に削ることができていただろう。

（せっかく比良坂が情報を教えてくれたってのに……！）

　防御特化の砲撃戦型ＩＳ。これが相手ならば速度で翻弄しつつ接近戦に持ち込み、零落白夜の全力の一撃を叩きこむのがベストだったはずだ。
　だが、不幸中の幸いとも言うべきか、早乙女の荷電粒子砲もエネルギーの限界であったらしい。最大出力での砲撃を無理矢理に行ったせいか、両手で抱えた大口径荷電粒子砲の砲口は焼け付き、その姿を光の粒子に変換して消えていく。同時に、両肩に浮遊していた二門の速射砲もリミット・ダウンを迎えたのか、地面に力なく落下する途中で消滅した。
　もちろん、それらはシールドエネルギーを食わないが、これでしばらくはエネルギー系の武装を警戒する必要はない。その証拠に、早乙女の周辺に浮遊していたユニットも今は機体に収納されている。

「ってことは、今がチャンスだ！」
「チィッ！　コノヤロウもうガス欠か！　糞ッ――ブレードぉ！」

　白式の損傷が大きいことが気がかりだが、この好機を逃せばジリ

貧になるだけだ。スラスターを吹かせて斬りかかる。
ガギィンッ！　響いたのは鋭く鈍い金属音。早乙女が近接戦闘用の対ＩＳブレードをがむしゃらに振り回すようにしてこちらの一撃を弾き返したのだ。

（これは、……勝てる！　早乙女のやつ、剣の扱いはド素人だ）

ＩＳは所詮はパワードスーツ。近接戦闘における動きは人体の延長線上にあるものだ。つまり、本人の技量が直接反映されるのだ。
俺自身、剣道から遠ざかってはや数年。かつてに比べれば遥かに弱くなっていると言えるが、だからといって竹刀に触れたこともないような素人と試合をして負けることはない。

（それに、剣の強さなら箒を相手にした方がよっぽど苦戦する……！）

真正面から振り下ろされたブレードと正面から打ち合わずに受け流す。そのまま雪片を右下段へ。注意すべきはこの間合いの維持。右半分の無事な背部スラスターを全開に、早乙女を正面に捉えたまま、時計回りに旋回して背後に回り込む。

「な、なんだァ！？　コノヤロウ！」

案の定、早乙女は反応しきれず、大振りに振られたブレードは何もない虚空へと振り下ろされることとなった。
――ここだ。もらった！
下段からの斬り上げ。『零落白夜』の発動を強く感じた瞬間、実体刀である雪片が光を纏い、ワン・オフ・アビリティを発現させる。

「糞ッ！　バカヤロウコノヤロウ！」

早乙女は今になって背後から迫る刃に気付いたようだ。だが遅い。雪片が通った軌跡がくっきりと、背中の装甲に刻まれている。ほとんど全開であったシールドエネルギーがごっそりと削られ、早乙女の顔が青ざめる。

（あと一撃！　これが決まれば、俺の勝ちだ）

斬り上げた体勢から、今度は上段からの振り下ろし。早乙女も振り向いて防ごうとはしているのだが遅すぎる。もはや対応する術はない。

――ガギィンッ！

ありえないはずの場所から出てきた腕に握られたブレードナイフが、雪片を一瞬受け止める。

「――――んな！？」

「舐めんじゃねぇぞコラァ！！」

虚を突かれた事で硬直していたのだろう、お手本のように綺麗な正拳突きがたたき込まれ、衝撃が身体を走り抜けた。

体勢を立て直してみれば、早乙女のシュラウドの背面下部のアーマー突起から近接ブレードナイフを装備した隠し腕（サブアーム）が飛び出ている。これが雪片を受け止めた腕の正体だった。

続けて腰部から広がるスカートアーマーの左右の突起が動き、さらに二本の隠し腕が。

（……『ＩＳは所詮はパワードスーツ。近接戦闘における動きは人体の延長線上にあるものだ』って、これは予想できないよな……）

そもそも、動画で見た野々宮との試合では使用していなかった。まさに奥の手といったところか。

「これで最後だ。決着をつけてやる！」
「……っ！」

互いに距離をとって対峙する。早乙女は片手でブレードを持ち、さらに機体各部三カ所に設置された隠し腕にブレードナイフを持たせている。

俺は雪片を構え直すと、残ったスラスターで加速姿勢をとった。

――『瞬間加速』、アレをやるしかない。

理論はあの電話帳（さんこうしょ）と千冬姉から。見本は昨日の試合でフランスの代表候補生――シャルロットだったか――が使っているのを一度見ただけ。

これだけ機体が損傷した状態で、しかもぶっつけ本番など、我ながら分の悪い賭けだとは思う。だが、これ以外に勝つ方法が見つけられない。

「だりゃあああああああああッ！！」
「うぉおおおおっ！」

二つの機影が交差する。……そして、勝敗は決した。

雪片が具現維持限界（リミット・ダウン）を迎え、光の粒子へと変化して虚空へ消える。直後、装甲を切り裂かれた白式が待機状態へと戻っていく。

『――試合終了――』

だが、それは早乙女のシュラウドも同じだった。零落白夜の斬撃を受け止めたブレードは、しかし完全に止めることはできず半ばで

折れ、胸部装甲には大きく斬り裂かれた傷跡が。

『――勝者――』

機体表面には紫電が走り、その端から光の糸を編むように溶けていく。シールドエネルギーが0を通り越して機体維持警告域へと達したシュラウドは操縦者保護に機能を回し、……強制解除された。

「……俺の、負けか」

「ああ。……勝ったのは、俺だ」

『――織斑一夏――！』

クラス代表決定戦。俺は、この戦いに勝利した。

アリーナ中が歓声で沸く。今まで見る余裕がなかったが、そこには応援してくれたクラスの男子たち――そして、箒の姿があった。

「……はぁ」

忘れていた疲れがどっと噴き出してくる。俺はピットに向かいつつ、空を見上げた。

空はどこまでも青く、無限の広がりを感じさせてくれる。

ふと、思いついたように手を伸ばす。何の意味もない行動なのだが、何故か、……今ならどんな場所にも手が届くような気がした。

◇

翌日、朝のＨＲでの出来事である。

「というわけで、一年一組代表は織斑くんに決定しましたー。あ、一繋がりでいい感じですね！」

教卓の前で嬉々として喋るのは、ダボっとした服装に若干ずれた大きな眼鏡の山田先生だ。童顔と普段の雰囲気も相まって実に子供っぽい。もしＩＳ学園の制服を着たら生徒と見分けがつかないだろう。

「えーっと。その～、……こちらは残念なお知らせなんですが……」

ニコニコとした笑顔が、瞬時に苦笑いのような困惑を含んだものへと変わる。実に表情豊かである。

「織斑くんと早乙女くんのＩＳを確認しましたが、共にダメージレベルがＣを超えていますので当分は修復に専念しないといけません。ＩＳを休ませる意味でも、クラス対抗戦への参加は許可できません」

「そういう訳だ。クラス代表は織斑だが、五月のクラス対抗戦へは野々宮を代役として出場させる」

山田先生の言葉を、織斑先生が引き継ぐ。

『ＩＳは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働

も含まれ、ＩＳのダメージがレベルＣを超えた状態で稼働させると、その不安定な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』

――以上、《ＩＳ基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三項》より抜粋。

「先生、質問です」

挙手。いつも勝手に発言しては出席簿アタックを喰らい続けて学習したのか、一夏は素直に手を上げて許可を求める。

「はい、織斑くん」

「それって、会議や委員会の出席とか面倒なクラス長の仕事だけ俺がやって、試合には野々宮が出るって意味でいいんですか？」

「織斑……何か文句があるのか？」

「イイエ、アリマセン。オレ、コレデマンゾク」

バッシーンッ！

「すみませんでした！！」

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと、クラス全員一丸となったとてもいい返事であった。

机にうつ伏せになってぐったりとした一夏を除いて。

8話　織斑一夏ＶＳ早乙女大地（後書き）

早乙女の敗因。
無駄弾を撃ち過ぎたこと。命中精度が悪かったこと。大口径の荷電粒子法を撃ちっぱなしにしたことで早くエネルギー切れを起こしたこと。
武装がエネルギー系のみで、実弾装備を用意してなかったこと。
零落白夜の特性を知っていたくせに、実体シールドを用意してなかったこと。
ガチタン（防御特化砲撃戦ＩＳ）で格闘特化軽量二脚　（高機動型近接戦特化ＩＳ）に格闘を挑んだこと。
ブレード使うぐらいなら素手で殴る格闘戦のほうがよっぽど得意なのにブレードを無理に使ったこと。
戦いになると興奮して周りを冷静に見ることができてないこと。

9話「お願いしようかと思って」

夜が明けても、朝の空気は切る様に冷たい。その代わり、胸の奥まで存分に吸い込めるくらい澄んでいた。

四月も下旬。入学した頃には満開に咲き誇った姿を見せてくれた桜も今はもう花びらを散らしてしまっている。

早朝のトレーニングの後、いつものようにシャワーを浴びた男子たちがゾロゾロと寮の食堂へと向かっていく。

ここ最近は毎朝のトレーニングに慣れたのか、何名かの男子は調子よく体を動かしている。無論、自主トレーニングについてこれずに途中でヘバってしまう男子も多かったのだが、そこは葉川が活躍してくれた。中学時代は野球部部長であった彼は1組男子を体力上位と下位に分け、まずは基礎的な体力作りを主眼に置いたトレーニングメニューを作ったのだ。この辺りは運動部の本領発揮といったところか。葉川の他にも元運動部の男子たちが大いに貢献してくれたといえよう。

「腹減ったー。メシだメシー」
「よく元気が残ってるな……この体力バカめ……」
「お前らが体力ねーだけだコノヤロウ」
「それでも、最近やっと慣れてきた気がするぜ」
「ほう……なら上位組のトレーニングメニューに切り替えるか？」
「ハハハ。まだ1ヶ月も経ってないのにすぐ強くなったりはしないっての」
「そうそう。あせらずじっくりやるのが一番やって。体壊したら元も子もないんやからな」

30人もいると流石に会話が騒がしい。それでも不愉快な気持ちがしないのは不思議だ。

妙な一体感というのか、連帯感というのか。トリッパーだからというだけではない。……彼らは、そんな不思議な感情を共有していた。

（こういうのも、悪くないね）

小野田幸人にとって、現在の生活に不満も悔いもない。あの、世界が変わった日から入学までは大小様々な不安と微妙に異なる常識に困惑する日々を送っていたが、始まってみればなんてこともない。『特別』な存在が自分だけでなかったことに対する落胆よりも、自分と同じ境遇の者たちが２９人もいることの安心感の方が勝っていた。

「む……」

「おお、お前らも朝飯か！」

グラウンドから寮への帰り道、同じく剣道場から寮へと朝食を食べに戻る一夏と箒のコンビに遭遇する。

一夏はあのクラス代表決定戦から、毎朝篠ノ之箒と共に剣道の鍛錬を行っているらしい。

最初は一夏も男子たちとグラウンドでの自主トレーニングに参加するか、あるいは共に剣道の特訓をしようと誘ってきたのだが、その隣で何か言いたげに（あるいは残念そうに）している箒を見るに見かねた一部の男子たちの働きかけで現在のような結果となっていた。

「ああ、なんか偶然だなぁ。一緒に行くか！」

藤原が元気よく、朝食に誘う言葉をかける。

「おはよう一夏。箒さんも」

小野田が笑いながら、あいさつをする。

「オッス、織斑ちゃん。朝っぱらから熱心だな。箒ちゃんも、本当に織斑ちゃんと仲がいいねぇ」

入江が、おどけたような表情でからかった。
「……おはよう。……おっぷす……」
比良坂が、顔色悪く頷いた。
「比良坂、無理すんなよ」
一夏が、心配そうに苦笑する。
「ふん。早くいかなければ時間がなくなるぞ」
箒が、ジロジロと一夏を見ながら急かすように言う。

いつものことだ。

一夏と特に親しい者たちは同じテーブルで。そうでない者たちは思い思いの場所で朝食をとる。
入学から数日間は男子だけ――３１人全員でひと固まりになって食べる事が多かったのだが、最近ではいくつかのグループに分かれて食べるようになっていた。女子も流石に慣れたのか、初日のように包囲網を布いて来ることはない。それどころか、男子と一緒に仲良く話しながら朝食を食べる姿も見かけるようになった。織斑千冬の弟として有名な一夏の他に、頼れる雰囲気を持つ葉川や精悍な顔立ちである田辺のいるグループなどは特に女子が集まっている。

「うん。やっぱ朝は和食だよなー」
「俺はパンも好きだけどな。バランスよく食べるのが一番だろ？」

一夏の朝食メニューは和食セットだった。ご飯に納豆、味噌汁、シャケの切り身、ほうれん草と実にバランスが良い。対して、藤原が選んだのは洋食セットだ。

「織斑ちゃんはホント、和食好きだな」
「それを言うなら箒さんもだね。いつも一夏と同じメニュー食べてるし。……それにしても、最近の女性は納豆が嫌いな人が多いって

聞くけど、平気なんだ？」
「なっ！　べ、べつに、その……一夏が偶然私と同じものを選んでいるだけだ！　そ、それに納豆は体にいいのだぞ……！」

急に小野田に話を振られたからなのか、あるいは一夏と同じ朝食を選んでいることを指摘されたからなのか。……恐らく後者だろうが、それまで黙々と食事をとっていた箒があたふたとしどろもどろに弁解する。
それを不思議そうに見ている辺り、やはり織斑一夏は鈍感なのだろう。

「あー、ワタシ納豆だけはダメ！　匂いというか、ネバネバの触感がダメね」
「そうかー？　でも日本人ならご飯に納豆だよな」
「仕方ないよ。人によって好き嫌いが分かれる食べ物だもん。特に外人さんにはね」

男女混合で十人、いや十二人ほどの大人数だと食事も賑やかになる。
女尊男卑の世の中だが、さすがに初期セシリアのように極端な性格の女性はほとんどいない。あるいは内心で男性を差別してはいても表に出さないだけの分別は持っているようであった。

これが最近の朝の風景である。

◇

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行訓練を実践してもらう。入江、

野々宮。試しに飛んでみせろ」

千冬の凛とした声がアリーナ内のグラウンドに響く。

四月も下旬。ＩＳの基礎知識の授業も終わり、基本動作の実習が始まっていた。

本来ならば１組の専用機持ち、つまり一夏と早乙女も参加するべきなのだろうが、二人のＩＳはダメージレベルがＣを超えてしまったため現在修復中である。

「了解っす」

「わかりました」

訓練機と違い、専用機は一度フッティングさせれば操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。野々宮はドックタグ、入江は指輪型のものを鎖に通して首にかけている。

入江と野々宮が一歩前に出る。瞬間、彼らの全身を薄い被膜が包み込むように光が迸り、それらは全て凝縮されて一つの形を成す。これがＩＳの装着だ。入江はＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』を。野々宮はＩＳ『御風（ミカゼ）』をそれぞれ装備した状態で地面から数十センチ浮遊していた。

「集中が足りん。熟練したＩＳ操縦者は展開まで１秒とかからないぞ」

千冬から厳しい檄が飛ぶ。展開時間そのものは問題ないが、その前、展開させるための集中に時間がかかり過ぎている。無論、入学したてのＩＳ操縦者としては及第点であるが、代表候補生と比較すれば完全に劣っている。

「よし、飛べ」

指示を聞いた二人の行動は早かった。両者共に上昇を開始し、遥か上空を目指す。グラウンドの男子たちが眩しそうに二機を見上げた。二人がいる場所は地上からの距離二百メートル上空。半ば強制入学させられた男子たちに高所恐怖症の者がいないのが幸いだ。

「入江、反応が遅いぞ。スペック上の出力ではラファール・リヴァイヴは御風に劣るが、操作性はお前のＩＳの方が上のはずだ。野々宮、お前は機体の性能を扱いきれていない。暇があればＩＳを起動して操作に慣れろ」

通信回線を通じて、インカム越しに千冬が上空の二人に指示を出す。何と返事をしたのか男子たちには分からないが、少なくとも喜んではいないだろう。

ちなみに、教本では急上昇・急降下の際に『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で行うと記述されていたが、二人は別々に好き勝手なイメージで行っている。入江曰く「コントローラーの十字キーかスティックを進行方向に倒すイメージだな」だとか。野々宮は角錐よりも矢印のマークを上下左右の進行方向に向けるイメージの方が掴みやすいなどと男子たちに説明していた。この辺りは完全に個人差、感性の問題だろう。

「よし。では次に急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」

千冬が再び指示を飛ばす。先に動いたのは野々宮だった。

野々宮のＩＳ『御風』は他の一般的なＩＳに比べ小柄であり、流線形のフォルムと背後に装備した大型ウイングが特徴的だ。それは、まるで戦闘機の翼を人が背負っているような印象を抱かせる。機体色は灰色を基調として、所々が緑のカラーリング。軽装甲の高機動

型ＩＳといったところだろう。
最も、シールドエネルギーがあるＩＳにとって見た目の装甲というのはあまり意味を為さない。例外は早乙女のシュラウドや訓練機である打鉄のような防御特化の機体だ。

ウイングを最大出力で吹かせながら上空から一気に急降下した野々宮は、地表２．５メートルほどで停止した。続く入江は地表二十センチほどでの静止に成功したが、野々宮に比べ降下の速度が遅い。地表が近付くにつれて徐々に減速してしまっていた。

「何をやっている入江。私は急降下だと言ったはずだ。野々宮、お前は姿勢制御と見極めが甘い。早くから停止しすぎだ。ＩＳにはシールドバリアーと絶対防御がある。仮に墜落しても怪我はせん。もっと思い切りやれ」
「うげ……、はい」
「申し訳ありません」

この後も、千冬の指導は容赦なく続いた。素人目には上手くできたと思っても、何々が甘いだの別の部分が疎かになっているだの、終わる頃には二人はすっかり気落ちしているようであった。
特に入江は近接用武装の展開についてかなり絞られたようだ。無理もない。クラス代表決定戦では近接用の武装を展開することができず、白式を足で蹴り飛ばすという戦法をとっていたのだから。

「これならまだ時間はあるな。……訓練機の打鉄を借りることができた。順番に装着してみろ」

原作ならここで終わるのだろうが、セシリアと箒の喧嘩がないからなのか。あるいは一夏の墜落がないからなのか。特に問題もなく授業はスムーズに進んだ。

男子たちのＩＳ適正はそのほとんどがＡだ。中にはＢランクの者も数名ほどいるが、それ以下の適正値の者はいない。適正値の低い者の中には歩行訓練から開始したりする生徒もいるのが通例だが、１組のトリッパーたちには当てはまらないようだった。

「まったく……」

千冬は息を吐き出して、小さく何ごとか呟く。その言葉を聞いている者は誰もいなかった。

◇

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夕方。すでに太陽も沈んだ時刻、ＩＳ学園の正面ゲート前に、小柄に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた。

まだ温かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んでツインテールにしている。その色は、艶やかな黒。

日本人に似ているがよく見ると違う。鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙切れを取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれがどこにあんのよ」

少女の機嫌は段々とイライラへ変わっていく。元より、あまり気の長い性分ではないのだ。

（あーもー、面倒くさい！　空飛んで探そうかな……）

一瞬、妙案を思い付いたとばかりにぱっと顔が明るくなるが、すぐにげんなりとした表情に変わる。ここに来る前に熟読させられた学園内重要規約書の内容を思い出したのだ。

ＩＳの勝手な起動、それも転入手続きも終わってない状態でなど、最悪の場合は外交問題に発展する。……そこまで考えて、少女の顔が今度は得意気なものに変わった。

（ふっふーん。まあねー、ちょっとは自重してあげないとねー）

日本に来る前、「それだけはやめてくれ」と自分にへこへこ頭を下げて懇願してくる政府高官の顔を思い出したのだ。

元々、彼女はＩＳ学園に留学することを拒否していた。しかし、とある男子がＩＳ学園に入学することを知って予定を変更。ＩＳを使って政府の高官を脅しつけて、そして転校することになったのだ。それ以来、あの偉そうな大人は少女に対して怯えた態度で接して来るようになった。無理もない、腕力でＩＳに勝てるはずがないのだから。

昔から『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いな少女にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

――男の腕力など児戯、女のＩＳこそ正義。

現代のその風潮もまた気分がいい。少女はかつて、『男というだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子供だった。

（でも、アイツは違ったなぁ。……元気かなぁ）

とある男子のことを思いだす。その男子は他の有象無象の男と違い、強さと優しさを持っていた。

件の男子以外にもＩＳを起動することができた男が入学しているのは気に食わなかったが、“彼”に会う事ができることに比べれば些細なことだった。

「ああ、まあ確かにそうだけど……けどな……」

声が聞こえた。視線をやると、男子がＩＳ訓練施設から出てくるようだった。どこの国でもＩＳ関係の施設は似たような形をしているから、すぐにそうだとわかる。

（ほんとに男が入学してるんだ。……まあ、いっか。場所聞いてみよっと）

日本で３１名もの男性ＩＳ操縦者が見つかったことは知識として知ってはいても、実際に目にするとまた違った感情が湧いてくる。……大丈夫。彼女は自分に言い聞かせる。もし仮に、ＩＳを使えるということでまた偉そうにする男が出てきたとしても、今の彼女はそれを問答無用で蹴散らせるだけの力がある。何せ彼女は代表候補生なのだから。

「だからさ、知識として理解するのと、実践するのとじゃあ違うだろ。イマイチ感覚がつかめないんだよ」

声をかけようとした少女は、その男の声に不意をつかれてびくんと体を震わせた。

だって、その声は彼女が会いたいと願っていた男子の声と似ている。いや、同一人物だったのだから。

まったく予期せぬ展開に、少女の行動は早鐘を打っていた。一度呼吸を整えて、再び歩みを再開する。

「いち――」

出てきた声は、裏返ったおかしなものだった。途端に少女の顔が恥ずかしさから赤く染まる。

まるで自分が“彼”――織斑一夏のことを凄く意識しているようで、彼女の羞恥心を刺激する。

「おいおい、そんなんで本当に大丈夫かぁ？　訓練機のラファール・リヴァイヴは、ＩＳの中でも一番簡単に操縦できる機体だぞ。ったく、せっかく箒ちゃんやシャルロットちゃんまで訓練に付き合ってくれたってのに」

「まったくだ。なぜ私の説明でイメージが掴めん？　あれだけ丁寧に説明してやったというのに」

「ま、まあまあ。……一夏は頑張ってると思うよ？　ねっ？」

「篠ノ之さん。貴女の説明は少しばかり抽象的で、感覚に頼ったものが多すぎだ。人によって連想するものが異なる以上、それではイメージに齟齬が生まれる」

一夏の後に、サングラスを掛けた軽薄そうな男子と中性的な雰囲気を纏った金髪の女子が出てくる。さらに続いて、髪をポニーテイルでまとめた刀のような印象の女子と、ひょろりと背の高い真面目そうな眼鏡の男子が。

「そうそう、野々宮の言うとおりだ。箒の説明は独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいって感じ』って」

「……くいって感じだ」
「だからそれがわからないって言って――おい、なに拗ねてんだよ箒」
「す、拗ねてなどいない！」

――誰？　あの女の子。なんでそんなに親しそうなの？　というかなんで名前で呼んでんの？
さっきまでの胸の高鳴りなど嘘のように消えていた。変わりに心を満たすのは、冷たい感情と苛立ちだった。

「仕方ねえって。あのミスターの打撃指導も擬音を多用した抽象的なものが多かったって話は有名だし。ある程度のレベルになると、繊細な感覚すぎて的確な表現が見つからない。だから擬音で表すしかないんだろう」
「そ、その通りだ！　私が言いたかったのはそういうことだ！　だから、くいって感じとしか表現しようがないのだから仕方ないだろう！」
「ふーん、本当か箒？」
「……」
「わー！　わー！　ほ、箒さんストップストップ！　そういう風に竹刀を振り回すのは危ないって！　僕たちにも当たっちゃうから」
「一夏もやめとけ。そうやって上げ足とってからかおうとするお前が悪い。それにしても、葉川はそういうの詳しいなあ」

さらに三人の男子が加わった。その一夏の姿は楽しそうで、……本当に楽しそうで。自分の居場所なんてないくらい楽しく騒いでいる姿が、無性に腹立たしかった。

結局、少女は一夏に声をかけることなく歩き去った。
総合事務受付もすぐに見つかった。アリーナの後ろに本校舎が建っていたのだ。夜になって校舎の灯りが消えた中、一つだけ灯りがともっていたのですぐわかった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園にようこそ、凰鈴音さん」

愛想良く笑う事務員に、しかし鈴音は不機嫌を表した顔のまま訊ねる。

「あの。織斑一夏って、何組ですか？」
「え？　ああ、織斑先生の弟さんね。それなら一組よ。男子は全員一組。あなたはお隣の二組ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったのよ。この前の試合で……」

聞いてもいない事を延々と喋り出す事務員を冷やかな目で見つめながら――鈴音はふとあることを思いつき、質問を続けた。

「二組のクラス代表って、もう決まってますか？」
「ええ、決まってるわよ」
「名前は？」
「え、たしかフランスの候補生で名前は……聞いてどうするの？」

剣呑な雰囲気を放つ鈴音の態度に違和感を感じたのか、事務員の女性は困惑した様子で聞き返す。

「お願いしようかと思って」

――代表、私に譲ってって。

そう言った鈴音の表情は、にっこりと笑いながら怒るという複雑なものだった。

◇

「じゃあ、みんないいかー？　この間のクラス代表決定戦は大変だったな。結局、織斑は対抗戦には出れなくなったけどクラス代表にはなったわけだ。まずはそれを祝おう」

パチパチパチパチ！　食堂のあちこちから拍手が上がる。

今は夕食後の自由時間。一年寮に一組のメンバーが全員集まっていた。各自手に飲み物を持って、葉川の開催の挨拶を待っている。本来ならばクラス代表である一夏がすべきなのだろうが、彼が辞退したために代役として葉川がやってくれたのだ。

「今日はその記念のパーティーというか、打ち上げだ。ジュースやスナックは早乙女が用意してくれた。ケーキやデザート類を作ってくれたのは門野だ。全員、二人に感謝するように」

打ち上げに協力してくれた二人への感謝の言葉を述べると、みんなの視線が二人の方を向く。

がっしりとした肩幅によく日に焼けた浅黒い肌の男、早乙女大地。

静かに腕を組みながら、強面の顔に笑みを浮かべている男、門野隼。門野の実家は有名な老舗レストランで、歳の離れた兄が店を継いでいる。自分も料理は得意なんだと自己紹介の時に言っていたの

を一夏は思い出す。一夏も料理はするので、気が合うかもしれないと思い覚えていたのだ。

二人ぺこりと頭を下げると、また拍手が起きた。

「それじゃ、あんまり話が長引くのもなんだし、これで最後だ。――今夜は大いに騒いで、また明日から頑張るための活力にしよう！」

葉川が手に持った紙コップを掲げ、乾杯の音頭を取った。

「「「「かんぱ～い！」」」」

／やんややんやー！／

各々が好き勝手に騒ぎながら盛り上がる中、一夏の表情は反対に引き攣ったものだった。

「どうしたどうした、元気がないぜ」

「せやせや。楽しむべき時に楽しまんでどうするんや」

「……」

クラスメイトの柊と里中が声をかけるが、一夏は答えない。

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』という名目で始まったこの集まりだが、実際のところ「楽しく騒げればいいや」という考えで計画されたものである。

「……めでたくない。ちっともめでたくないぞ。そもそも俺はクラス代表なんて初めからなりたくな……あ痛っ！」

「ふん。一度決まったことをぐちぐちと……、男らしくないぞ」

「ほ、箒!?　な、何で一組の打ち上げにお前がいるんだ」

ぽかりと、軽く一夏の頭をこずいてきた箒の姿に一夏は驚きの声を上げる。

「今更だね。クラスの集まりに女子がいる時点で気付くべきだったと思うけど」

「お前は鈍感すぎなんだよ。色々とな」

それを横目で見ながら、橋本と梅原の二人が呆れたように声を吐きだす。

この打ち上げに参加しているのは男子だけではない、話を聞き付けた女子たちがこぞって食堂に集まって来ているのだ。今や五十名ほどの女子が食堂に集まり、思い思いに喋っていた。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、あの織斑先生の弟である織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」

「オー！」とか「ほお……」と一同が盛り上がる。その反応に一夏は益々頭を抱えてしまう。

「私は二年の新聞部部長よ！　よろしく。はいこれ名刺」

おざなりに名刺を受取った一夏は顔をしかめる。書かれている名前は『黛薫子』。その画数の多さにどうでもいい感想を述べているのだろう。

「ではではずばり織斑君！　クラス代表になった感想をどうぞ！」

「えっと……確かに代表にはなったけど、ＩＳの損傷が大きいから対抗戦には出られないんだけど……」

ボイスレコーダーを突き出された一夏は、困惑したように目線を

泳がせてから、

「まあ、なんというか、がんばります」

実に曖昧な台詞だった。対抗戦には出れないのだから、頑張ると言えばクラス長としての“面倒な”仕事しかないのだが……その辺を理解しているのだろうか？

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。ぶーぶー」

「対抗戦には野々宮が出るから、そっちに聞いてください」

「仕方ない、適当にねつ造しておくか」

「オイ！　それでええんか！？」

真実の報道記者はいないのかと、間近にいた里中からのツッコミが入った。

「そうね。それじゃ野々宮明君にもインタビュ～！　はい、これ名刺ね」

「どうも」

律儀にも、野々宮は名刺を受取る際の作法通りに受け取り、懐から出した名刺入れに丁寧にしまい込んだ。その態度に、黛薫子もやや緊張したように背筋を伸ばす。

無理もない。野々宮の容姿といえば鼻筋の通った顔にややつり上がった目。ひょろりと伸びて高い背に銀フレームの四角い眼鏡。彼を見て感じる第一印象といえば、真面目・堅物・エリートといったものだろう。

そうして出てきた言葉は――、

「成程、坂本美緒先輩ですか。……もっさんとお呼びしても？」

「誰よそれェ！！？」

素っ頓狂なものだった。思わず薫子は声を張り上げる。

意味のわかっていない女子とは対照的に、男子たちはオー！　と納得したように盛り上がる（一夏を除く）。

そして始まるもっさんコール。

「なっ、な、なな、何が起こってんの？　私？　私が悪いの！？　私がわからないのがおかしいの！？」

「いえ、単なる冗談です」

澄ました顔でさらっと流す野々宮に、薫子はオロオロとうろたえる。

それを見てふっと顔を緩ませると、野々宮は眼鏡をすっと持ちあげて言った。

「織斑の代役という形ですが、やるからには全力で取り組みます。負けるつもりはありませんよ」

「え、あ、うん。やる気にあふれてるね。あはは……」

野々宮を見る薫子の表情は、疲れを滲ませたものだった。多分、彼女の中での野々宮の印象は最初とかなり違ってしまったのだろう。

その後、記念撮影をしたりちょっとしたミニゲームで騒いだりしながらのどんちゃん騒ぎは十時過ぎまで続いた。

最初はうんざりした様子だった一夏も、なんだかんだ言いながら楽しんでいるようだった。やはり女子に囲まれているよりも、大人数の男子と遊ぶ方が気が楽なのだろう。

もう、夜はどっぷりとふけ、空のスクリーンには大きな満月が映し出されていた。

「あーうん、そうそう。相変わらずの着た切り雀。……はーい、じゃあまたですね」

ピッと、僕は携帯を切ると部屋のコンセントに差しっぱなしにしてある充電器に差し込む。

「なんだよ小野田、誰と喋ってたんだ?」

ガチャリと扉が開き、シャワーを浴び終わった藤原がジャージ姿で出てくる。

「誰って? 藤原んとこのおばさんだよ。寮生活も大変だろうから、ゴールデンウィークには一度帰って来いってさ」

「ちょ、おまっ! なんで俺のオフクロとそんな親しげに電話してんだお前は!」

そう言われても困る。元々家も近いし親同士も仲がいいから、自然と会話する機会も増えただけだ。

というか、藤原が碌に家に電話もしないし、電話しても出ないから心配して、同室である僕の方にかけてきたそうだ。携帯の番号は僕の母さんに聞いたらしい。

それを聞くと、藤原は何やら気恥ずかしそうに片手で顔を覆った。

「あ〝ー、こっちは寮生活満喫してんだから、そんな干渉してこなくてもいいっつーのに」

「ま、親だから心配なんだろ？　ちょうどいい機会だし、僕も一度ゴールデンウィークには実家に帰るよ」

聞いているのかいないのか、藤原はポリポリと頭をかいている。

ふと、今日のパーティーで見かけて気になっていた事を思い出す。

「そういえばさ」

「なんだよ？」

「今日の打ち上げ、セシリアは参加してたっけ？」

「……どういう意味だ？」

意味がわからないといった風に藤原が首を傾げる。

「いやさ、今日の打ち上げの時にセシリアっぽい人がいてさ。扉の影から一夏を見てたり、人の後ろに隠れるようにして一夏の後をつけてたからさ」

扉や柱の陰に隠れても、わずかに覗いていたあのロールがかった金髪のちょろ毛はセシリアだと思う。

それはまるで、一夏を観察しているようにも、声をかける機会を窺っているようにも見えた。しかし、あれがセシリアならあんな行動をする意味がわからない。

「ストーキングしてたんじゃないのか？」

「なにそれこわい」

9話「お願いしようかと思って」（後書き）

鈴　「クラス対抗戦で叩きのめしてあげる！」
一夏「俺は対抗戦に出れないから意味ないんだけどな」

白式は修復中。なのでＩＳを使う特訓や対抗戦には訓練機（ラファール・リヴァイヴや打鉄）を使うしかないのです。

１０話「弾ルートだ」

「転校生？　今の時期に？」

朝。訓練機の申請について窓際で藤原と話をしていると、一夏の言葉が耳に入った。

今は四月だ。普通なら入学してくるはずの時期。転入にしては不自然だ。そもそもＩＳ学園に転入しようとすれば、その条件はかなり厳しくなる。試験は勿論のこと、国家の推薦が必要なのだ。ということはつまり――、

「中国？」

「ニクミー？」

「酢豚？」

喉まで出かかった言葉は、急にこちらに割って入って来た浅越、新庄、鳴海の三人組に遮られた。勿論、一夏には聞こえないように小声だが。

「お前ら、何急にこっちに来てんだよ……」

藤原が鬱陶しそうに三人を押しのけると、一夏の話に聞き耳を立てる。ついでに僕も。

一夏は今箒と、箒について来た数名の女子と一緒に雑談している。まだＨＲも始まらない時間のため、他のクラスからも女子がやってきているのだ。……うむ。やっぱ一夏はモテオーラとか妙なフェロモンを発揮しているのではなかろうか？　いやいや、顔の良さとか雰囲気イケメンならうちのクラスにも数名いる。って、何を張り合ってんだ僕は。

「そうそう、ウチのクラスに編入されるんだって」
「えっと、確か相川さんは箒と同じクラスだったよな。……ってことは二組に？」
「うん。なんでも中国からの留学生なんだってさ」

中国から転入。……これは、間違いないな。
それにしても鈴は二組なのか。箒も二組、セシリアも二組、シャルロットも二組……やったね鈴ちゃん！　二組の仲間が増えてるよ！

「へー。どんな奴なんだろうな？」
「む……気になるのか？」
「え？　ああ、まあな」

その答えに、箒はむくれたように一夏から顔を逸らした。むすっという擬音がよく似合う。これで頬を膨らませたらもう少し可愛げもあるのに、もったいない。
（嫉妬する気持ちはわからなくもないけど……）
僕としては、もっと素直に、そしてすぐ手を出す癖を改善すれば一夏もわかってくれるのではないかと思う。一夏の鈍感も酷いが、彼女は時々理不尽が過ぎる。
そうして、つらつらと思案していた時だった。

「――その転校生は、私よ」

教室の入口から、よく通る勝気そうな声が響いた。

「中国代表候補生、凰鈴音！　今日は一組に宣戦布告に来たってわけ」

ざわっと、教室中にざわめきが広がる。クラス中の視線を集めるのは、長い黒髪を金色の留め金でツインテールにした、八重歯がチャームポイントの小柄な少女。凰鈴音。

おおとりすずね、じゃありません。ファン・リンインです。

鈴音は腕を組み、片膝を立てた体勢で開け放たれた教室のドアにもたれていた。

「鈴……？」

「そうよ。驚いて声も出ないのかしら」

一夏を見つめて、ふっと小さくニヒルな笑みを漏らす鈴音。しかしアニメで見ると気にならなかったが、その脇を出した改造制服は寒くないのだろうか？

「いや、何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

気取った喋り方と雰囲気がガラガラと崩れ落ちる。やはり先程の態度は演技。遅れてきた軽い厨二病という奴なのだろう。僕も昔、ああいう風に生意気というか、まるで世の中を知ったように斜に構えてるのが格好良いと感じていた時期もあった。うむ。……痛い過去やコンプレックスを笑ってネタにできるくらいの大人になりたいものだ。

「おい」

と、そこで唐突に鈴音の後ろから声がかかる。

「なによ！？」

バシンッ！

怒りを込めて怒鳴り返した鈴音の頭が、振り下ろされた出席簿でガツンと沈んだ。一年一組ブロリー先生がご降臨なさったのだ。

「もうＳＨＲの時間だ。……お前たちもグズグズするな。さっさと教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「学校では織斑先生と呼べ。そして入口を塞ぐな。他の女子たちが通れんだろうが」

「す、すみません……」

すごすごとした態度で扉からどく。鈴音が扉の前に立っていたことで出るに出られない状況であった教室にいた女子たちも、織斑先生に一言「すいません」とあやまってから自分のクラスに早足で戻っていく。

「オルコット。お前もさっきからコソコソと何をやっていた。さっさと二組に行け」

「きゃん！？」

こちらからは見えない位置。教室の中からでは死角となっている場所からゆかなヴォイスの悲鳴がひとつ。ああ、また一夏を観察（ストーキング）してたのね。

「っていうか鈴のやつ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

「おい織斑。早く席に着かないと、」

パァンッ！

「こ、こうなるわけだな……。出来ればもっと早く教えてほしかった……」
「自業自得だ。学習しない馬鹿者め」
すでに一夏以外のクラスメイトたちは僕も含めて着席している。
実に調教され、…げふんげふん。統制のとれたクラスだ。
そして、今日も一日が始まる。ＩＳの学習と訓練、その授業が。

◇

授業も終わった昼休み。
ちなみに、午前の授業は特に誰かが騒ぐわけでも、妄想に耽るわけでもなく順調に進んだ。内容を完全に理解できているとは言い難いものの、クラスの全員が最低限の予習と復習はやっている。……まぁ、それはやる気がどうこうという問題ではなく、怒られることの恐怖によるものが大きい。何せ担任が担任なのだから。
閑話休題。
ともかく僕たちは、「一緒に学食行こうぜ！」という一夏の誘いを受けて共に食堂へと移動していた。そうして各自、券売機で好きな食券を購入したのであるがここで問題が発生。
「待ってたわよ、一夏！」
「どういうことか説明してもらうぞ、一夏！」
と、登場セリフを引っ提げて、箒と鈴音の二人がこの集団の先頭にいた入江の前に立ち塞がったのだ。

ちなみに順番は入江、僕、藤原、一夏、比良坂、早乙女、柊、野々宮……の後にぞろぞろと男子の列が伸びている。まあ仕方ない。男子のほとんどは弁当なんか作ってこない。そうすると必然的に、昼食は学食か購買で買うことになる。男子は31人が同じクラスであるし、授業が終了して昼食をとろうと移動すればほぼ同じタイミングで学食に集結することになる。

「あの、悪ィんだけどどいてくんない？　食券出せねえし、後ろもつかえてんだ」

「普通に通行の邪魔だぞ」

「「うぐ……」」

入江と、列の横からひょこっと顔を出した一夏の二人にそう言われて、箒と鈴音は一夏に文句をいいながらどいた。ちなみに、その手にはお盆を持っていて、それぞれうどんとラーメンが湯気を立てている。一夏もそれに気付いたのか、恐らく善意から「早く食べないと麺がのびるぞ」と忠告。

「う、うるさいわね。一夏が早く来ないのが悪いんでしょ！」

「誰のせいだと思っているのだ！」

「……」

「俺が悪いのかよ……」と無言で主張する一夏を横目で見ながら、僕たちも食券を出していく。それにしても本当に感情が顔に出るタイプだな一夏は。何を考えているか実に分かりやすい。

それはともかく、この食堂は学食にしては妙に豪華だ。何度見てもそう思う。きっと（主に日本の）金が無駄に使われているのだろう。その恩恵に与っているとはいえ、なんとも言えない気持ちになるね。いやホント。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

と、こちらを振り返った一夏が指差したのはあまり大きくないテーブルだ。……僕たちが座ってしまったら箒や鈴音が座れなくなるくらいの。

「いや……僕たちは今日はやめとくよ」

「知り合いなんだろ？　積もる話もあるだろうからな。今日は俺達はほっといてゆっくり話してこいよ」

「そうそう。織斑ちゃんもたまにはそういうのもいいだろ」

「……ボクもそう思う」

僕らとしては最大限に気を使った台詞であったが、当の本人は不思議そうに首を傾げる。これが皮肉ではなく本心から疑問を感じているのであろうから手に負えない。

誰かダブルオーかクアンタ持ってこい。力はいらない。けど一夏とのコミュニケーション、特に恋愛感情を伝えるにはトランザムバーストでの対話が必要不可欠だから。絶対。

「え？　いや、そんな気を使わなくてもいいぜ。何なら俺が――」

「「「「いいから！！」」」」

僕も藤原も他の男子たちも、箒も鈴音も団結してのその言葉に、一夏は少し引きながらも頷いた。

『一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが』

『それはこっちの台詞よ！　どういうことなの！』
『いやその。……なんで怒ってるんだ二人とも？　箒も鈴も、ただの幼なじみだよ』

学食の一角。四人掛けのテーブルを三人で占領したその場所は、なんとも表現し難い空気が渦巻いている。
今にも斬りかかりそうな気迫を身にまとって、一夏に詰め寄るファースト幼なじみ。篠ノ之箒。
ゴゴゴゴゴという書き文字を背負ったような迫力で、一夏に迫るセカンド幼なじみ。凰鈴音。

それを視界の隅に納めながら、僕たち一組男子たちは少し離れた大テーブルに陣取っていた。

「あれが修羅場ってやつなんだろうなぁ」
「……そんな他人事みたいに」
「いや、他人事だし」

あっけらかんとした口調で言う藤原を窘めるように比良坂が口を開くが、その返答に何も言えなくなってしまった。

「ま、織斑ちゃんが自分でまいた種なんだ。きっちり収穫してくださいってことだな」
「種と言うよりは旗（フラグ）だけどね。立てたのは」

本当に何とかしないと、一夏は近い将来誰かに刺される運命にあるのではないだろうかと心配になってくる。
無論、『複数の女性に手を出して云々～』といった昼ドラみたいなドロドロとしたものではない。あくまで無自覚に、女性の好意には最後まで気付かぬまま死んでいく感じで。

「あ〝ー、否定できないわそれ」

柊を始め、うんうん、といった様子で男子たちが頷く。感じるところは皆同じなのだろう。

しかし話は変わるが、幼なじみにファースト、セカンドと名付けるセンスはどこから持ってきたのだろうか。

「そのうちサードチルドレンとか出てきたりな」

「おい、幼なじみじゃなくなってんぞ。シンジくんになってんぞ」

里中がラーメンを啜りながらジト目で言う。……ラーメンとパスタとうどんはメニューにあるのに、そばがないのは何でだろう。そば美味いだろ、そば。

「で、ワンサマは結局誰ルートに進むんだろうな」

ドカ盛りされたご飯を頬張りながら、早乙女が思いついたように口を開く。

それはまるでゲームか何かの話でもするかのごとく軽い口調だ。実際、本人の態度を見ると本気で話を振ったわけではないらしい。あくまで冗談の一環でだ。

「ハーレムルートじゃない？　あの恋愛原子核っぷりで考えて。まあ、恋愛は個人の自由だと思うし……」

これは比良坂。サラダを中心に量は全体的に少なめだ。どうやらずいぶんと燃費がいいらしい。

いやしかし、いくら恋愛は自由だといっても今の僕らの立場を考えればハニートラップとか怖いですよ。めっちゃ怖い。まんじゅう

怖い。

「俺としちゃあ箒を応援してやりたいけどな。間近で見てると、あー、なんて言うんだ。もどかしいというか、哀れになってくるというか……」

「……ああ、うん」

僕としても藤原のその考えには同意したい。ただ、彼女自身にも少なからず問題はあると思うのだ。

実際、ツンデレというのが現実にいると仮定すれば、どれだけ面倒臭い女なのかよく分かる。別に付き合っている、恋人同士でもないのにちょっと他の子と話しただけで嫉妬して不機嫌になってやつ当たりしてくるなど迷惑でしかないだろう。まあ、女尊男卑のこの世界。女性の押しが強く、男性が受け身なのは恋愛面でも変わらないのだろう。一夏の場合は自業自得な面もあるのだし。

「鈴だろ」「おおとりすずねに一票」「じゃなきゃ二組の子がかわいそうだろ」

……またこの三馬鹿か。声を繋げるように、笑うように続けて喋る三人組へと首だけ回す。

浅越稔。身長は平均的なのだが、童顔のせいで幼く見られがちなのがコンプレックスなクラスメイトの一人。

新庄智治。小柄な体躯に人好きのする雰囲気を纏った明るい男子。

鳴海翔平。甲高い声で早口に喋る。カラオケが大得意だと自称する自信家。

特にこれといった共通点はないのだが、三人とも凰鈴音好きという固い結束で結ばれた愛すべき馬鹿。ちなみに自分達が鈴音と付き合いたいとかそういう恋愛感情や下心はないらしく、ただ純粋に応援したいという気持ちだとか。よくわからん。

「クッククク。――甘いな、まだまだ甘い」
「ん？」

唐突に、テーブルの向こうから悪党笑いと共に人影が現れた。
細く垂れた目と削げた頬。これだけ聞けば気の弱そうな容姿を連想するが、その実、彼の眼は常にギラギラとした闘志とも言うべき輝きを放っている。

「お前ら、――ぜんぜんわかっちゃあいねぇよ」
「九澄、なんなんだ藪から棒に」
「コレを見ろ」

藤原からの質問には答えず、九澄は肩にかけた小さな鞄から一冊の薄い本を取り出した。その表紙には、織斑一夏らしき人物が多少、いやかなり少女漫画チックなタッチで描かれている。さらに一夏と背中合わせに寄り添うのは、赤毛に長髪。頬にバーコード書いてラミネート加工したルーン持たせたくなるような男子。
その一冊の薄い本――いや、もうぶっちゃけて言おう、同人誌だ。をこちらに見せつけて、九澄は高らかに宣言する。
（※別の席で食事をしている一夏たちには聞こえてません）

「弾ルートだ」

嫌な予感はしていたが、改めて言われると衝撃がデカイ。思わず呑んでいたお茶をぶっと噴き出すくらいには。

「いやいやいやいや！」

「ないないないないそれはない！」
「ないわー。それはないわー」

ホモ臭いホモ臭いと言われる一夏だが、それは原作だとＩＳ学園に男が一人という状況であったから、弾やシャルル（シャルロット）といる時は生き生きしてただけであって。普段はいたってノーマルだ。そうだろう。……そうだよね？

「つーかお前、これどうしたんだよ」

という全員の心境を代弁した藤原の疑問は、

「隊長、大隊長どの！　昼食ご一緒させてください！」
「きゃあああああぁ！　リーダーぁ、もしかしてそれ新刊ですかぁ！？」
「私ＩＳ学園に来てよかった、本当に良かった！　主よ、あなたは私に最高の出会いを与えてくれました。いえ、あなたが神です！」
「行きましょイキましょ！　ここから先はＲ指定よ！」

という九澄の背後に出現した婦女子の軍勢にかき消されることとなった。

唖然。その時の僕らの反応はその二文字で表現できるだろう。

「フハハハハハ！　――まあ待ちたまえ。物事には順序というものがある。ここで騒ぐと迷惑になる」
「ああん、申し訳ありません統領」
「そうですよね、いきなり本番なんて風情がないですものね！」
「お願いですボス！　今度は千冬お姉様本出してくださぃぃぃ！」
「我が主！　マスター！　リーダー！」

ばんざーい、ばんざーい！　と熱狂のまま本能のまま欲望のままに、九澄と女子の一団は嵐のように通り過ぎて行った。
それをぽかんとした顔で眺めながら、僕たちはただ見送ることしか出来なかった。

九澄誠人。同人作家であり、ＩＳ学園の一部女子の間で『神』と崇められる男。
サークルの申し込みからネームに下書き、ペン入れにトーンに背景に、写植に校正、入稿、出版、頒布となんでもござれ。ギャグにシリアス、鬼畜に純愛、百合にＢＬ、健全にエロとあらゆる要素に対応でき、あらゆる絵柄を極めて高いレベルで描く男。

後年。その成り立ちの関係上、幾多の国家・組織・企業などの思惑が絡み、複数の派閥が出来あがっていたＩＳ学園内にて、一つの巨大な組織が立ち上がる。
人種も宗教も性別も、全てのしがらみを超えて集った兵（つわもの）たちの頂点には、九澄誠人が君臨していた。
流星の如く現れた彼はＩＳ学園内に存在するあらゆる派閥（カップリング）を巧みにまとめあげ、一つの巨大な組織（サークル）を結成。
受けと攻めの逆転でまったく別物とされ、双方の支持者が戦争になることもある界隈において、婦女子の心を巧みに掴み、他勢力すらも次々に取り混んで最大勢力を築きあげる。
同人のクオリティ。テンション、ウザさ、愛、どれを取っても他を圧倒していたそのサークルは、後に同人界の覇権を巡ってとある組織（サークル）と対立するのだが、それはまた別のお話。

閑話休題。

「で、何だったんだ今の？」
「わからん。深く考えるな、てか考えちゃ駄目だ」

ざわめきが収まった学食の一角で藤原は頭を抱えていた。多分、何かの拒否反応が出たのだろう。
そう、あれは中学校の1、2年の頃だったか。ジャンプの漫画を集めていた藤原は、ある日書店で見つけた“ある漫画”をそういう内容の本だとは知らずに表紙だけ見て買ってしまったのだ。そして家に帰り、その本をめくって「やめろォ！」……ごめん。
まあとにかく、藤原にとってそういう界隈の話はトラウマになっているのだ。

『じゃ、放課後に第二アリーナに見に来なさいよ！　約束だからね、一夏』

「お、あっちの話は終わったみたいやな」

里中の視線の先、ラーメンのどんぶりをお盆に乗せた鈴音が返却口へと駆けていくのが見えた。それを見送る一夏はなんとも言えない情けないもので、向かいの箒とは実に対照的だ。

「第二アリーナ？　それに見に来るという言い方は……」
「ああ、放課後にアリーナで模擬戦をするんだってよ。シャルロットちゃんがそう言ってたぜ」

何を言われるのか予想していたのだろう。野々宮が言い終わる前に、入江は答えを述べていた。
模擬戦。それは恐らくクラス代表の――、

「鈴は自分が中国からの転校生だってことと」

「代表候補生としか言ってなかった」
「クラス代表はシャルロットのまま」
……浅越、新庄、鳴海が代弁してくれた。
つまり、模擬戦の名を借りたクラス代表の座を賭けた決闘ということか。アニメでは見られなかった組み合わせだ。
「……じゃあ、放課後はその見物だな」
藤原の言葉に、全員が頷いた。
一夏がクラス対抗戦に出れない以上、それを観察するために束が送り込んだであろうゴーレムは現れないというのが、クラスの男子たちの見解だった。
だが、どこで何をしてくるかが分からないのが束博士の怖いところだ。それに対する備えをすることは十分に意味がある。代表候補生同士の戦いともなれば、きっと参考になるだろう。
そこまで考えて、急に肩を叩かれた。
「おい」
早乙女だった。彼はきょろきょろと忙しない目で、さっきまで一夏たちが座っていたテーブルを。それをこっそりと指差していた。すでに鈴音は学食を出て、一夏と箒も立ち去って行くところだ。
「さっきのルートの話に戻るけどな、……どうやらフラグは折れてなかったらしいぞ」
意味が分からず、僕たちはゆっくりと早乙女の指差す方向を見つめる。
そして、ぎょっとした。

一夏たちがさっきまで食事をとっていたテーブル。その奥。一夏や僕たちの位置からは観賞用に配置された木によって死角となっていた位置から、セシリア・オルコットがぬうっと出てきたのだ。

そのまま彼女は誘蛾灯に引き寄せられる蝶のごとく、ふらふらと一夏の後を追跡し始めた。

……。

「……セシリアルート？」

「ヤンデレルートじゃね？」

１０話「弾ルートだ」（後書き）

オルコッ党の皆さんに怒られそうでビクビクしてます。
それはそうと、オリＩＳの機体設定とかオリキャラ紹介みたいに別個に出した方がいいのだろうか？
出すなら1巻終了とか区切りのいいところで書くべきでしょうか？
意見があればお願いします。

11話　鳳鈴音VSシャルロット・デュノア

「でやあああああっ！！」

大上段から渾身の力でもって振り下ろされた異形の青竜刀《双天牙月》。

その両刃の近接武装と真正面から打ち合わないよう注意しながら、シャルロットは瞬時に呼び出した右手の近接ブレード《ブレッド・スライサー》で捌き、受け流す。そのまま左手の六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》での射撃に移ろうとして、――それは叶わなかった。

体を突き抜ける衝撃。その痛みを認識する前に、シャルロットは咄嗟に左腕と一体化した腕部装甲（シールド）で前面をガードする。そこへ正体不明の砲撃の連射が浴びせられ、シャルロットはたまらず距離をとった。シールドでのガードが間に合ったため致命的な一撃こそ受けなかったものの、『見えない攻撃』に対処できず“逃げてしまった”ことは彼女の心に無視できない焦りを生んだ。

「この甲龍のパワーを甘く見たわね！」

「くっ……！」

射撃の印象が強いシャルロットであるが、彼女の最大の長所はその『器用さ』だ。二十以上の武装を持つラファール・リヴァイヴ・カスタム?の特性を最大限に生かす高速切替。あらゆる武器を標準以上に使いこなし、近・中・遠距離での戦闘に対応できる。さらにその戦法。常に一定の距離と攻撃リズムを保ち、攻防共に高いレベルで相手を翻弄する『砂漠の逃げ水』。

……シャルロットが得意とするそれが単なる力押しで突破されたのだ。内心穏やかではいられない。

「『衝撃砲』……！　データでは見た事があるけど、実際に戦ってみるとこんなにも厄介だなんて、ねッ！！」

ハイパーセンサーが伝える空間の歪みと大気の流れ、そして鈴音の挙動から次の攻撃を予測。その被害を最小限に止める。

――衝撃砲。それはセシリア・オルコットのブルー・ティアーズと同じく、イメージ・インターフェイスを用いた第三世代型兵器。

空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾と化して打ち出す特殊兵装。その武装の最も厄介な点は、砲弾どころか砲身さえも目視が不可能であることだ。さらには実弾兵器とは異なり砲身が存在しないため、射角に制限が存在しない。つまり上下左右のあらゆる方向への攻撃が可能なのだ。３６０度の視界を確保するハイパーセンサーの特性を考えれば、鈴音の甲龍には死角が存在しないことになる。

（これじゃあ迂闊に近寄れない。セシリアと違って、近接戦にも即座に対応してくる……！）

クラス代表決定戦のように、瞬間加速からパイルバンカーでの攻撃で決着とは簡単にはいきそうにない。

「当然よ！　だって私が操縦してるんだから！」

《双天牙月》をバトンのように回しながら、鈴音は余裕の笑みを浮かべて薄く平らで残念な胸を張る。

シャルロットは答えず、新たな武装をコール。一瞬で展開した六一口径アサルトカノン《ガルム》を構え、無制限機動と全方位への急加速・急停止を織り交ぜながら爆破弾の射撃をお返しとばかりに浴びせかける。いくつかは命中したが、シールドエネルギーはまだほとんど削れていない。シャルロットは衝撃砲の攻略方法を分析しつつ、新たにコールしたアサルトライフルとショットガンの二丁に

持ちかえて突撃を開始した。

（確かに厄介だけど、無敵じゃない。こっちにだって勝機はある！）

豪雨のごとく降り注ぐ不可視の鉄拳を掻い潜り、両手に構えた二丁の銃器から絶え間なく放たれる弾丸の暴風。容赦のない制圧射撃は射線上のあらゆるものを蹂躙せんと牙をむく。多少の弾切れやエネルギー残量など考慮する必要などない。なにせ火薬庫とも形容されるほど装備が豊富なのが、シャルロットの専用機の特徴だ。そしてその装備の大部分が実弾兵器なのだから。

だが、鈴音とてただやられるだけではない。足を止めることなく不規則な三次元機動でシャルロットの照準をずらし、時には高速回転する《双天牙月》でマシンガンによる射撃を弾いてしまう。そして、隙あらば肩のアンロック・ユニットから衝撃砲《龍砲》での連撃を絶え間なく叩き込んでいるのだ。

やがて、双方どちらが追うでもなく逃げるでもなく旋回し合う。互いに仕掛けるタイミングを計るかのように。

◇

「鈴のやつ、本当に強かったんだな」

放課後の第二アリーナ。観客席で箒と共に模擬戦を見ていた一夏が感心したように声を漏らす。それを横目で見ながら、アリーナに集まった野次馬の一人である小野田幸人は思考を巡らせていた。

（鈴と一夏が同じ中学だったということは、中国に帰るまではＩＳ学習なんかしてなかったんだよね……）

原作において、鈴が引っ越してきたのは一夏が小学五年生の頃だ。正確には、四年の終わりに転校していった箒と入れ替わりになったと記述されている。その後、鈴が中国に帰って行ったのは中学二年の終わり。

（つまり、ＩＳに関わって一年足らずで代表候補生になったってことだ）

代表候補生というものは、そう簡単になれるものではない。国家代表と違い候補は複数いるとはいえ国の威信を背負う存在なのだ。だからこそ、中には数年に渡って訓練を受けているＩＳ操縦者もいるのだから。

近年ではＩＳの事前予習としてＩＳ学習を取り入れている学校は珍しくない。しかし、それは１００％女子校だ。一夏と同じ中学校に通っていた以上、鈴がＩＳ学習を受けていたとは考えにくい。つまり、国に帰ってからの一年足らずで代表候補生になったことになる。……これは普通のことではない。

幸人は諦観と、僅かな尊敬の念を込めて心の内で問いかける。

（一年か。……僕は、たった一年であそこまで強くなれるか？）

幸人のＩＳ適正はＡだ。そのランクだけとってみれば、代表候補生並みに高いＩＳ適正値と言えよう。だが、それは『ＩＳを動かす才能』であって『ＩＳで戦う才能』ではない。

武術や格闘技など、体育の授業ぐらいでしかした経験がない幸人に比べれば、ＩＳランクＣである箒の方がはるかに強いのではないかとすら思えてくる。何せ女性が強いこの世界において、剣道の全国大会で優勝するくらいなのだから。

（朝の自主トレ以外にも、何か格闘技でもやるべきかな）

見上げた視線の先、両者はまさに真正面から激突するところだった。

◇

不意を突いての瞬間加速、そのはずだった。

「なっ！！」

シャルロットの視界を占めるのは、斬撃でも衝撃砲を放つ甲龍の光でもない。

異形の連結刃『双天牙月』。

それがブーメランのように回転しながら投擲されたのだ。

「く、あ……！」

ハイパーセンサーが伝えてくる映像がスローモーションのように感じられる。ねっとりと絡みつくように極限まで圧縮された時の中、風を切り、飛来する双天牙月を、シャルロットは回避できない。すでに瞬間加速を発動してしまった状態では、軌道変更などできようはずもない。

「ぁあああっ！！」

だから、それを咄嗟に“斬り払う”ことができたのは奇跡に近い。予めコールしておいた近接ブレードを犠牲にして、投擲された双天

月牙はあらぬ方向へと飛んでゆく。もしもシャルロットが瞬間加速前に選択した武器が近接ブレードでなかったなら、結果は違っていただろう。

この機を逃すまいと、シャルロットは右腕の痺れを無視して鈴音への距離を詰めようとするが――鈴音がいない。

一秒の空白。

ハイパーセンサーの位置補足情報が送られてくる頃には、遅かった。

「はいだらぁあああああ――ッ！！」

真上から高速で突進してきた鈴音。彼女は棘付装甲（スパイク・アーマー）を盾のように前方に構えたままシャルロットと激突し、容赦なく跳ね飛ばしたのだ。

その音を、どう表現すれば伝わるだろうか？　その豪快な衝撃音は振動となって観客席にまで響くほどだ。

守りのためにとシャルロットが間に挟んだ左腕の盾は装甲ごと弾け飛び、衝撃で歪んだ中のパイルバンカーが露出している。これでは《灰色の鱗殻》は使用できない。

シャルロットが落下していく。それを決して逃がさぬと、鈴音は急降下で追撃する。その手にはブーメランのように戻って来た双天牙月が再び握られている。

繰り出される衝撃砲。それをギリギリで回避しながら墜落し続けるシャルロットはショットガンを呼び出して逆に散弾の六連射を叩きこむ。そして背中が土につく寸前になったところで、ＰＩＣ制御とスラスターを吹かすことで地面スレスレを滑るように飛んだ。

「ああもう！　逃がさないんだから！」

鈴音は多少のダメージを覚悟でトドメを刺しにかかる。……焦れ

た様に言う鈴音だが、警戒はしていた。どころか、相手の残り武装の種類とそれへの対応まで考えて、あえて突撃という戦法をとったのだ。そして、それこそが敗因だった。

シャルロットの手にあるのは、近接ブレード《ブレッド・スライサー》。あの双天牙月の投擲を斬り払った時に弾かれ、落下したはずのブレード。シャルロットは落ちていたそれを拾い上げると、それまでの進行方向とは逆方向へ急加速。

追われていたシャルロットが、追って来ていた鈴音に真っ正面から斬り結ばんと右手で近接ブレードを構えた。

振るわれるブレード。しかし鈴音はこれをあっさりと双天牙月で受け止める。

（――ッ！　これなら！）

双天牙月。これは元々二つに分かれた刀身を連結して両刀状態にしている武器だ。

（このまま連結を解除。左の刀で次の攻撃を受け止めて、右の刀で斬る！）

――はずだった鈴音は、しかし、腹部にシャルロットの左腕が押しつけられたのを感じた。

「この距離なら、外さない」

「か、あ……！？」

ズガンッ！！　衝撃で歪んでいるはずのパイルバンカー《灰色の鱗殻》が叩き込まれた。その一撃に鈴音は吹き飛ばされ、同時に《灰色の鱗殻》も無理な使用に限界を迎えたのか轟音と共に爆散した。

『試合終了。勝者――シャルロット・デュノア』

試合終了を告げるブザーが、アリーナに鳴り響いた。

◇

試合終了後、一夏はなかなかピットから出て来ない鈴音を心配して自分から会いにいくことにした。

（鈴のやつ、落ち込んでなければいいけどな）

学食で話した時には、あれだけ自信満々に放課後の模擬戦のことを語って来たのだ。きっと自分にいいところを見せようと張り切っていたのではないだろうかと、一夏は考える。

さて、どこにいるのかとキョロキョロとロッカールームを見渡す。

しかし、予想に反して鈴はあっさりと見つかった。奥にあるロッカーの前に座っていたのだ。

――体育座りで。

「お前……」

そのあまりの痛々しさに、一夏は無意識に口元を押さえていた。

「……いち、か……？」

「お、おう。残念だったな。けど凄かったぜ。鈴があんなに強かったなんてマジで驚いた」

一夏の言葉に、ハイライトを失っていた瞳が光を取り戻す。

「…そうかな……？」

「ああ、本当だ。俺はまだ素人だからハイレベルすぎてわかんなかったとこもあるけど、鈴がすごいってことは分かったぜ」

「……」

一夏の言葉に、鈴は俯き加減で何事か呟くと、いきなりガバッと顔を上げる。

「そ、そうよね、うん。……じゃあ、私がＩＳのこと教えてあげる。ＩＳのことは素人なんでしょ？　今日からコーチになってあげるわ！」

泣いた烏がもう笑うとはまさにこのことか。鈴音は何か期待するような、にこにことした顔で一夏に迫る。

そういえば「ＩＳの操縦を見てあげる」と、そんなことを昼休みに言われたことを一夏は思い出す。あの時は結局、箒が勝手に断ってしまって、鈴と箒の口喧嘩になって返事をしていなかった。ついでにクラス対抗戦に出れないことも教えていなかった気がする。

（今までクラスの奴らや箒に教えてもらってたけど、……まあ鈴でもいいか。いや、鈴の方がいいのか？）

箒の場合は、ＩＳの操縦よりも剣道の鍛錬の方を重点的に見てもらっている。ＩＳについてはこれまで野々宮や入江、入江に頼まれて来たシャルロットに指導してもらうこともあったが、鈴のＩＳは同じパワータイプだし実力も申し分ない。

「そうだな、鈴のほうがいいな」
「えへへ、そうでしょうそうでしょう」
「ああ、ＩＳが同じパワータイプだからな」
「……」

きらきらと輝いていた鈴の笑顔が曇り、途端に不機嫌なものになる。まるでクリスマスプレゼントが自分の欲しがっていた物とは違ったことに落胆する子供のようだ。

「はぁ、本当に何も変わってないのね」
「……どういう意味だよ？」

言葉通りの意味よ、と鈴はむくれてみせる。けど、一夏だし仕方ないかと、鈴は勝手に納得すると改めて一夏に向き直った。

「ねえ一夏。……学食では碌に話せなかったけど、久しぶりに会った幼なじみに何か言う事はないの？」
「ん？」

きょとん、とした反応を見せる一夏。その反応に焦れたのか、鈴はヒントを出すことにした。

「例えばさぁ――その、約束とか」

その言葉に、一夏は何か合点がいったようにぽんと手を叩いて見せる。

鈴の心臓がどきんと跳ねた。

「鈴、約束っていうのは、小学校の頃の、」
「う、うん。覚えてる……よね？」

恥ずかしそうに顔を伏せ、ちらちらと上目遣いに一夏を見上げる鈴。その姿は、転校していく前にはなかった『女の子らしさ』が感じられて、一夏の心をわずかに揺さ振った。

「たしか、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

「そ、そうっ。それ！」

「――おごってくれるってやつか？」

パァンッ！

「最っっっ低！　女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！　馬鹿ッ！　屑ッ！　本当に最低の屑だわ！」

肩を小刻みに震わせ、怒りに満ちた――そして涙を溜めた瞳で鈴は一夏を睨む。

「え、えーと……」

そこからの行動は素早かった。ロッカーからバックを取り出すと、そのまま扉ごとぶち破らんばかりの勢いで、ＩＳスーツを着たまま走り去ってしまった。

「……まずい、怒らせちまった」

しばらく経って、一夏ははっと我に返る。

「俺が悪い……のか？」

呟いた言葉は、誰にも聞かれることなく虚空に溶けていく。

一夏には何が何だかわからなかった。どうして鈴があそこまで怒ったのか、約束とは酢豚をおごることではなかったのか。いくら考えても分からない。

しばらく茫然と考え続け、しかし出てこない答えにいつまでも首を傾げていた。

頬に見事な紅葉を残したまま。

この後、一夏を探しに来た箒は泣きながら走り去る鈴音を目撃し、そして頬に引っぱたかれた後をくっきりと残す一夏を目撃する。

竹刀の音が響いたかどうかは、定かではない。

１１話　凰鈴音ＶＳシャルロット・デュノア（後書き）

国に帰ってから一年で候補生になったことを考えると、何気に鈴ってスゲー。
鈴はスーパーエリートだな、ベジータだよ。
ラウラが来るまで１年最強はシャルロット。でもアニメで彼女がラウラにパイルバンカーしてるシーンが腹パンしてるように見えてちょっと怖い。

しかし改めて考えてみると、どいつもこいつもチートじみたＩＳを使ってるのね。
一夏：当たれば一撃必殺
箒：ＥＮ無限回復＋廃スペック
セシリア：オールレンジ攻撃＋偏光射撃
鈴音：全方位対応の不可視攻撃
ラウラ：１対１ではほぼ無敵の停止結界

12話「だぁらっしゃあ――っ！！」

「というわけで、力を貸して欲しいんだ」

時刻は既に9時を回ったところだろうか。突然部屋に訪ねて来た一夏の言葉に、田辺正樹と葉川賢吾は困惑するしかなかった。

「つまり、どういうことだ？」

「まるで意味がわからんぞ」

クラスメイトとしてある程度の交流こそ持っているものの、二人は織斑一夏と特別親しいわけでもない。

一夏が何かを相談するのであれば、彼がいつもつるんでいる入江や藤原、あるいは小野田か比良坂に聞くものとばかり思っていた。

「いや、お前らって女子にモテるだろ？　だから適任だと思ってさ。俺じゃあ女の考えってのがよくわかんなくて……」

「「……」」

その時の葉川と田辺の表情は、きっと呆れてものも言えないといった様子だっただろう。

日本人にしては比較的色白の端正な顔にキザな微笑みを浮かべた美丈夫である、田辺正樹。

ざっくばらんに短く刈られた髪に、長身に鍛えられた引き締まった身体つき。頼れる雰囲気を持った、葉川賢悟。

確かに二人は男子の中では比較的女子からの人気が高い。朝食や昼食の際には、彼らのグループには女子が多く集まっている。それは嘘ではないだろう。

でも、それだけだ。

織斑一夏にとっての篠ノ之箒や凰鈴音のように、本気で惚れてアタックしてくる女子はいない。世にも珍しい男性ＩＳ操縦者。その中でも単に容姿が少しばかり優れているから寄って来ているだけなのだ。

（まさか、寄りにもよって一夏のやつに「モテる」などと言われるとは思ってもみなかった）

（……鈍感だとは思っていたが、実際にこういう言動を聞くと呆れちまうな）

「は、ハハハ……とりあえず一から説明してくれ」

「ああ。話はそれからだ」

そう促されて、一夏は語り出す。幼なじみだった鈴が転校してきたこと。学食で話したこと。放課後、約束を覚えていなかったということで喧嘩になってしまったこと。何故、鈴が怒ったのかわからないこと。

本来ならば一夏は鈴に謝ることもなく、勝手な解釈と誤解で鈴との関係を悪化させたままクラス対抗戦へと話は移る。そんな一夏が素直に他人に相談することができたのは、やはり自分以外の男子が３０人も身近にいるという環境の違い故なのか。

全てを話し終えると、それまで黙って話を聞いていた田辺と葉川は深いため息を吐いた。

「あ〜、うん。多分それ、約束の内容違ってるわ」

「一夏は今『酢豚をおごってあげる』ことだって言ったけど、それは一語一句間違いないのか？」

無論、彼ら二人はＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞を。その原作で一夏と鈴が交わした約束を知っている。知っているからこそ、一夏自身が変な思い違いをしていることも分かっていた。

いや、仮に知らなかったとしても、その約束の内容に対して察することはできただろう。話を聞くだけでも、ある程度推測することはできる。

「う〝……そう言われたら、一文字も間違いはないとは言えないけどよ……。意味合いは間違ってないと思うんだけどなあ」

そう言って呻る一夏の顔には叩かれた跡が未だに残っている。

（あれは確か……小六の時だったから……）

小学生の頃にした約束だったということは覚えている。鈴とは小五から中二の終わりまでは一緒だったが、あのような約束をしたのは一回だけだ。

場所は教室。夕暮れに染まった教室で――

「……あ」

「なにか、思い出せたのか？」

ふと、何かに気付いたような様子で一夏が顔を上げた。

「『料理が上達したら、毎日私の酢豚を――』……えっと、何だったかな。おごるんじゃないから。……ここまで出かかってるんだけどな」

「……おごってくれるんじゃないなら、『食べさせてあげる』とか『食べに来てくれる？』とかじゃないのか」

その誘導するような田辺の言葉が後押しになったのか、一夏はついに思い出した。鈴との約束。その正確な内容を。

「そうだ！　『料理が上達したら、毎日私の酢豚を食べてくれる？』だ。……あれ？　でも思い出せたのはいいけど、その約束って違う意味なのか？　俺はてっきりタダメシを食わせてくれるんだとばかり思ってたんだが」

新たに浮上した疑問に頭を抱える一夏の態度に、田辺と葉川は顔を見合わせる。……しばしの沈黙。そうして一度一夏をちらりと見てから、互いに頷くと一夏に向き直って言った。

このようなことは自分で気付くべきであると二人は思っている。だが、誰かが教えないと一夏が気づくことは一生ありえないであろうとも思っていた。

「それってさ、『俺のために毎日味噌汁を～』とかの話じゃないか？」

「本来は男がプロポーズする時のあれだけどな。今じゃ古臭い台詞だし、酢豚にアレンジされてるから分かり辛いが」

唖然。

その一夏の顔はまさにそれで固定されていただろう。

まったく予想外の答えに頭の回転が追い付いていけてないというのがありありと分かった。

「い、いやいや。二人とも深読みしすぎだろ」

絞り出すように出てきた否定の言葉。一夏の口からそれが出てくるまでには、少なくない時間が必要だった。

「まあ、小学生の頃の約束なんだろ。……でも、なぁ……」
「そ、そうだよ。小学生の時の約束でプロポーズなんておかしいだろ？　そもそも男が女に言うセリフだし。酢豚じゃなくて味噌汁だし！」
葉川の先程の台詞を繰り返すようにしてあたふたと否定する一夏の姿は、どこか滑稽に見える。
「小学生の頃で、中国から引っ越してそう時間も経ってない時なんだろ？　日本について詳しく知ってなかったとか、それでちょっと勘違いしてたってことも考えられるな」
続く田辺の考えに、一夏はう〝っとうろたえる。二人の考えていることが本当だという保証はない。だけど否定するだけの材料もない。
「だ、だいたい俺も鈴もまだ１５だぞ！？　結婚なんて早すぎると言うか……、いやだって、約束した後も鈴は普通に振る舞ってたし。中学の二年間も、弾も入れた三人で馬鹿騒ぎしてただけで、そんな素振りは一度も……」
まるで二人が見えていないかのように、落ち着きのない素振りで部屋を移動しながらブツブツと呟く一夏の姿は不審者そのものだ。というか思考がだだ漏れで口に出てしまっている。これが俗に言う『思っていることを無意識に口に出してしまう』というエロゲ主人公の特性なのか。
結果、カップラーメンが出来あがる程の時間を費やした一夏が出したのは、
「ど、どうすりゃいいんだよ……？」

という困惑の声だった。田辺たちは流石に哀れみを感じたのか、それとも別の考えによるものか、一応のフォローをしてやることに決めた。

「ハハハ、……はぁ。本人に確認するのが一番だけど、とにかく謝った方がいいのは間違いないな」

「ああ。そもそもこれは俺たちの推測でしかない。単純に、約束を覚えてなかったことを怒ってる可能性だってあるわけだ」

「そ、そうだよな。……明日、朝一番で鈴に謝ってくる事にするよ」

やっと落ち着いて来たのか、一夏は真剣な表情で頷く。

……いつもそんな顔をしていればさぞかし凛々しいのだろうにと、田辺と葉川の二人は思わずにはいられなかった。

◇

五月。

ゴールデンウィーク初日に自宅へと戻った僕たちは、その二日目にはＩＳ学園へとんぼ返りしていた。というのも、藤原があまり自宅に居たがらなかったためと、マスコミやそれ関係の張り付きが鬱陶しかったという理由がある。

というわけで、自宅からある程度の荷物を持って戻って来た僕らは今、アリーナで絶賛訓練中であった。

「だぁらっしゃあ――っ！！」

飛行体勢を反転。真正面から両足での飛び蹴り。

「ウエエェイッ！！」

それを、藤原は実体シールドで防ぐと右手の刀型近接ブレードで斬りかかってくる。

僕たちは今、ＩＳ『打鉄』を装着、展開している。

打鉄は純国産ＩＳとして定評のある第二世代の量産型。安定した性能を誇るガード型で初心者にも扱いやすい。そのことから多くの企業並びに国家、当ＩＳ学園においても訓練機として一般的に使われている。他に訓練機として使用されているのはデュノア社の『ラファール・リヴァイヴ』だと言えば、この二機の操作性の優秀さが理解できるだろう。

これまで学園の授業と放課後の自主訓練で何度か使用している打鉄とラファール・リヴァイヴだが、どちらかといえば打鉄の方が自分に合ってる気がする。だから訓練機の申請をして打鉄の使用許可が下りたことは喜ばしいことだった。

それにしても、いくら連休中で学園にいる生徒が少ないとはいえ、こんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるとは予想外であった。

（いや、それを言うのも今更か……）

よくよく考えてみれば、これまで放課後のアリーナ使用と訓練機貸し出しのための申請が妙に早く通っていた気がする。

（つまり、上からの指示。例えばＩＳ委員会や各国政府からの圧力があったということかな……？　男子をなるべく優先させるような）

僕たちの立場は『男性ＩＳ操縦者』という、これまでのＩＳの前提を覆す存在なのだ。

ＩＳ学園と言う特殊な場所にいるため干渉ができないが――いや干渉できないからこそ、僕らの存在は各国にとって喉から手が出るほど欲しいに違いない。つまり、入江や早乙女が専用機を得るためにとった方法は、相手側にとっても願ってもないことだっただろう。

そもそも、現代の女尊男卑社会形成の原因はＩＳによるものだが、それは篠ノ之束が悪いのかと言えば……少し違う。確かに束がＩＳを開発したことが全ての元凶であるものの、ここまで世界が女尊男卑に傾いてしまったのは、偏に各国政府の女性優遇政策によるものが大きい。つまりは政府の責任だ。

軍事力の要であるＩＳ。だが、いくらＩＳが強力でも操縦者がいなければ意味はない。他国よりも優れたＩＳ操縦者を少しでも多く揃えようとした結果、先進国が率先して施行した女性優遇制度。

“――これによって『女＝偉い』という構図はあっという間に浸透し、この十年で女尊男卑社会の完成というわけだ――”

だが、これは無視できない歪みも生み出している。

極端な女性優遇政策。それによって変化した女尊男卑社会による一般男性の不満と不安。

陥れや示談金目当ての虚偽申告による免罪事件の多発。

近年の急激な離婚率の増大や晩婚化・未婚化にともなう少子化問題。

これらはほぼ全ての先進国が抱える問題だ。中にはＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞の世界に変わる前から、僕たちの世界にもあった社会問題もあるが、この世界ではそれがさらに顕著で激しい

のだ。

仮定の話。あなたが道を歩いていて、すれ違った女性に『飲み物を買ってこい』と突然命令されたとする。それを拒否したら警察を呼ばれ『この男にいきなり暴力を振るわれた』という証言で問答無用で逮捕。有罪。

あるいは電車やバスに乗っていて、目的地で降りようと思ったら『この人痴漢です』と手を掴まれる。あなたは膨大な示談金を払うか、ほぼ有罪確定な状況で裁判に挑むかを迫られる。

……冗談のような話だが、これが実話であるのだから恐ろしい。

だから、もしも男がＩＳに乗って活躍し、モンド・グロッソを始めとするＩＳ競技で女性を打倒できたなら。女尊男卑の風潮が解決とまではいかないにしても、多少は改善されるかもしれない。あるいは男性ＩＳ操縦者である僕たちがＩＳを使える理由を解明できたなら。わずかな例外である僕たち以外にも、男がＩＳに乗れるようになるかもしれない。

そういった考えがあるのだろう。

それでなくとも男性ＩＳ操縦者である僕たちを調べることでＩＳのブラックボックスの解明に迫れるかもしれないと、各国のＩＳ研究機関や企業は息巻いているのが現状なのだ。各国は死に物狂いで男性ＩＳ操縦者の情報を欲しがるだろう。……まぁ、ほとんどが両親や野々宮の受け売りなのだが。

と、そんなことを考えていたせいか、接近していた藤原の姿に気づくのが遅れてしまったようだ。

「イーヤッハー！！　隙だらけだぜ、小野田ァ！」

「……お前そんなキャラだっけ？」

近接ブレードを大上段に構えてすっ飛んで来る藤原をひょいとよける。それだけで、藤原のやつは勢いのまま勝手によろけてしまう。

「あらよっと！」

そのまま足首を掴んで地面へと力任せに投げ飛ばす。しかし激突しない。藤原は逆さのままＰＩＣ制御で器用に空中で静止。

「甘いっての！」

「がっ！？」

が、僕が放った蹴りでもう一度飛ばされ、結局最後は地面とキスすることになった。……まあ、シールドバリアーのおかげでダメージは０だろうけど。

◆

「あ～畜生。なんで当たらねえんだろうなー」

「そりゃ当然さ。藤原は何か格闘技やってたわけでもなし、素人が大振りにブレード振り回しても無理だって」

格闘技なんてやったこともない僕にもバレバレでしたから。薪割りでもするようにブレード振り下ろしてくるんだもの。

朝から晩まで続いた自主訓練が終わって今はロッカールーム。シャワーを浴び終わった僕たちは、ＩＳスーツの上にジャージを着ているところだった。ちなみにモデルはミューレイ社製。一夏のようにへそ出しではないのであしからず。

え？　ＩＳスーツを着替えないのかって？　自室に帰ってから着替えますよ。イチイチ着たり脱いだりするのは面倒くさいのでＩＳ実習がある日は下に着てます。ほとんどの男子が。

「俺も剣道やろうかな」
「……別にＩＳの武装がブレードオンリーなわけじゃないんだし、今はとにかくＩＳに慣れることが先だろ」
とにかくＩＳの操縦に慣れること。今回の訓練の目的がそれだった。
ＩＳには意識というか、意思のようなものがある。白式がセカンドシフトする際に一夏が見た夢の中の女性もそれだ。そして、互いに対話する……操縦時間に比例してＩＳ側・操縦者側の双方で相互理解が進み、より性能を引き出し易くなるのだ。
これが訓練機にも当てはまるのかどうかは不明だが、ともかくＩＳを使う感覚というものに慣れておくにこしたことはない。
（しかし、そう考えると一般入学した生徒は専用機持ちに比べて圧倒的に不利だよな……）
世界各国から高い倍率を勝ち抜いてきた、ＩＳ適正も学力も高水準の選りすぐりのエリートである女子生徒たち。そんな彼女たちが最初のＩＳ実習では歩行訓練から始まり、中々操縦技術が上達しないのはＩＳを使用する機会が少ないからだ。
アリーナの使用許可さえ取れば気軽にＩＳを展開できる専用機持ちと、訓練機の使用許可が下りるのを順番に待つしかない一般生徒では操縦時間に大きな差ができてしまう。これは努力がどうこう言う問題ではない。努力する機会が与えられないこと。つまり経験値の不足が問題なのだ。
（ま、ＩＳコアに限りがある以上は解消できない問題なんだろうけど）

４６７個。その中途半端な数こそが、世界に存在するＩＳコアの総数だ。

「それもそうか。ま、射撃武器なしでやったのは正解だったな」

「だろ？　まずはＩＳを完全に動かせるようにならなきゃ」

今回の自主訓練。互いに武装は近接ブレードとシールドのみという条件を最初に決めていた。まずＩＳの動作を体で覚えるには射撃武装など必要ないと思ったのだ。……単に素人に射撃戦闘など無理だと織斑先生に断言されたことも原因だが。

それでも結果は散々だった。自分達の試合の動画を客席視点で見てみると酷さがよく分かる。動きに無駄が多く、ぶっちゃけ挙動不審だ。なまじセシリアやシャルロット、鈴の試合を見てきたため比較してしまう。……途中でブレードとシールド落として素手での戦いになってしまったのも失敗だ。

「なんつーか、先は長いな……」

「まだ連休はあるんだし、訓練機の申請も受理されてる。明後日は三宅や里中たちも参加するって言ってる。練習あるのみだろ」

「しかたねーか。何もできないままなんて、かっこ悪いもんな」

溜息一つ、決意も新たに互いに拳を軽く打ちつける。

寮に戻ればあとの時間は自由だ。連休なわけだし、実家から持ってきた携帯ゲーム機や読みかけのラノベなんかを消化してもいいかもしれない。訓練は大切だが、休息もまた必要なのだ。

「そういえば言い忘れてたけどさ」

「……なんだよ？」

靴を履き替え、鞄を肩にかけ、寮への帰り道で藤原は唐突に話を

振って来た。

「一夏、鈴と喧嘩したけど仲直りしたらしいな。……ほら、酢豚の件で」

「マジ……？」

おでれーた。いや驚いた。喧嘩の解決イベントが丸ごと消滅していたからどうなることかと思っていたのだが、……まさか一夏の方から気付いたのか？　まさかね。

「いや、俺も葉川たちから聞いた話なんだけどな……」

そうして藤原は語る。

あの日、シャルロットと鈴の模擬戦が行われ、一夏と鈴は原作通りに約束を覚えていたか否かで喧嘩になってしまう。変わったのはその後。何とその夜、田辺と葉川の部屋に一夏が相談に来たらしい。そして次の日の朝、一夏は朝の食堂で鈴に謝ったのだ。それはもう、土下座せんばかりの勢いで。

「で、結局どうなったのさ？　『毎日酢豚を～』の意味を自覚したんなら、鈴が自分に好意を持ってるってことも気づきそうだけど」

「いや、それは鈴が自分から否定しちまったらしい。『か、勘違いしないでよね！　小学生の頃の約束だし、私はただ約束をちゃんと覚えてなかったから怒っただけで……』って最後はうやむやなカンジになったみたいだ」

「……」

どうやら、変なところでツンデレ特有の悪癖が発揮されたらしい。

いや、一夏も悪いのか？

人がいる食堂でなく、二人っきりでならば……駄目だ。告白が成

功する未来が見えない。

「なんだかんだで結局変わらないのな。一夏も鈴も」

「一夏だから仕方ない」

呆れたような笑いが響いた。

◇

父は、母の顔色ばかりうかがう人だった。

――そんな父の姿が嫌いでした。

名家に婿入りした父。きっと母に多くの引け目を感じていたのだろう。それは当人にしか分からない苦労に違いない。

――それでも、そんな父の情けない姿は嫌いでした。

ＩＳの存在が世に出てから、父の態度は益々弱いものになった。

――母も、日に日に卑屈になっていく父の姿を嫌っているようでした。

母は強い人だった。女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めていた。

――厳しい人でした。母に“母親”として接してもらう機会こそ少なかったですが、その変わりに多くの成功と活躍を成した、わたくしの憧れの人でした。

だが、その両親はもういない。三年前に鉄道事故で他界した。

――両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのか、それはわ

たくしにはわかりません。いえ、それを言ってしまえば、どうして母が父の卑屈な姿を鬱陶しいと思いつつ最後まで別れなかったのか。それもわたくしには理解できません。

両親が消え、変わりに残ったのは莫大な遺産だった。

――大変な日々でした。遺産目当ての金の亡者から守るため、ありとあらゆる勉強を、努力をしました。ＩＳ適正テストも、元はその一環だったのです。

ＩＳ操縦者となったのも、政府から国籍保持のために出された様々な好条件を受け入れるためだった。

――第三世代兵器装備ブルー・ティアーズの稼働データと戦闘経験値収拾。日本にやって来たのは、それが理由でした。

そんな時、日本で３１人もの男性ＩＳ操縦者が見つかったとの報道が世界を駆け巡った。

――情けない男。いいえ、男は全員情けない生き物。わたくしはそう思いながらも、その男性の中に、あの織斑千冬の弟がいるとクラスメイトが話しているのを聞いて興味を持ったのです。

そうして出会った、あの男。強い決意を瞳に湛えた、初めて見る男性。

クラス代表決定戦。第一試合での、彼の姿。

「織斑、一夏……」

期待した。

あの人が、果たして本当に自分の理想の人かどうか、口先だけの男ではないか確かめたかった。

決闘を持ちかけたのは、演技半分。本音が半分。……いや、演技

は1割くらいで本音が9割くらいだっただろうか？

だが、彼と戦うことはできなかった。

一夏が負けたのではない。負けたのは――彼女の方だった。

「……っ」

無意識の内に噛んだ唇が切れて血が滲む。

彼女は負けるはずなどなかった。

彼女の駆るＩＳ『ブルー・ティアーズ』は欧州連合の第三世代機の中でも実用化で一番リードしている優れた機体なのだ。

対して、相手はカスタム機とはいえ量産型。それも第二世代型ＩＳだ。

なのに負けた。

それは、ＩＳではなく彼女自身が劣っているのが原因だとハッキリと突き付けられたようなものだった。

「……織斑、一夏……」

彼はあの時交わした宣言通りにクラス代表になった。自分は、敗北した。

クラスメイトの視線も、あまり友好的なものではなくなった。

彼との決闘を求める際に話した内容を誰かに聞かれていたらしい。

それが伝言ゲームのようにどんどん周りに伝わり、誤解を生み、あまりよろしくない噂も立つようになった。

口ばかりで偉ぶってる女。よくは知らないが、きっとそんな評価なのだろう。

別に、イジメのようなものがあるわけでも、露骨に嫌悪されてい

るわけでもない。
ただ、何か腫れものでも扱うような、どう接していいか分からないという困惑した態度であるのが隠し切れていなかった。
今や代表候補生や専用機持ちに対する尊敬は、全てシャルロットに向けられている。

「……おりむら、いちか」

自分は、果たしてどうすればいいのだろう？　どんな言葉をかければいいのだろう？
こちらから決闘を持ちかけ、あんな挑発をしておきながら負けるだなんて。まるで噛ませ犬だ。

これまでも何度か声をかけようとした。でも、できなかった。
できたのは、ただ後ろからその様子を窺うことだけ。
彼の後をこっそりとついていくことだけだった。
密かに調べ上げて満足することだけだった。

「……」

すっと、その写真をなでる。そこには一夏の姿が映っていた。何枚も何枚も、何枚も何枚もある無数の写真。

――知りたい。一夏のことを、知りたい。

そう思っても、彼に直接話す勇気がなくて。結局こんな形でしか一夏のことを調べられなかった。

これではいけない。
こんなの、自分らしくない。

セシリア・オルコットは、もっと堂々として、自信家でありそれに見合う実力を持った誇り高い存在でなければいけないのだ。

「――そうですわよね。こんなの、わたくしらしくありませんもの」

そう自分自身に言い聞かせて、彼女――セシリア・オルコットは立ち上がるとドアノブを握った。

今日はクラス対抗戦だ。今日こそは、織斑一夏に話しかけてみよう。

13話

クラス対抗戦、その当日。
会場である第二アリーナでは、今まさに第一試合が行われようとしていた。その組み合わせは1組対2組。

野々宮明ＶＳシャルロット・デュノア

片や噂の男子クラスの専用機持ち。片や連戦連勝のフランス代表候補生である。
アリーナ会場は全席満員。どころか、通路にまで立って試合を見物しようとする生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒や学園関係者などは、本校舎のリアルタイムモニターや専用のモニタールームで観賞だ。今やこの学園の人間全てが、このアリーナで行われる試合を見ることに集中していた。

「で、野々宮のやつは勝てるのかよ？」

観客席通路の一角、男子生徒たちの中でも一際ガタイのいい体格から目立つ男、早乙女大地が目線を下に問いかける。
それに答えたのは小柄な男子、梅原茂彦だった。平均よりも低い身長のせいか他のクラスメイトより子供っぽい印象だが、その身体つきは決して華奢ではない。

「勝率は、低いだろうなぁ……シャルロットの強さは1年の中じゃ最強クラスだろ？」

それは疑問ではなく、確認の言葉だった。

１年の専用機持ちの強さは、上から順にラウラ、シャルロット、鈴、箒と一夏とセシリアだ。（ただし、この基準は白式が第二形態になり、箒が第四世代機『赤椿』を受け取り、セシリアがＢＴ兵器を使いこなせていない段階のものであるが）

未だラウラ・ボーデヴィッヒは転校してきておらず、四組の代表候補生の専用機が未完成である以上、一年最強はシャルロットということになる。

野々宮もクラス対抗戦への代役が決まってからというもの、放課後は毎日アリーナで訓練を行っていたようだが……いかんせん時間が足りない。単純な強さは単純に鍛錬と実践の積み重ねの中でしか得られない。それに時間は相手にも同様に存在するのだから。

「んー、でもののみーにはがんばって欲しいな～」

そんな中、場の空気を破るようなのほほんとした声がした。

「「……」」

二人同時にそちらを向く。いつの間にか早乙女の足元にいたのは、のほほんとした声に違わぬのほほんとした雰囲気の女の子。のほほんさんこと、布仏本音がそこにいた。

彼女はいつもと同じ袖の余った制服を着て、眠そうな目でアリーナ上空に浮かぶ二機のＩＳを見ている。

「やー」

固まっている二人に何を思ったのか、のほほんさんはぶんぶんと手を振って朗らかに挨拶をする。のほほんさんは小柄な梅原よりもさらに背が低く、早乙女と並ぶとその差は一目瞭然。美女と野獣という表現がよく似合う。

「あ、ああ。こんにちわ。……あの、ののみーって野々宮のことだよな？」
「アイツと親しいのか？」
野々宮　明だから『ののみー』か、と納得しつつ早乙女と梅原は思わず質問していた。野々宮がのほほんさんと面識があったなんて初めて知ったからだ。
「そうだよー。ののみーとさとっちはよくお菓子をくれるんだよ～」
「ああ、そうなんだ……」
さとっち。……恐らく、里中悟史のことだろう。あいつはハリセンと一緒に大量の飴も持ち歩いているから。
二人はその光景を想像する。体にひっつくように接近していくのほほんさん。お菓子を貰うのほほんさん。手をパタパタ振って喜びを表現するのほほんさん。……なんか、男女の浮いた話ではなく、単に小動物に餌付けでもしているかのように思えてくるから不思議である。
「「……」」
「んー？　そんなに見つめられると照れちゃうよ～」
男子二人に見られるのが恥ずかしくなったのか、ダボダボの袖で顔を隠すようにしながらあたふたと動く様子はまさに小動物。ハムスターか電気ネズミだ。
……早乙女はぐりぐりとおざなりに頭をなでてやると、試合の観戦に専念することにした。

◇

アリーナ上空にはすでに灰色のＩＳとオレンジ色のＩＳ。『御風』と『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』が、互いに向かい合う状態で静止している。

「最初に言っておくけど、手加減はしないからね」

「ええ、もちろんです。私は織斑の代役でしかないが、負けるつもりはありませんよ」

野々宮明はシャルロット・デュノアの言葉ににこりと頷いてみせた。それは普段の彼が見せる笑みと同じだが、纏う雰囲気は常と違い闘志に満ちたものだ。

それを見て、シャルロットは改めて気を引き締める。

（明は、一夏の代役として出てるって話だけど……）

シャルロットの思考が、深く冷たく冴えていく。試合前日にまとめたデータと、これまで入江優助や織斑一夏たちと共に行った訓練時の動きから推測できる戦術予想を脳内でシュミレートする。

――野々宮明についての分析。

使用ＩＳ、御風＜ミカゼ＞。所属は日本自衛隊ＩＳ部隊。

元々は日米合同で開発された第三世代ＩＳのプロトタイプ。第三世代型兵器――イメージ・インターフェイスを使用した武装の詳細は不明。

タイプは高機動型。日本国が公開するスペックデータから推測する限り、単騎での高速戦闘では圧倒的な性能を持つ。が、その操縦

者の技量は未熟。機体性能を扱いきれていない可能性が大。また、元は軍用機であったものを他の競技用ＩＳと同様にコアにリミッターをかけたため、元のスペックデータに比べ機体性能に制限あり。

一般的なＩＳに比べ小柄。軽装甲。最低限の防御はシールドエネルギーと突撃用実体シールドに任せ、回避することを主眼に置かれた設計。パイルバンカー《灰色の鱗殻》を命中させれば一撃で絶対防御が発動し、エネルギー残量が最大であろうと三発で完全に削りきることが可能。

結論――機体背部に装備した大出力スラスター。高速機動戦用フライトユニットによる機動力は脅威だが、対処は十分に可能。

（無理に追いかけ回す必要はない。待ちに徹してカウンターを狙えばいい）

相対的な速度が上がれば射撃武器のダメージは大きくなる。当たりどころがよければ1発でアーマーブレイクを狙うこともできるだろう。相手は軽装甲なのだから尚更だ。

『試合――開始』

ビーっと鳴り響くブザー。その音が切れる前に、野々宮の姿は消えていた。刹那、彼のいた空間に銃弾の嵐が襲いかかる。高速切替による二丁のアサルトライフルからの攻撃。それが外れたのはひとえに野々宮が行った開始直後の瞬間加速という、シャルロットにとって予想外の行動によるものだった。

「イグニッション・ブースト……！　まさか、この短期間で習得したの！？」

わずかな驚愕。しかしシャルロットの感じたそれは純粋な敬意によるものであり、脅威から来るものではなかった。シャルロットの狙いが外れたのは野々宮がこれまで習得していなかった瞬間加速を使ったことに対する驚きが原因だ。決して、野々宮が補足出来ない機動で動いたからではない。タネがばれてしまった以上、そんな手品は通用しない。

――相手が自分の予想よりも速く、瞬間加速も交えて動くというのであれば、最初からそういうものであると弁えて軌道を予測すればいい。コールした両手の五九口径重機関銃を振り回すようにして弾幕を張る。

（……ええいっ！　これだけのスピードで動き回っているというのに、翻弄されてるのはこちらの方か…！）

瞬間加速によって瞬時にトップスピードに乗り、加速体勢からアサルトライフルによる攻撃に移っていた野々宮であったが、元より精度の低い射撃。シャルロットはあっさりと防御し、回避し、補足して反撃を開始。野々宮は再度の瞬間加速で一瞬で十メートルほど左にスライド。

そのまま円軌道を描くように、時折上下に機体を揺らして回りながら死角を攻めようとする野々宮。そんな彼を逃さぬと、両手に納めた武器をアサルトライフルにミサイル。ブレードにショットガンにカノンと目まぐるしく変化させながら急旋回を行うシャルロット。両者の動きはまさに対照的だ。

一見すれば互角に思える両者の戦い。だが、シールドエネルギーを減らされているのは野々宮の方であった。

（性能任せの加速で振り切るのも、限界か）

――野々宮明の分析するシャルロットの能力。

ＩＳは傑作機と名高いデュノア社のラファール・リヴァイヴ。そのフルカスタム機。格闘・射撃・防御の全てに対応できる汎用型であり、機体性能も初期の第三世代機に劣らない。

特筆すべきは二十以上の装備を量子変換した火薬庫とも言える武装の多さ。これに加え燃費の良さからエネルギー切れ、弾切れは狙えまい。その前に自分のシールドエネルギーと弾が尽きるのがおちだ。

そして、それら全ての武装を的確に使いこなす技量。瞬時に武器を呼び出す高速切替。攻防共に高いレベルで相手を翻弄する戦法『砂漠の逃げ水』。

操縦者の能力も近接戦・射撃戦共にバランスがよい。仮に接近戦を行う場合、警戒すべきは左腕のシールドに封印されたパイルバンカー。喰らえば一撃で絶対防御が発動し、シールドエネルギーを三分の二ほど減らすことになるのは必至。

結論――何これ無理ゲー？

（恐らくこれ以上試合を長引かせても、こちらが不利になるだけか……。ならば――）

覚悟は決まったとばかりに、野々宮はシャルロットの左斜め後方から突撃用の実体シールドを構えて襲撃をかける。

無論、ただ猪のように一直線に突進するのではない。背部大型ウイングに搭載された2基のロケットブースターと4基のスラスターを最大で吹かしつつ、ＰＩＣ制御と多方向推進装置による鋭角機動を駆使して虚を突く。御風は高度かつ簡易に操作可能なＰＩＣ及び空間制御システムを備えており、特殊な戦闘領域であっても『パッケージ』なしである程度の戦闘が可能なＩＳとなっているのだ。

「――《ブレイドナイフ》」

武装をコール。狙うは顔面。あるいは関節部。バリアーを貫通して装甲のない部分へと攻撃を通せば、操縦者保護の絶対防御発動によりシールドエネルギーを大きく減らすことができる。

しかし相手は怪物。同じ代表候補生であるセシリアや鈴音に第二世代型で勝利する技量を持っているのだ。そう簡単に当たるわけもなく――

「～～～～ッッ！？」

カウンターとして突き出されたシャルロットの左腕。そこに付けられた『盾殺し』の輝きに反射的に機体を操作し、野々宮はすんでの所で《灰色の鱗殻》の回避に成功する。しかしシールドが衝撃で弾かれ、シャルロットの左手には光の粒子から編まれた二連装ショットガンが。

「うぐっ！」

バリアーを貫通し、機体を突き抜けて走る衝撃に野々宮は顔を歪める。だが同時にＩＳに命令を送り、後退のバックブースト。再上昇。三次元跳動旋回を流れるように行う。

無理な動きと目まぐるしく揺れる視界に酔いそうになるが、それだけの価値はあった。アリーナの地面にはくっきりと、シャルロットが続けて撃ち出した凶弾が犯した暴虐の跡が刻まれていたからだ。もし回避が遅れていたら野々宮は敗北していたに違いない。

（……これは、僕の認識が甘かったかな。短期間でこれだけ運動特化機体を扱えるようになるなんて。それにあの無茶な機動、予想以

上だ）

（じょ、冗談ではない…！　距離をとっても距離を詰めても即座に対応してくる。いったいどんな反射神経をしているというんだ……！？）

互いに認識を改める。自分が考えていた以上の難敵であると。

◇

「野々宮くん、すごいですねー。普通、未熟な生徒があれだけの機動性のＩＳを全力で加速させたら外壁にぶつかっちゃいますよ」

短期間でここまで上達したのであれば称賛すべきことだと、Ａピットのモニターにリアルタイムで映し出される試合映像を眺めながら山田麻耶は感心したように呟いた。

「ふ。野々宮には試合までの期間、機体を完全に扱えるように訓練を徹底させた。……だが攻撃に関してはまだまだだな。攻撃に移った瞬間、精度が大きく落ちている」

ＩＳの基本的な飛行訓練の際、野々宮が御風の性能に追いつけていないことを千冬は見抜いていた。だからクラス対抗戦の代役に彼が抜擢された放課後、千冬の元に教えを請いに来た野々宮にはＩＳの性能に中身が追い付けるよう、基礎移動技能を徹底的にやらせたのだ。

急加速急停止。クロス・グリッド・ターン。一零停止。マニュアルによるＰＩＣ制御。そして瞬間加速。……近接格闘や射撃戦闘は後回しにした。

御風の基本性能は高い。例え競技用にデチューンされた状態であっても、狭いアリーナ内で全開の加速をすれば制御できずに激突してしまいかねないからだ。

今や『ＩＳを動かす』ことに対しては、野々宮明は既に一般入学した生徒の中では十分なレベルにあると言えるだろう。……だが、『ＩＳで戦う』ことについてはまた別だ。

ブレードを用いた接近戦闘。銃を使った射撃戦闘。どちらも代表候補生に比べれば付け焼刃もいいところだ。

「だが、やる気だけで言えば十分だ。変なプライドなど捨て、真っ先に私に教えを請いに来たのだからな」

「あはは……生徒の中には、教師に相談せずに自分一人だけでやろうとする子もいますからね……あれ？」

「どうした？」

質問には答えず、麻耶はブック型端末の画面を叩くと表示される情報を切り替えていく。やがて違和感の元に気が付いたのか、目的の情報――アリーナのステータスチェック画面を表示させた。

「え、えっと。遮断シールドのレベルが４に設定されてるんです。しかも、出入り口の扉がすべてロックされて、……ハッキングされた？　これじゃアリーナから出られない」

「どういうことだ？　……いや、生徒たちはこれに気付いているのか？」

「い、いえ。今アリーナではほぼ全ての生徒が試合を見ていますから。別室のモニタールームも恐らく……」

千冬の顔が険しく鋭いものに変わる。学園などという名前が付けられてはいるが、ここはＩＳに関するあらゆる機密が集まる場所だ。

如何なる国家・組織・企業の干渉も拒むため、法的にもそうだが、あらゆる意味で万全の守りを布いているのだ。

そのＩＳ学園のアリーナにハッキングなど……こんなことが可能なのは、千冬の知る限りは一人しか心当たりはない。

「わかった。使える生徒数名と教師たちでシステムクラックを行う。他の生徒たちには決して覚られるな」

「は、はい！」

言いようのない不安。ざわざわとした感覚が麻耶の背中を這いずり回る。一体誰がこんなことを行ったのか。どうやって？　何の目的があって？

幸いなことに、この事態に気が付いている生徒はいないため大きな混乱は起きていない。このまま全試合が終わるまでにシステムのコントロールを取り戻せば、“何もなかった”ままクラス対抗戦は終わるだろう。

何もおかしなことは起こらず、平和に、でもどこか騒がしく、今日という日が終わって欲しい……。

試合を通して、生徒たちは互いに競い合い、互いを認め、きっと成長してくれるだろう。

まだまとまりのない各クラスも、この試合をきっかけに連帯感を持って団結してくれるかもしれない。

だから、だからどうか……何も起こらないで……！

「うふふ、そんなわけないじゃん♪」

暗闇に飲まれた室内で、ディスプレイの明かりだけが煌々と輝いていた。

その闇の中ぼんやりと浮き上がる奇妙な形の椅子に座った女性は、まるでゲーム機のコントローラーのようなものをカチカチと動かしながらディスプレイを見つめている。

その言葉にいったい何の意味があるのか。

多分、何の意味もない。

彼女の前では、あらゆるものが無力なのだから。

◇

時間は、試合が開始する少し前に巻き戻る。

織斑一夏はアリーナから離れた場所にいた。他の生徒たちは皆クラス対抗戦の観戦に集中しているのか、アリーナから比較的離れているこの場所では人気が感じられない。

何故彼が試合も見ずにこんな場所にいるのかと言えば、……その理由は呼び出されたからである。

――セシリア・オルコットに。

この場所まで一夏を連れてきた当の本人であるセシリアは未だ何も言わず、モジモジとした様子で時折ちらちらと一夏を見ている。

一夏も、何か言うべきだとは思っているのだが、何を話せばいいか分からないために妙な沈黙が続くこととなっていた。

（これってやっぱ、アレだよな。決闘の約束について……）

思い当たることと言えばそれしかない。

あの後に鈴が転校してきて、喧嘩して、色々とありすぎてすっかり忘れてしまっていた。

（そりゃあ気まずいよなぁ。あれだけ大見え切って、結局シャルロットに負けたんだから）

対して、一夏は試合にこそ出れなかったとはいえ、早乙女に勝利してクラス代表になったのだ。プライドの高そうなセシリアにとって、それがどれ程に辛い事かは想像に難くない。

「あ、あの……！」

「おう」

長い沈黙の後、セシリアが口を開いた。
その瞬間だった。

ズドオオォォンッ！！

「「！？」」

大きな衝撃に地面がぐらりと揺れる。まるで巨大なナニカが地面に激突したかのような衝撃音。
視線を向けると、校舎から離れたグラウンドからもくもくと土煙が上がっている。どうやらさっきのは『それ』が学園内のグラウンド中央に降り立ったのが原因らしい。

「な、なんだ？　いったい何が起こって……」

状況がわからず混乱する一夏とは違い、セシリアの行動は早かった。
一瞬の内にＩＳを待機状態から展開し、一夏を抱え上げると大地から離れるように飛翔する。

「う、うわっ！？　せ、セシリア――」
「何をしているんですの！？　早くＩＳを展開しないと危険ですわ！」
「き、危険！？　どういうこと……っ！！」

間一髪、先程までいた空間が熱線の砲撃で埋め尽くされる。一拍遅れてそれがビーム兵器による攻撃だと気づき、一夏は青ざめた。
――熱源反応。所属不明のＩＳと断定。警告。ロックされています。

白式を展開して、即座に脳内に響いてきたのがそれだった。ハイパーセンサーによる緊急通告。謎のＩＳによる敵対行動。

「くっ！」

白式を待機状態から呼び出したことでセシリアから離れ、一夏は上空に滞空したまま一定の距離をとった。……クラス代表決定戦からすでに数週間。白式のダメージはある程度回復している。いや、そもそもＩＳを起動させ、戦うだけなら例え損傷していても問題なく行える。単に損傷時の稼働蓄積経験は不安定な状態での特殊エネルギーバイパスを構築し、平常時の稼働に悪影響を及ぼしかねないために対抗戦への参加許可が下りなかっただけだ。

こちらがＩＳを展開したと同時、謎のＩＳもふわりと浮かび上がってくる。

「なんなんだ、こいつ……」

それは異形のＩＳだった。深い灰色をしたそのＩＳは手が以上に長く、爪先よりも下まで伸びている。しかも首と言うのがない。頭と肩が一体化しているような形状だった。

何より特異なのが、その『全身装甲（フル・スキン）』だ。

通常、機体の周辺に張られたバリアー――シールドエネルギーによって防御を行うＩＳは部分的にしか装甲を形成しない。防御型で実体シールドを搭載している『打鉄』や、防御に特化させた砲撃戦型ＩＳである『シュラウド』だって、操縦者の肌が１ミリも露出していないわけじゃない。

腕を入れると二メートルを超える巨体。全身に取り付けられたスラスター口。頭部にはむき出しのセンサーレンズ。腕にはビーム砲口が左右合計四つ。

こんなＩＳを見た事は、ない。

「お前、何者だよ」
「……」
一夏の呼びかけにも、謎の襲撃者は何も答えない。いや、次の瞬間、敵ＩＳは体を傾けて突進してきた。これこそが答えだとでも言うように。
「どうやらお友達になりに来たってカンジじゃなさそうだな……！」
「あれをどう見たら友好的な挨拶に見えるんですの！」
軽口を叩きつつ回避。一夏とセシリアはアリーナと校舎から離れるべく飛翔する。少しでもこの襲撃者を引き離さなくてはならない。幸いにも生徒たちの大半はアリーナで試合の観戦中とはいえ、いつこのＩＳがアリーナに矛先を向けて生徒たちを襲うかわからないのだ。
それに地上から上空に向けてビームを撃つのであれば、周りの被害は最小限に抑えることができる。
「一夏さん、わたくしが時間を稼ぎます。その間に――」
「逃げろってか……？　女を置いてそんなことできるかよ」
「わたくしも最後まで相手をするつもりはありませんわ。こんな異常事態ですもの、すぐに学園の先生たちが気づくはずです。むしろ一夏さんが先生方に異常事態を知らせて、」
最後まで言う事はできなかった。放たれるビームの連射。そして、でたらめに長い腕を振り回しての接近をセシリアと一夏は回避する。
「どうやら、やる気満々みたいだな。逃げても回り込んで来そうだ」
「……仕方ありませんわね。援護はわたくしにお任せになって！」

「ああ。俺は突っ込むことしか能がないんでな。任せる！」

最後に目を合わせ意思を確認すると二人は飛び出す。

アリーナの外、生徒たちが気づかないそこで、戦いが始まった。

簡易的な人物紹介（前書き）

オリキャラが増えたので再確認のためにも書いてます。
３０人もだそうって時点で無謀なのかもしれませんが……。

簡易的な人物紹介

・小野田幸人（おのだゆきと）
オリ主であり、解説役。当初の予定ではこのＳＳは幸人視点でのみ進行するはずだったが、多数のオリキャラを出す過程でモブの一人のようになってしまった。

・藤原恵一（ふじわらけいいち）
幸人の友人。食堂での一件以来、一緒に千冬に怒られたことで連帯感ができたのか一夏とは何かと仲がいい。

・野々宮明（ののみやあきら）
気難しそうな真面目くんオーラを出してる眼鏡っ子。専用機持ち。所属は日本自衛隊ＩＳ部隊。

・入江優助（いりえゆうすけ）
グラサンをかけた軽薄そうな男。専用機持ち。所属はフランスのＩＳ企業「デュノア社」。

・早乙女大地（さおとめだいち）
小麦色の肌の健康的なマッスル。専用機持ち。所属はアメリカの日系ＩＳ企業。

・比良坂崇（ひらさかたかし）
常に顔色の悪い亜麻色の髪の男。保健室の常連。

・里中悟史（さとなかさとし）
関西弁が特徴的なツッコミ担当。常にハリセンを持ち歩いていて、どこからともなく取り出す。

・葉川賢吾（はがわけんご）
クラスメイトの一人。中学時代は野球部部長をしていた頼れる男。
・新垣譲治（あらがきじょうじ）
クラスメイトの一人。お調子者かつだらしない。
・梅原茂彦（うめはらしげひこ）
クラスメイトの一人。小柄だが運動神経抜群。
・森谷鉄郎（もりやてつろう）
クラスメイトの一人。シャルロット大好きで脳天気な性格。
・橋本純也（はしもとじゅんや）
クラスメイトの一人。ネガティブかつ何事にも受け身な少年。
・柴田と難波（しばたとなんば）
クラスメイト。よく一緒にいる。
・金田一一二三（きんだいちひふみ）
クラスメイトの一人。無類のメイド好き。
・柊和晃（ひいらぎかずあき）
クラスメイトの一人。気が強いが、飛行機や怪談などに弱い。
・田辺正樹（たなべまさき）
クラスメイトの一人。男子の中でも特に精悍な顔立ちのため、女子からの人気が高い。
・門野隼（かどのしゅん）

クラウメイトの一人。実家は有名な老舗レストランで、歳の離れた兄が店を継いでいる。厨房でなら負けないぜ。

・浅越稔（あさごえみのる）
クラスメイトの一人。身長は平均的なのだが、童顔のせいで幼く見られがちなのがコンプレックス。

・新庄智治（しんじょうともはる）
クラスメイトの一人。小柄な体躯に人好きのする雰囲気を纏った明るい少年。

・鳴海翔平（なるみしょうへい）
クラスメイトの一人。甲高い声で早口に喋る。自称カラオケが大得意。

・九澄誠人（くずみまこと）
クラスメイトの一人。同人作家。ＩＳ学園一部女子の間では凄まじいコネクションを持つ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7994x/

ＩＳ　～クラスメイトは全員男～

2011年11月22日01時05分発行